

【第1号】

# 懷德堂研究

# 1

懷德堂研究センター



# 懐徳堂 史跡マップ

Historic spots map

懐徳堂史跡マップは、懐徳堂の主な史跡を Google Map と連動させ、インターネット上に表示するものです。メイン画面となる「地図」は、「大阪」「関西」「全国」に大別して表示され、それぞれ拡大・縮小が可能です。また、これとは別に関係史跡約30箇所をまとめた「史跡一覧」、モデルコースを表示した「おすすめルート」もご用意しました。

## 地図

「大阪」「関西」「全国」に大別した地図が表示され、それぞれの史跡について写真付きで解説します。

## 史跡一覧

今回紹介した約30箇所の史跡を一覧にまとめました。それぞれの所在地とアクセス方法もご紹介しています。

## おすすめルート

大阪市北部には、懐徳堂の史跡が集中しています。これらを効率良く巡るためのモデルコースをご用意しました。

## お知らせ

【2009.03.12】 懐徳堂史跡マップを開発しました。

### 史跡マップの制作

懐徳堂史跡マップは、懐徳堂記念会創立100周年事業の一環として、平成20年(2008)夏が別荘に集中しました。各歴史科化したのは、『懐徳堂事典』(湯浅利雄著、大阪大学出版会、2009年)の巻の裏に懐徳堂歴史地図です。これを基に、さらに調査を進め、今回、約30箇所を関係史跡として提示しました。史跡についてはすべて現地調査を行いました。現地調査に写真撮影に協力していただいたのは、草野友子さん(大阪大学大学院生、中国哲学研究室)、金城未来さん(同)、中村麗君(同、日本史学研究室)、南清孝之君(大阪大学文学部学生、中国哲学研究室)の四名です。

### 参考文献

『大阪産物人物事典』(近松肇文著、東方出版、1995年)  
『懐徳堂事典』(湯浅利雄編著、大阪大学出版会、2009年)  
『懐徳堂 約30の字畫—懐徳堂の美と学問』、湯浅利雄著、大阪大学出版会、2009年12月)  
『江戸時代の職奉行』(湯浅利雄編著、大阪大学出版会、2009年2月)

### 今後の課題

(1)さらに史跡の調査を進め、点数を増やします。  
(2)史跡一覧からもっと画面にのびることができるようにします。  
(3)おすすめルートを増やします。  
懐徳堂史跡マップは閲覧者の皆様の声によって、さらに充実させてまいります。ご意見などございましたら、懐徳堂記念会までご連絡下さい。

(大阪大学大学院文学研究科教授・懐徳堂記念会運営委員 湯浅利雄)

〔財〕懐徳堂記念会事務局  
TEL: 06-6843-4830 / FAX: 06-6843-4850

[懐徳堂記念会ホームページへ](#)

口絵 1 懐徳堂史跡マップ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitokudo/> 内)



口絵2 キンケイ (p.72 「錦雉賦」 参照)



口絵3 東福寺の紅葉 (p.92 「通天橋霜樹」 参照)

# 懷徳堂研究 第1号 目次

懷徳堂研究の可能性……………湯浅邦弘(3)

中井竹山・履軒の礼学についての一考察……………田世民(15)

『履軒古風』卷一翻刻・訳注(附卷二校勘記)……………湯城吉信(35)

中井木菟麻呂『懷徳堂水哉館先哲遺事』卷五・卷六・卷七翻刻……………釜田啓市(101)

「懷徳堂史跡マップ」について……………草野友子(145)

書評『ニコライ堂の女性たち』……………三谷拓也(153)

投稿規定・彙報(二〇〇九年一月〜二月)……………(177)

大阪大学大学院文学研究科・文学部 懷徳堂研究センター

二〇一〇年二月



## 懐徳堂研究の可能性

— 韓国の書院と祖先祭祀儀礼から考える —

湯浅邦弘

### 一、懐徳堂研究の歴史

#### 懐徳堂文庫と朱子学の研究

大阪大空襲の戦火をくぐり抜けた懐徳堂の資料は、戦後、大阪大学に寄贈され、「懐徳堂文庫」と命名された。この文庫の特徴は、江戸時代から昭和に至る貴重な資料群がまとまって残されているという点に、まず求められるであろう。また、資料の形態が、漢籍に加えて、和書・文書類、さらには扁額・聯・扇・印章・版木などの器物に及んでいることも大きな特色である。さらに、現在も、懐徳堂記念会の購入や関係者からの寄贈により、資料点数が増加している点も、「生きている文庫」として高い価値を持っている。懐徳堂文庫の総点数は現在約五万点にのぼる。

この懐徳堂文庫に関する研究は、まず、昭和二十年代から四十年代にかけての資料調査に始まり、昭和五十一年（一九七六）の『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部）の刊行によって一応の基盤が整えられたと言える。その中から、懐徳堂の中心的学問である朱子学の特色について研究が進められた。陶徳民氏の『懐徳堂朱子学の研究』（一九九四年）は、その代表的な成果である。懐徳堂資料の大半が江戸時代の漢籍に関わるものである以上、それは当然のことでもあった。

そして、昭和五十年代後半から、懐徳堂記念会の事業として行われた「懐徳堂古典講座」などの公開講座、昭和六十年代から始められた貴重文献の復刻刊行事業などによって、徐々に懐徳堂研究の成果が一般にも知られるようになった。こうした環境の中から生み出されてきたのは、もちろん江戸時代の懐徳堂についての研究である。

平成十九年（二〇〇七）に刊行された懷徳堂の総合的研究『懷徳堂研究』（湯浅邦弘編著、汲古書院）はその一例であろう。

### 新たな展開

しかし近年は、懷徳堂研究に新たな三つの傾向が見えてきた。第一は、漢籍以外の資料に関する研究。懷徳堂には、膨大な漢籍の他、書画、印章、屏風、手紙、版木など、さまざまな資料が含まれている。近年、ようやくこれらの資料にも目が向けられるようになった。たとえば、印章。懷徳堂には、約二百四十の印章と印譜が残っている。江戸時代の印章と印譜がこれほどまでに完璧に残っているのは珍しく、研究対象として大いに注目される。拙著『墨の道 印の宇宙―懷徳堂の美と学問―』（大阪大学出版会、二〇〇八年）はその研究成果の一端である。第二は、デジタルアーカイブの推進。懷徳堂の資料は約二百年以上前の資料が多く、劣化も進んでいる。誰にも見せず保存すれば劣化は防げるが、研究の進展にはつながらぬ。一方、多くの人に公開すれば研究に寄与するが、資料の劣化は加速する。この矛盾を解消するのが、デジタルアーカイブの手法である。

懷徳堂の資料については、この数年、精力的にデジタ

ルアーカイブ化が進められている。江戸時代の懷徳堂を復元したCG画像や貴重資料のデータベースなどの公開も進んでいる。現在、懷徳堂研究に関するデジタルコンテンツは、「WEB懷徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」に集約され、インターネットで公開されている。

第三は、重建懷徳堂期の研究。重建懷徳堂とは、大正時代に再建された懷徳堂のことである。これまでの懷徳堂研究は、江戸時代の懷徳堂に集中していた。しかし、約百年前にできた重建懷徳堂も、ようやく歴史研究の対象になりつつある。中井木菟麻呂の日記や西村天因の書簡の解説により、重建懷徳堂成立の経緯が徐々に明らかになっていく。竹田健二氏の『市民大学の誕生』（大阪大学出版会、二〇一〇年）はその成果の一端である。こうした研究によって、近世から近代に至る一つの学校の歴史が総合的に解明されると期待できるのである。

## 二、韓国の宗教儀礼

ただ、懷徳堂の魅力と研究の可能性は、これに尽きるものではない。そうしたい思いを強くしたのは、さきごろ韓国の書院を視察し、祖先祭祀儀礼に参加したことによる。

日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）「東アジア

における伝統教養の形成と展開に関する学際的研究」(研究代表者・関西大学吾妻重二氏、研究分担者・湯浅邦弘ほか)の活動の一環として、平成二十一年(二〇〇九)十一月一日から五日まで、大韓民国慶尚北道安東市で開催された国際シンポジウム「朱子家礼と東アジアの文化交流」に出席した。安東市は、ソウルから車で東南に約三時間の山の中であり、儒教文化を色濃く残している地である。ここに、儒教文化の振興を目的として設立された「韓国国学振興院」があり、その振興院と関西大学文化交流学研究拠点との共催で国際シンポジウムが開催されたのである。

### 陶山書院と謁廟礼

学会に先立ち、十一月二日は、関係文化施設の視察・参観が行われた。まず、陶山書院に向かう。ここは、朝鮮朱子学を集大成した李退溪(一五〇一〜一五七〇)の学問を讃えるため、一五七四年に設立された書院。安東市の中心部から北東二十八kmの地点にある。前には洛東江、背後には小高い山という山水秀麗の地である。見事な紅葉に彩られていた。正門を入ると、山の斜面にそっていくつかの建物が配置されている。李退溪が講学した陶山書堂、学生たちの寄宿舎である甌雲精舎、版木を収

陶山書院典教室





蔵する蔵板閣、講堂である典教堂など。

典教堂には、李朝中期の名筆家韓石峯の筆による「陶山書院」の扁額が掛かっている。この典教堂に招き入れられた我々一行は、突然、着替えを指示された。着替えと言っても、「道袍」と呼ばれる儀礼用の服と冠を着けるだけなのであるが、厳かな気分になり、典教堂の裏手にある尚徳祠（李退溪の神位を安置する）において謁廟礼を行った。

陶山書院は、嶺南儒学者の精神的支柱としての機能を果たし、朝鮮書院のモデルとなった。典教堂には朱子の白鹿洞書院掲示が掲げられており、懷徳堂と同じく朱子学を根本精神とした学問所であることが分かる。また、弟子たちのみならず、地域の有力者にも支持され、宗教施設としての一面も備えている。

### 鶴峰宗宅と祠堂

続いて、安東金氏台庄齋舎を訪問した。ここは、安東金氏の始祖金宣平の祭祀を行うために一七五〇年に建てられた齋舎である。安東地域の齋舎の中では最大規模で、裏手には立派な墓所もあった。毎年陰暦十月十日に祭祀が挙行されるという。

午後向かったのは、鶴峰宗宅である。ここは、李退溪



陶山書院における謁廟礼参加

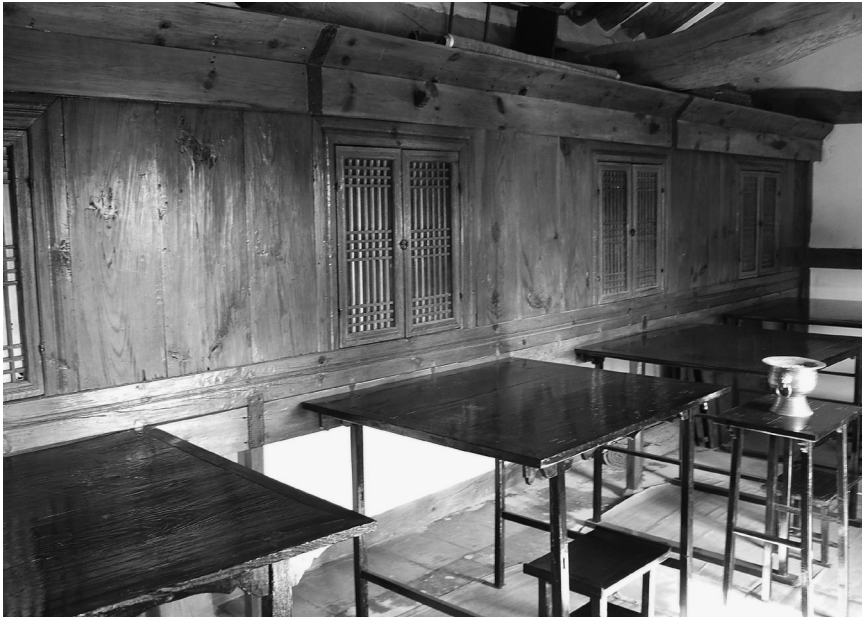
の弟子として名高い金誠一（号は鶴峰、一五三八〜一五九三）の旧宅である。ここで最も注目されたのは、祠堂である。朱子『家礼』に記載されたとおり、四つの区画に分かれた観音扉の四龕があった。向かって右から順番に、父、祖父、曾祖父、高祖父の神位をそれぞれ横に収めている。特別に、一つの龕を開き、中から神位を取り出して見せていただいた（次頁参照）。

江戸時代の懷徳堂にも、祠堂があったという。それは、旧懷徳堂平面図から分かるのであるが、朱子『家礼』の記載通りではなく、独立した構造物ではない。あくまで学舎の一室を祠堂に充てているというものである。また、部屋の内が四つの小さな空間で仕切られていたようであり、これが四龕に相当するものであったと推測される。だが、朱子『家礼』に記載されている通りの四龕と横と神位とを实見したのは、今回が初めてであり、極めて貴重な体験であった。

また、ここには、雲章閣という資料館が併設されている。数多くの指定文化財典籍・古文書に混じって、朝鮮最古という鶴峰使用のメガネや革靴などもあり、注目された。

金誠一旧宅





金誠一旧宅祠堂



同・神位

### 豊産金氏大枝斎舎と不遷位祭祀

この日の夜は、金楊震（一四六七〜一五三五）の旧宅に向かった。ここで挙行される不遷位祭祀に参加するためである。

朱子『家礼』にある通り、祖先祭祀は、通常、高祖父から父まで四代の祖先を祠堂で祀る。右の鶴峰宗宅の祠堂にあった四龕がそれを良く示している。そして、世代が交代すると、それぞれの神位は右から左へと一つずつ移動する。向かって左端にあった高祖父の神位は、祠堂から神位を遷し、それ以後は墓所において墓祭を行う。

ところが、国家や一族にとって極めて重要な業績をあげた祖先に対しては、永遠に神位を遷さず祠堂で祭祀を執り行う。これが不遷位祭祀である。

従って、不遷位を祭るのは、一族の榮譽であり、かつ、一族の結束を再確認する重要な儀式なのである。安東全体では、四十七人の不遷位を祭っているという。この金氏の不遷位祭祀は毎年陰暦の九月十六日に行われ、それがちょうど我々が参加した日であった。地元のテレビ局も取材する中、大枝斎舎の虚白堂の中で祭祀は進行了。

本来は、前日の深夜から当時の明け方にかけて挙行するのが正式な祭祀であるが、近年は諸般の事情により、夜七時くらいから開始するという。捧げられた供物は、その後分配され、虚白堂の両側に併設されているオンドル部屋で、参加者全員が会食した。ここまでは、一連の儀式である。最後に、「時刻記」と書かれた参加者名簿に記載して、散会となった。

### 三、国際学会と研究の視点

#### 蔵板閣の版木

翌十一月三日と四日、二日にわたって国際学会が開催された。場所は安東市内から二十kmほど山の中に入った



金楊震旧宅不遷位祭祀

韓国国学振興院である。初日午前中は、まず国学振興院に併設されている儒教文化博物館を参観した。四階からなる大きな建物で、「儒教との出会い」「儒教と修養」「儒教と国家」などテーマ別に展示室が分かれている。

中でも最も注目されたのは、蔵板閣である。国学振興院が全国から収集した版木や扁額が五万七千点収蔵されている。先に記した陶山書院の扁額も、実は現地にある方がレプリカで、こちらに収蔵されているのが本物である(次頁参照)。また、陶山書院所蔵の古書約五千点と版木二七九〇点も、保存と学術研究のため国学振興院に委託されている。二棟に分かれた蔵板閣には、天井までびっしりと版木が配架されていた。懷徳堂文庫にも二百枚を超える江戸時代の版木が残されているが、こちらは朝鮮版なので、ひとまわり大きい。国学振興院では、「木版十万枚収集運動」を展開していて、十万枚に達したら、世界文化遺産に申請するという。

### 郷校と懷徳堂

午後から翌日にかけて学会が開催された。全体テーマは「朱子家礼と東アジアの文化交流」。筆者が発表した四日の分科会は「日本家礼文化の諸様相」であった。筆者の発表タイトルは、「朱子『家礼』と懷徳堂『喪祭私説』」



韓国国学振興院蔵板閣

というもので、江戸時代の懷徳堂が朱子の『家礼』をどのように受容していたかを、中井甕庵の『喪祭私説』と懷徳堂の祠堂の設置状況を基に解説した。

予想外に、フロアからの質問が相次いだ。一つは、朝鮮の郷校と懷徳堂との性格の違いに関するものである。都の国立大学に対して、地方の公立学校を郷校と言い、これが朝鮮儒教の展開において重要な役割を果たしている。この郷校と懷徳堂とは違うのか。まず、設立の経緯が異なる。懷徳堂は、江戸時代大坂にできた学校であるから郷校的であるとは言えるが、設立したのは、五人の有力商人であり、その後も半官半民の学校として大坂町人による運営が続いた。また、受講生は、郷校の場合、科挙を目指す知識人であったが、懷徳堂では町人から武士までさまざまであった。科挙制度の導入されなかった日本では、目指すものも異なっていた。受験ではなく、懷徳堂という名称が示す通り、漢籍の学習を通じて倫理道徳の体得であった。

また、郷校にはさらに二つの機能があった。出版所と宗教施設という機能である。陶山書院に大量の版木が残されていることから分かるように、郷校や書院は、地方の出版文化に大きく貢献した。また、地方の著名人を祭祀する宗教拠点でもあった。これに対して、懷徳堂は、



蔵板閣所蔵扁額



印刷所としての機能は備えていたようである。旧懐徳堂平面図を見ると、「学校刷り部屋」という一画がある。実際に懐徳堂蔵版として刊行された書もある。だが、それは、懐徳堂の学者が著述した書が中心であって、広く書物を刊行販売するというものではない。また、懐徳堂には祠堂があったが、それは懐徳堂歴代の学主を祭るための空間で、広く大坂の宗教施設として機能していたわけではない。

今ひとつの質問は、義と利に関するものであった。筆者の発表で、懐徳堂において利益追求の基盤として「義」が重視されたことを説いた。ただ、利は決して否定されていたわけではなく、「義」を実践する者には後から必ず「利」がついてくると説かれていたことも紹介した。これに対して、朝鮮儒学では、「利」をそのように捉えることはなく、そうした「利」と「義」の関係が生じたのはなぜかという質問である。もちろん、「利」と「義」をさほど対立的に捉えないのは、中国儒学の中にも見えるが、もう一つ、土地柄の問題として、筆者は、商業都市大坂の気風を説明した。

### 東アジア文化圏における懐徳堂

このように、韓国の歴史文化から逆照射することに

よつて、懷徳堂研究の新たな視点が得られたように思われる。

まずは、資料の特殊性である。韓国でも、版木を大切に保存し、収集活動に努めている。懷徳堂には二百枚ばかりの版木があるが、これとて日本全国では貴重なコレクションと言えらるであろう。こうした資料を意識的に保管し、収集していかないと、大切な印刷文化の一つを失うことになる。また、版木以外にも、懷徳堂には、印章・屏風・聯など、当時の学校を髣髴とさせる器物が数多く残されている。ともすれば、これらは書籍の陰に隠れて忘れられがちであるが、こうした器物こそ、その保存と顕彰について十分な検討をしていく必要がある。

第二は、懷徳堂の書院としての性格である。中国・韓国にも「書院」が残されている。懷徳堂も、「懷徳書院」と称することがあった。では、東アジア文化圏において、懷徳堂はどのような「書院」だったのであるうか。これは、右のシンポジウムの質問に見られたように、近隣諸国との対比によって明らかになっていくであろう。出版や宗教の機能という点は、まだ十分な説明がなされていないと言ひ難い。また、設立の経緯や運営形態、受講生層、講学の内容、使用されたテキストなど。こうした点を総合的に検討し、東アジア文化圏における懷徳堂の位

置を解明することが重要であろう。





## 中井竹山・履軒の礼学についての一考察

田世民

### 一、はじめに

周知の通り、懷徳堂は一七二四（享保九）年に大坂の町人たちの出資により設立され、一七二六年に江戸幕府の官許を得て以降百四十数年の経営を続け、一八六九（明治二）年に閉校を迎えた学問所である。初代の学主（教授）は三宅石庵（一六六五～一七三〇）を迎え、助教は五井蘭洲らが加わった。二代目以降の学主（教授）は順に中井髡庵（一六九三～一七五八）、三宅春楼、中井竹山（一七三〇～一八〇四）、中井碩果、中井桐園、並河寒泉が務めた。懷徳堂の学問は朱子学を基本としつつも特定の学を絶対化せず、諸学の利点を摂取し終始柔軟な姿勢を保ち続けていた。かくして、懷徳堂において自由かつ批判的な精神をもった学風を育んでいった。それが

懷徳堂の学問に豊かな創造性と可能性をもたらし、富永仲基（一七一五～一七四六）や山片蟠桃（一七四八～一八二二）など数々の異才を生み出した大きな要因の一つであった。

懷徳堂は儒礼の受容と実践においても、そうした学問的態度をとっていた。崎門派学者は朱子『家礼』のみを受容しようとして、丘濬『文公家礼儀節』などの明儒の説を一切排斥した。それに対し、中井髡庵は朱子『家礼』、丘濬『文公家礼儀節』とわが国の諸儒の書、また家庭の旧儀や師友に聞いたことを参考にして『喪祭私説』一巻を編集した。髡庵の亡き後、竹山・履軒兄弟は父の遺志を受け継ぎ、同書を校訂して序跋を物した。さらに、竹山は同書の所々に自説を加え、その内容を補正した。なお、履軒（一七三二～一八一七）には『服忌図』という書があり、幕府が出した「服忌令」の内容に依拠して、

親族関係別にもとづいた服忌期間を示した図のほか、中国古礼の服制をそれに附した。そして、「令訳」を作って服忌令に対して漢文体で解説した。履軒は本編によって、礼制の実践に心のある「君子」が、喪礼に相応しい喪服と礼器をこしらえ、喪葬の哀しみに応えられるよう努力することを、促したのである。

中井竹山には『礼断』という『礼記』の注釈書がある。本書は、竹山が元陳澧『礼記集註』（すなわち『礼記集説』）の刊本に、先人の注釈を引用し、そして「竹山曰」として自らの注釈や先人の注釈への批評・論駁を首書したものである。他方、履軒には『礼記雕題略』（『七経雕題略』之一）という書がある。それは履軒が陳澧『礼記集説』刊本に施した数多くの首書や書き込み（『礼記雕題』、散逸）を抜き出して、それを要約したものである。そして、竹山の子蕉園（一七六七―一八〇三）は履軒『礼記雕題略』の内容を、その著『蕉園首書礼記集説』の中に「叔子曰」として引用している。

本稿は、そうした懷徳堂の礼学著述の一次史料を利用して、中井竹山、履軒らの礼学思想を分析し、さらにそれと家礼書『喪祭私説』ないし懷徳堂の儒礼実践との間の関係を検討しようとするものである。以下、まず竹山『礼断』、履軒『礼記雕題略』と『蕉園首書礼記集説』

三書の内容と特色を紹介する。そして、竹山『礼断』における先人注釈の引用状況を統計によって分析し、履軒『礼記雕題略』に対して基本的な理解として幾つかの考察を示しておく。次に、竹山・履軒の礼説について分析する。さらに、竹山・履軒の礼学思想と、『喪祭私説』および懷徳堂の儒礼実践との関係について述べる。最後に、東アジアの視野から懷徳堂の礼学について若干の結論を挙げて締めくくる。

## 二、懷徳堂の礼学著作

上述のように、懷徳堂の礼学著作は以下の三書である。

- (一) 中井竹山『礼断』、五冊。陳澧『礼記集註』刊本（書林寶善堂刊重刊監本、十卷）に先人の経文注釈を引用し、自らの評注を首書する。
- (二) 中井履軒『礼記雕題略』（標題は「礼記雕題略」のみ）、上中下三冊。陳澧『礼記集説』刊本に施した首書や書き込み（先人の経文注釈の引用と履軒自らの批評を含む）を集めたもの。『礼記』経文を収録せず、篇名と項目のみを挙げる。
- (三) 中井蕉園『蕉園首書礼記集説』、十冊。「叔子曰」

として履軒『礼記雕題略』の全ての内容を引用して陳澧『礼記集説』刊本に首書する。

## (二) 中井竹山『礼断』

筆者は中井竹山『礼断』中の引用と評注文章に対して統計を行った。(以下、附表参照) その数の総計は一四五八回に上り(「按」や「竹山按」などがなく、文字にかかわる短い注記はカウントに入れない。「又曰」は一回と数える)、延べ四五の氏名や書名を引用したことが分かった。もし竹山自身の評注と按語(「竹山曰」「善按(竹山按/按)」、計五二九回)を除けば、総数は九二九回となる。なかでも引用回数がもっとも多いのは楊鳳閣(楊曰)で、計二四八回あり、総数一四五八回中の一七％となる。(以下のパーセンテージは同例)それに継ぐのは、鄭玄の注と孔穎達の疏で、それぞれ一七九回(一一・二八％)と一七一回(一一・七三％)。「孔疏曰/云」と合わせてると一七五条、一一％)である。さらにその次は『説義』(二五七回、一〇・七七％)と方巖陵(六七回、四・六％)以下の氏名と書名である。

以上のデータから、竹山は楊鳳閣と『説義』の注釈をはじめ、『礼記』の鄭氏注と孔氏疏をとくに重んずることが見て取れる。

『礼断』各篇の引用評注回数で見ると、明らかに「檀弓」と「曲礼」二篇の引用評注回数が他の各篇のそれを遙かに上回ることが分かる。「檀弓」篇上下で延べ二九七回(二〇・三七％)、「曲礼」篇上下で延べ二〇五回(一四・〇六％)である。そもそも「曲礼」と「檀弓」二篇の分量はもともと多く、それらに関する注釈もそれなりに数が多い。それにしても、竹山はこの二篇の経文に対してはむしろのこと、それらに関する注釈に対しても詳しい検討を重ねたと、理解できる。後述のように、竹山自身の注釈批評(「竹山曰」や按語を含む)もまたこの二篇に集中している。附表には挙げなかったが、筆者の統計によると、「曲礼」篇上下の竹山の注釈批評と按語は延べ七六回あり、「檀弓」篇上下のそれはさらに多く、一一五回に上る。両者を合算すると、五二九回ある竹山の注釈批評と按語のうちの三六・一一％を占めている。この二篇の理解にいかにも腐心したか、そのことを垣間見ることができるといえる。

さきに、竹山は『礼断』の中でしばしば楊鳳閣、『説義』や方巖陵などの注釈を引用したこと、そしてそれらの礼説をとりわけ重視すると考えられることを述べた。では、竹山はどこからそれらの注釈を引用したのか。

『四庫全書総目提要』の記載によると、楊鳳閣は明の

人で、名は梧と、字は鳳閣（または嶧珍）といい、涇陽出身である。万歴壬子（一六一二年）の挙人で、青州府同知に出仕している。『礼記説義集訂』二四巻を著している。本書は『礼記』経文を収録せず、時文題目の式に従って冒頭の文章を挙げ、下に節を注記する。おおむね陳澧『礼記集説』と明の胡広『礼記大全』に依拠しているという<sup>③</sup>。では、竹山が頻繁に引用した『説義』という書はおそらくこの楊梧の『礼記説義集訂』のことであろう。はたしてそうであれば、『礼断』中の楊鳳閣『礼記説義集訂』からの引用は四〇五回にも達し、全ての引用・評語の三割弱（二七・七七％）を占めることとなる<sup>④</sup>。方巖陵の注釈は宋の衛湜『礼記集説』か胡広『礼記集説大全』から引用したものと推定される。そのほか、竹山が引用した氏名の大半は、『礼記集説大全』の引用氏名と重なっている<sup>⑤</sup>。残りの『鶴林玉露』や『漢書芸文志』などの引用は、その原典から直接引いたか、他の礼書から再引したものであろう。

楊鳳閣『礼記説義集訂』や方巖陵らの注釈は、竹山によって『礼断』の中でしきりに引用され、重視されたこととは上に述べた。では、引用回数が少なかった氏名の注釈は重要ではないということになるのか。実は、そうではない。例えば、竹山は『礼記』祭義篇の「致育於内、

散育於外。斉之日、思其居処、思其笑語、思其志意、思其所樂、思其所嗜。斉三日、乃見其所為育者」条のところで、一回に限って慕容氏の注釈を次のように引用している。

慕容氏曰：「無形之中視有所見、無声之中聽有所聞。皆其思之所能達」。

又曰：「思之至者、如見其存微之蹟、誠之不可揜也如此」<sup>⑥</sup>。

慕容氏はすなわち宋の慕容彦逢（字は叔遇、一〇六六一一一七）のことであると考えられる。彼には『摛文堂集』という著作がある。その巻末の附録「慕容彦逢墓誌銘」によると、「慕容氏は）自幼嗜学問、晚節益篤、藏書数万卷、朝夕繙閱不去手、自经史諸子百家之言、靡不洽通」<sup>⑦</sup>という。

慕容氏の上の注釈は、主としてこの条の後半の「斉すること三日にして乃ち其の為に斉する所の者を見る」に対して発している。つまり、祭りに先立って齋戒を行う。齋戒が三日続けば、「ついに故人のおもかげが絶えず目先に浮かんでいるようになる」という<sup>⑧</sup>。これは「みな其の思いのよく達する所」、「思いの至り」によるものである。

ところで、慕容氏は前半において、『礼記』曲礼上にある父母に仕える心構えを表わす「声無きに聴き、形無きに視る（父母が言わぬうちに察し、手足を動かさぬうちに（意向を）悟る<sup>五</sup>）」というような言葉を引いている。ところが、そこでは元の意味として使わず、祭る者が思念のあまり、あなたも故人の声を聞き、故人の動きを見えるような情景を表わすものとして転用している。後半では、『中庸』鬼神章の「夫微之蹟、誠之不可揜如此夫」という文章を引用して、祭祀における鬼神の「如在其上、如在其左右」を表わしている。

中井竹山らの懐徳堂知識人は、世人が妖怪の崇りを信じて恐れること、学者がそれを排しないどころか、妖怪實在の邪説を発すること、そして鬼神の「形状」があることを迷信することを、多岐にわたって批判論駁している<sup>十一</sup>。懐徳堂の「無鬼論」的立場は広く知られているものである<sup>十二</sup>。

懐徳堂知識人は鬼神祭祀において、祭る側が「誠敬」を尽して祭祀を行うことを求める一方、鬼神の来格有無に対しては不問に付している。祭祀の時、祖考があたかも「その左右にあるがごとく」感じる、そのことに関して中井履軒は、それは子孫の「誠敬の至り<sup>十三</sup>」によるものとし、また祭る者の「想像の光景<sup>十四</sup>」であるという。

竹山は『礼断』檀弓下篇の「奠以素器、以生者有哀素之心也。唯祭祀之礼、主人自尽焉爾。豈知神之所饗、亦以主人有齐敬之心也」の条で、このようにいう。

唯祭祀之礼、凶則致素、吉則致飾。主人所自尽其時之心、神之享否不可知等、所以恃其齐敬之心也。<sup>十五</sup>

竹山はここでも、主人（祭主）が祭祀においてなにより自らの「齋敬の心」を尽すべしと強調している。

ここでひとつのことが分かった。つまり、竹山が祭義篇の「致齐於内、散齐於外」条で慕容氏「無形云云」の注釈を引いたのは、その説が鬼神祭祀のことをよく言い表していると考へてのことである。また、世俗の鬼神「有形」への迷信を極力論破しようとする竹山にとって、慕容氏の「無形」説は一層重要だと思つてここに引いたと考へられる。

なお注目すべきは、竹山「礼断」は二回にわたつて履軒の礼説を引用したことである。なかでも、そのうちの一回は「処叔曰」とのみ断つたものの、筆者が調べた結果、それは明らかに履軒「礼記雕題略」緇衣篇「子曰：南人有言曰」条から引いたものであると確認できた。このことから、竹山「礼断」の成書は履軒「礼記雕題略」<sup>十六</sup>

より遅いと分かる。それより大事なものは、後述のように、竹山『礼断』には履軒『礼記雕題略』と同様な論旨をもつ内容がたくさんある、ということである。さらに、両書の論述を比較対照してみれば、竹山の注釈や論評は履軒のそれより詳しく、『礼記雕題略』の論じきれないものを補うような感さもある。

## (二) 中井履軒『礼記雕題略』

繰り返し述べたとおり、履軒『礼記雕題略』はその『礼記雕題』中の先人注釈の引用や自説の書き込みを集めたものである。「雕題」とは『礼記』王制篇の「南方を蛮と曰う、題を雕み趾を交え、火食せざる者有り」に出る言葉である。本来は額に入れ墨をするという意味だが、「ここでは転じて刊本に記した頭注」を言う。<sup>〔七〕</sup>

『礼記雕題略』は履軒『七经雕題略』のひとつである。そのほか、『易』『尚書』『詩』『左氏春秋』『中庸』『論語』『孟子』があり、計八種である。八種なのに、なぜ「七经」というのか。履軒は当初「七经」の意識で『七经雕題略』を編纂していたと考えられる。

また、『七经雕題略』は履軒の经学研究のいわば過渡的な作品である。それまでに、履軒は『七经雕題』（周易雕題）『尚書雕題』『詩雕題』『左氏雕題』『礼記雕題』『学

庸雕題』『論語雕題』『孟子雕題』。その内の『礼記雕題』は散逸）を著していた。その後、『七经雕題略』を経て、履軒は自らの经学研究を『七经逢原』（周易逢原）『夏書逢原』『古詩逢原』『左伝逢原』『論語逢原』『孟子逢原』『中庸逢原』。その他、『古詩得所端』『古詩古色』『大学雜議』がある）に集大成した。『七经逢原』には、『礼記逢原』という作品がない。はたして履軒は晩年に『礼記』を「七经」から排除するという考えがあったからなのか、それとも他の理由があったからなのか、知りえない。

『礼記雕題略』は履軒の礼研究の成果である。その内容は竹山『礼断』と比較対比することが出来る。ここで、基本的な理解として『礼記雕題略』の特徴を以下に挙げておく。

一・履軒『礼記雕題略』は『礼記集説』を論評する着眼点において、竹山『礼断』とまったく同一ではない。ただし、ある特定の主題、たとえば後述の「忌日」や「禫礼」について、両書は同様に少なからざる紙幅を費やして論じていた。

二・履軒は時に『礼記』经文自体の間違いや誤写を指摘する場合がある。例えば、履軒は祭義篇「氣也者神之盛也、魄也者鬼之盛也」条の文章に問題

があるとして、「二句宜言、神也者魂之盛也、鬼也者魄之盛也。疑誤（たぶらか）寫」と指摘する。つまり、履軒はこの経文は「鬼神」「魂魄」のように前後対称であるべきと考へるのである。

三、「礼記」は一人の手に成る著作ではないと指摘する。履軒は表記篇「卜宅寢室。天子不卜処大廟」条でこのように述べる。「廟通人鬼、其鬼廟稱大廟、所以別於人廟也。人廟亦稱大廟、所以別於別寢下宮也。記不出於一手、稱呼有參錯、不可不審辨（たぶらか）之」という。

四、漢儒の「妄作」を指弾する。（この点、竹山にも同様な指摘がある。）履軒は祭法篇の冒頭で、「是篇所記、往往不合於礼制、於義亦甚不安。漢儒妄作之尤者。今不拳辨（たぶらか）」と、このように述べる。さらに、特定の篇に対し「誕妄」の作として、読むべきではないと批判する。例えば、月令篇のところで履軒は「是一篇誕妄不經之甚者、勿講可也」という。そして、この篇に対して一切評注を施していない。

### (三) 中井蕉園『蕉園首書礼記集説』

中井蕉園『蕉園首書礼記集説』の首書内容はそのまま

中井履軒『礼記雕題略』からの引用なので、本稿では本書を取り上げない。蕉園は竹山の第四子で、名は曾弘、字は伯毅という。蕉園は号。文才があつて、竹山からも多大な期待が寄せられたが、若くして死去し、享年三七歳だった。本書は蕉園が『礼記』注釈に従事する準備段階のもので、未完の作品である。

総じて言えば、『礼断』中に引用された先人の礼説注釈は総数において『礼記雕題略』を大幅上回っている。おおざっぱな言い方だが、『礼断』は先人注釈の引用と評注とを兼ね備えるもので、比較的体裁の整った経書注釈書である。それに対し、『礼記雕題略』は先人注釈を引用することも間々あるが、全体的に本書の目的は注釈ではなく、『礼記集説』の論評にあると考えられる。

### 三、竹山、履軒の礼説

——「忌日」、「禫祭」をめぐる議論を例に

『礼断』にある竹山の礼説論評において、『礼記雕題略』にある履軒のそれとしばしば同様な論旨や内容がみえる。前述のように、竹山『礼断』には履軒『礼記雕題略』から引用した文章が確認され、『礼断』の成書は『礼記



『雕題略』より遅いことが分かった。そのことから、竹山は『礼断』著作の過程で履軒の『礼記雕題略』を参考にしていたと考えられる。ところで、竹山と履軒は兄弟であり、普段直接に学問談義を交わす機会が多かったため、二人は礼学をめぐってよく議論し合っていたと推測できる。また、二人はともに五井蘭洲に師事していた。そこで、二人に同様な見解があるのは、約せずして意見が一致したという可能性以外に、一人が議論しての合意事項であったり、師説を受け継いだものであったりすることも考えられる<sup>三三〇</sup>。

以下、「忌日」、「禫祭」に関する竹山『礼断』と履軒『礼記雕題略』との議論を例に、二人の礼説について考えてみたい。

## (一) 忌日の弁

竹山は檀弓上篇の「亡則弗之忘矣。故君子有終身之憂」条でこのように述べる。

竹山曰、忌日之制、非古也。蓋起乎秦漢已後。何者。古昔教日以六甲、不以一二焉。一二教者、自秦漢矣。夫既用干支、借令今年子月甲子日、在月半。推之他年或在月首、或在月季。或犯前月、或属後月。参差

不一、悪得指定忌日。一二数而後、年年一準、但晦日之死、小尺移用廿九日已。予嘗疑大小祥祭、古礼曷以下日、不直用忌日。後得其説、以忌日不可知也。秦漢儒者以当時計日之法定忌日祭、遂謂古礼亦然。相沿之久、後世儒者皆習焉而不察。(中略) 凡戴記所謂忌日、指死日干支。每六旬而得一忌日、歳有五六忌日、而実非死之日。故不行祭、但不楽、以為終身之喪耳。後世以一二計日、毎月得一忌日、而歳有十二忌日、其中一月実得死之日。故其日遷主行祭者、合於先王追遠之遺意、是在後世実不可廢也。予亦何容喙。但相承直以忌日祭為古礼、不復淘汰。古今之異、則予弁不可以已矣<sup>三三一</sup>。

引用は長くなったが、そのポイントを3つほど以下に整理しよう。

- 一、古代は「六甲」つまり干支で日を数える。秦漢に入ってはじめて「一二」をもって数えるようになる。十干十二支の組み合わせで六〇日がひとつのめぐりとなる。そのため、忌日は特定できず、古礼の「大小祥祭」では日を卜して祭りを行う。
- 二、後世の儒者は一二で日を数え、それをもって忌

日祭の日にちを決めることに慣れているため、古礼も同様だったと勘違いする。『礼記』にいう「忌日」は死んだ日の干支を指す。六〇日に一回の忌日が回ってくるので、年に五、六回の忌日があるわけであるが、それは死んだ日ではない。ゆえに、忌日に際して祭りを行わないものの、「終身の喪」を表すために音楽を演奏しない。

三、後世は一二で日を数える。月に一回、年に二二回の忌日がある。そのうちの一回は死んだ日にあたる。ゆえに、後世の忌日祭は古礼そのものではないものの、「遠きを追う」という先王制礼の趣旨に合致するので、それを廢するわけにいかない。ただし、世間が忌日祭を古礼と違って、古今礼制の違いを知らぬことに対して、それを弁明せずに行られないのである。

履軒は同じ条でこのように述べる。

古所謂忌日、以干支紀也。譬以甲子日死、每遭甲子以為忌也、而不干月数、凡一歲而五六忌矣。然不樂、不用而已、非必行祭奠。如子卯為疾日而不樂、亦此之類已。後世一二數日、遂以死之某月某日為忌、而

一歲一忌行祭奠、皆非古義。且如此、古人有欲為而不能者。喪大記、朔日忌日則婦哭、當參考。<sup>(三三)</sup>

履軒のこの見方は竹山のそれと一致する。また、履軒は檀弓下篇の「子卯不樂<sup>(三三)</sup>」と喪大記篇の「朔月忌日、則婦哭于宗室<sup>(三五)</sup>」といった文章を引いて、論拠としている。

竹山は檀弓下篇「滕成公之喪、使子叔敬叔」条においても、先の見方に呼応する形で、同様なことを約言している。彼はこのように述べる。

竹山曰、懿伯之忌、旧說贖贖、陳注辨之、以為忌日者、是矣。但古者所謂忌日、与後世異。何者。古計日以干支、不以一二焉。故以死日干支為忌日、每六旬而遇一忌、一年蓋有五六忌日。其或非死之日。故不必祭。但變常以終其日耳。是以上篇曰、忌日不樂。祭義曰、君子有終身之喪、忌日之謂也。是經「懿伯之忌」蓋是也。此義陳注未得發也。<sup>(三六)</sup>

祭義篇「君子有終身之喪、忌日之謂也」条の竹山の首書を確認すれば、そこでは「竹山曰、予忌日之説見前」と述べられている。

要するに、「忌日」の弁は竹山『礼断』における議論

の中心の一つであり、全編にわたってその見方が一貫している。そして、履軒『礼記雕題略』にも同様な見方が確認できる。

## (一) 禫祭

竹山は檀弓上篇「魯人有朝祥而莫歌者」条でこのように述べる。

竹山曰、下文曰、祥而縞、是月禫、徙月而楽。王肅曰、二十六月作楽。鄭康成曰、二十八月而作楽。各有案拠、王説為是。詳下文孟獻子禫条。

竹山は後ろの「孟獻子禫」条で、『礼記注疏』にある王、鄭二人の「祥禫祭」をめぐる長い論述を節録して、そして最後に「竹山曰、祥禫之義、王説近是」と評語をつけて締めくくっている。

このポイントは、つまり三年の喪の「大祥」(三回忌)の後の「禫祭」はいつ行うのか、その点にある。それは同時に、喪が明けていつから音楽を演奏してよいかという問題に関わってくる。王肅の考えでは、二五ヶ月目に大祥祭を、同じ月に禫祭を行う。そして、「是月禫、徙月而楽」という経文に従えば、すなわち二六ヶ月目に音

楽を演奏する。それに対し鄭康成(鄭玄)は、二五ヶ月目に大祥を、翌々の二七ヶ月目に禫を行い、そして二八ヶ月目に音楽を演奏する、と主張する。それぞれ依拠するところがあるものの、竹山は王氏の説が正しいと支持する。

他方、履軒は『礼記雕題略』檀弓上篇の「魯人有朝祥而莫歌者」条でこのように述べる。

大祥是二十五月矣。註以魯人之祥為二十四月、何哉。是不可曉者。踰月、謂至祥之次月、即二十六月矣。可知禫祭在祥月中也。「中月而禫」章、可併考。

ここから、竹山と履軒はともに王肅説に同意して、「二十五月禫」と考えている。その最大な理由は、二人は「中月而禫」の「中月」は「月中(その月のうちに)」を指していると考えたからである。竹山は『礼断』問伝篇で、特に「父母之喪、既虞卒哭」条の「中月而禫」を解釈して、「中月、月中也。猶中林、中谷之中」という。履軒もまた、「土虞礼、中月而禫。与『詩』中林、中河之中同。謂在是月内也」と、同じことを述べている。

以上、二人の礼説について検討した結果、竹山・履軒兄弟の関心は、忌日祭をはじめ、服喪期間などの礼制に

集中されていることが分かった。その関心は、はじめに述べた家礼書『喪祭私説』と履軒『服忌図』を含めた儒礼実践の著作のそれと、相通じるものであった。そこで、以下は竹山・履軒の礼学思想と『喪祭私説』および中井家の儒礼実践の関係について、考えてみたい。

#### 四、竹山・履軒の礼学思想と『喪祭私説』 およびその儒礼実践の関係

『喪祭私説』は中井斃庵の早年の著作だが、生前は改訂には及ばなかった。一七五八年に斃庵を亡くした竹山・履軒兄弟は、亡父の遺志を受け継ぎ本書の改訂に着手した。そして、本書に対して補正と校訂を行い、序跋を物して、ようやく竹山の而立の年（一七六〇年）に本書を完成させた。ところで、本書は出版されず、写本として現存している。懷徳堂中井家は、主に『喪祭私説』に依拠しながら現実の必要に応じて儒教の喪祭儀礼を行っている<sup>110)</sup>。

竹山は『喪祭私説』喪礼の「禫」項を補正して、次のことを述べている。「喪大記、祥而食肉。間伝、中月而禫、始食肉。檀弓、祥而禫、是月禫、移月而禫（引用者注——檀弓篇の原文は「徙月楽」）。是数説、皆不同、無所

適従。然拠『家礼』食肉飲酒、在祥之下、似従喪大記之文也。夫既祥之禫、以禫除焉。今既祥無服、則雖無禫可也<sup>111)</sup>』という。上引から分かるように、竹山は父斃庵『喪祭私説』を補正する段階で、すでに「禫祭」をいつ行うのかという問題に気付いた。しかしこのとき、竹山はただ儀礼実行の立場から、「大祥」の後もう服はない（除喪した）ので、「禫」がなくてもよいと述べるに止まっていた。また、竹山は同じ項の後の「大祥之後、中月而禫」の附註「問一月也」に対して、改訂を施していない。つまり、朱子『家礼』と同じく、「二十七月禫」になっている。

竹山が喪大記篇、間伝篇と檀弓篇にある「禫祭」をめぐる文章を引いて、「無所適従」と表明したことからみると、この時竹山は三年喪の禫祭はいつ行うのかについて、まだ定見があるわけではなかった。それは、前述のように、竹山が『礼断』において明らかに王肅「二十五月祥同月禫」説を支持した態度と、大いに異なっている。いってみれば、竹山にそのような態度の転換があるのは、『喪祭私説』を補正した後、礼学についてさらに研究して、「禫祭」をめぐる理解を深めたことによるものであると考えられる。

つぎに、『中井家歴代裏事録』<sup>112)</sup>（葬儀記録）という史料

によって、中井家の儒礼実践と竹山・履軒の礼学思想の關係について考える。『中井家歴代裏事録』は早期の記録が簡略だったのを除いて、中井家歴代の葬儀について詳細な記録を残している。それは、懷徳堂中井家の儒礼実践を研究するうえで、欠かせない重要な史料である。

まず、贅庵裏事録の中の「三虞朝夕奠品案」の記載を見よう。「三虞祭」以降、五〇日目の「擬卒哭」(本来、「卒哭」祭は死後一〇〇日目に行う。近世日本では、父母のために忌五〇日なので、中井家は卒哭をここに繰り上げた。)をはじめ、亡き後の「第百<sup>三</sup>日」にいたるまで、供え物を用意して祭りを行っていた。贅庵裏事録の「三虞朝夕奠品案」の記載は、「初忌日」の己卯(二七五九)六月一七日に止まり、「禫祭」を行つた記録はない。この時の喪主は竹山が務めていた。もし記載通り、「禫祭」を行っていないければ、竹山のこの時の実経験はあの『喪私説』の「今既祥無服、則雖無禫可也」という注記につながつたと理解できる。

つぎに、竹山裏事録の「竹山先生三虞朝夕奠」によれば、「第五十日」以降、記載は百日目の祭りに止まり、そして「百ヶ日上り」と記されている。「上り」とは、「完了」や「仕上げ」などの意味がある。そのように考えれば、中井家は百日目に「喪祭」(服喪期間中の祭り)を

終わらせようとしたということになる。はたしてそうであれば、ここでは『喪私説』にある竹山の「禫祭を行わず」という意見が尊重され、後の『礼断』にある「二十五月禫」説に賛同する見方は取り入れられなかったことになる。

一方、竹山と同じく王肅説に賛同して「二十五月禫」を是認した履軒であるが、その裏事録中の〈履軒先生三虞朝夕奠品案〉を見ると、明らかに禫祭を行つた記載が確認できた。履軒は一八一七年(丁丑)二月一五日に死去し、享年八六歳だった。〈履軒先生三虞朝夕奠品案〉によれば、(四月)五日朝 第五十日／擬卒哭「以降、(五月)廿五日 第百<sup>三</sup>日」をはじめ、「戊寅二月十五日 小祥期／俗云一周忌」、「文政二年 己卯二月十五日／大祥期 俗云三回忌」とあり、そしてその後に「禫 本月廿一日」の記載があった。とすれば、履軒の遺族はほぼ三年喪の祭儀通りに従っており、そして履軒「二十五月禫」の意見を尊重して、「大祥」の同じ月に「禫祭」を行つたのである。

## 五、おわりに

上に述べてきたように、中井竹山は『礼断』の中で先

人の注釈を引用し、それに対して賛同したり論駁したりした。とりわけ「竹山曰」はよく注釈者の誤謬を指摘し、古注と新注を問わず、それに批判の矛先を向けていた。例えば、彼は表記篇「子曰、君子敬則用祭器」一条でこのように述べる。「竹山曰、敬謂祭祀也。鄭注泛指朝聘賓客而諸家皆從之、非矣。鬼器豈可通人器乎」という。履軒『礼記雕題略』もそうであり、注釈者の間違いを論破するばかりではなく、既述のように漢儒の「妄作」や經文の「誤写」を指摘さえしている。

先人の注釈に対する彼らの論評が妥当かどうかについては別に検討する余地がある。だが、懷徳堂の礼学研究が依拠した陳澧『礼記集説』は、朱子学的解釈を主とした科挙試験のためのテキストであるが、竹山らはそれを相対化していた。中国や朝鮮のような科挙試験に囚われることがなかった点は大きかったが、なにより懷徳堂の自由かつ批判的な学風がそれを可能にした大きな要因として考えられよう。

他方中国では、明成祖の永楽年間に定められた科挙定式のなかで、『五経』の中の『礼記』については、陳澧『礼記集説』が唯一の標準テキストとして公式に決められていた。また、胡広らが勅命を受けて編纂した『礼記集説大全』（一般には『礼記大全』）は、その凡例の第一条で

このように言明する。「今編以陳氏『集説』為宗、諸家之説有互相發明及足其未備者分註于下、不合者不取」という。つまり、諸家の説は問々採用するが、陳氏『礼記集説』と相矛盾する学説は一切取り入れないということである。ここでも、科挙の標準テキストにおける學術研究上の制限が見て取れる。

朱子『家礼』の実践という観点から見れば、中井塾庵らは『家礼』をモデルに、『文公家礼儀節』を参考にして、家礼書『喪祭私説』を編纂していた。本書は『家礼』に依拠しているが、周りの市井では仏式葬祭が一般で、儒礼は普通ではない状況の中で、社会の現実に沿う形で儀節に対して工夫を施さざるを得なかった（例えば五〇日目に繰り上げて「擬卒哭」をするなど）。また、実葬儀の祭りでは、上の履軒の例で見たように、履軒の遺族は履軒の意見を尊重して、王肅の「二十五月禫」説に従って、大祥の同じ月に禫祭を行っていた。つまり、鄭注の「二十七月禫」に従う朱子『家礼』の規定と異なっていたのである。

一方、明代以降の中国では、大勢として朱子『家礼』に基づいて儀礼が行われ、家礼類書がつきつきと出版されていった。李氏朝鮮では、朱子『家礼』を公式の礼制と定め、全国においてその儀礼通りに実行することに徹

底させていた（今でもその礼式とりわけ祭祀が忠実に守られている）。近世日本の状況といかに違うか、一目瞭然である。

近世日本の儒家知識人たちが儒礼を実践するアプリアの条件は、中国や朝鮮のそれとは比べ物にならなかった。だからこそ、彼らは礼書を研究し、実儀礼において儀節の工夫に苦心して、それをもって「礼意」に合致するように努力していた。懷徳堂の礼学研究とその儒礼実践は一体のものであった。竹山・履軒らの懷徳堂知識人は礼の思想を生きようとしていたと言い換えてもよい。しかし、それは懷徳堂知識人に限るものではない。朱子『家礼』の受容を通じて儒教儀礼を積極的に実践しようとした、多くの近世日本知識人たちにはその側面をうかがうことができる。

本稿は中井竹山・履軒の礼学思想とその儒礼実践の關係に絞って考え、「忌日」「禫祭」をめぐる彼らの礼説の検討によって、如上の結論を述べてきた。要するに、竹山『礼断』や履軒『礼記雕題略』は無味乾燥な礼学著述に終わるものではない。そこからほとばしる思想の活力は、我々のさらなる探究を俟っている。

【附記】筆者は本稿の準備段階で、史料収集に大阪大学

附属図書館懷徳堂文庫を訪れる機会に恵まれた。その間、大阪大学各位のご協力を頂いた。この場を借りて、特に懷徳堂研究センターの井上了氏と附属図書館の皆さんに感謝を申し上げる。なお、本稿は台湾・行政院国家科学委員会專題研究計畫（研究課題名・懷徳堂的礼学思想与近世日本儒学界的相互影響、二〇〇九年八月一日―二〇一〇年七月三十一日）による研究成果の一部である。

注

(一) 詳しくは、拙稿「懷徳堂における儒教儀礼の受容——中井家の家礼実践を中心に——」(大阪大学大学院文学研究科・文学部懷徳堂センター編『懷徳堂センター報』二〇〇八、二〇〇八年)を参照されたい。

(二) 以上の三書とともに大阪大学附属図書館「懷徳堂文庫」に所蔵されている。本稿における引用もそれに拠る。

(三) 永瑯他『四庫全書総目提要』(台湾商務印書館、一九六五年)経部、卷二四、礼類存目二、礼記、礼記説義集訂二四卷、四七六頁。

(四) 中井履軒『礼記雕題略』もしばしば楊鳳閣の文章を引用する。ところで、『四庫全書総目提要』は楊氏の書には不評で、それを「不甚研求古義」とか、「鈔撮講章、非一一採自本書。故不能元元本本、折衆説之得失也」(四七七頁)とかと批判する。竹山と履軒はなぜわざわざ楊梧『礼記説義集訂』を引用したのか。その問題に関する詳しい検討は、他日を期したい。

(五) 陳恆嵩の研究によると、胡広らは『礼記集説大全』を編纂するにあたって、実際には衛湜の『礼記集説』をもとに諸家の注釈を増やしたり減らしたりして完成させたという。故に『礼記集説大全』に引用された礼説・注釈は九割以上衛湜『礼記集説』のそれと重なる。同『礼記集説大全』修纂取材來源

探究」(『東吳中文研究集刊』四、一九九七年、一・二四頁)参照。本稿の附表は、一部陳文の『礼記集説大全』引用状況表を参考にして、注釈者の氏名を復元した。

(六) 中井竹山『礼断』祭義篇、卷八、三五丁表。句読点は引用者。以下同。

(七) 前掲陳恆嵩『礼記集説大全』修纂取材來源探究、註四、一頁より再引。

(八) 竹内照夫『新釈漢文大系二八・礼記』(明治書院、一九七七年)中、七〇一頁。

(九) 竹内照夫『新釈漢文大系二八、礼記』上、二〇頁。

(一〇) 竹山・履軒に師事した山片蟠桃は、その著『夢の代』でも、この曲礼上の語を『礼記』祭義の語と勘違いしたらしく、祖先祭祀の文脈でそれを解釈している。蟠桃はこのように述べる。「実ニ神靈アラバ、何ゾ明器ヲ用ヒン。コレ鬼神ナキノ証ナリ。祭義曰、「声なきに聞き、形なきに視る。」(中略)コレ鬼神ヲ祭ルノ要ナリ」という。『夢の代』無鬼上第十、水田紀久・有坂隆道校注『日本思想大系四三、富永仲基山片蟠桃』(岩波書店、一九七三年)、四九七頁。

(一一) こうした妖怪の祟りや鬼神の「形状」への懷徳堂諸儒の論駁の文章は、懷徳堂最後の教授並河寒泉によつて集められ、その著『辨怪』(大阪大学懷徳堂文庫所蔵)の中に収録されている。佐野大介は本書を活字に翻刻する作業を行い、その成



果を大阪大学懷徳堂研究センター『懷徳堂センター報』に掲載している。

- (一一) 懷徳堂の無鬼論について、子安宣邦「陰陽の鬼神と祭祀の鬼神——無鬼論の特質をめぐって——」、「懷徳」五四、一九八五年(のち同『新版鬼神論・神と祭祀のディスコース』白澤社、二〇〇二年)；小堀一正「無鬼、またはフィクショナルとしての鬼神——山片蟠桃小論——」、「懷徳」五六、一九八七年(のち同『近世大坂と知識人社会』清文堂、一九九六年)；陶徳民「懷徳堂朱子学の研究」(大阪大学出版会、一九九四年)第六章「無鬼論」；宮川康子「富永伸基と懷徳堂——思想史の前哨」(べりかん社、一九九八年)第四章「あたりまえの誠の位相——「誠の道」と『中庸』の誠をめぐって」など参照。
- (一二) 中井履軒『水哉子』卷之中「祭祀編第四」、関儀一郎編『続日本儒林叢書第一冊・随筆部第一書目』(東京・東洋図書刊行会、一九三〇年)、一五頁。
- (一三) 中井履軒著、中井木菟麻呂校訂『中庸逢原』(岡田利兵衛發行、一九二七年。京都大学文学部図書館蔵)、第十九章、四五丁裏。
- (一四) 中井竹山『礼断』檀弓下篇、卷二、五〇丁裏。なお、『礼記集註』中の方氏注が「祭祀」は「吉祭」を指し、「自盡」は「致文」を指すとする解釈に対して、竹山は「恐強牽」と反論している。五〇丁裏―五一丁表。

(一六) 竹山『礼断』には、「処叔曰、爵不加於不肖、則政理、故民生立且止也。専事祭祀如敬奉鬼神、而却名之為不敬者、藝瀆故也。且事煩数、則必瀆乱矣。是事神所以難也。此引「兪命」、文理自通、宜随文解。勿依古文尚書講」とある。緇衣篇、卷九、六〇丁表。

- (一七) 湯浅邦弘編著『懷徳堂事典』(大阪大学出版会、二〇〇一年)、一〇八頁「七経雕題」の項。
- (一八) 中井履軒「礼記雕題略」卷下、祭義篇。
- (一九) 中井履軒「礼記雕題略」卷下、表記篇。
- (二〇) 中井履軒「礼記雕題略」卷下、祭法篇。
- (二一) 例えば、竹山は王制篇「変礼易染者為不從、不從者君流」条の先人注釈への論評の中で、蘭洲の言葉を引きいてそれに同意するようなことを述べたことがある。ここでは、「竹山曰、左氏大伯虞仲大王之昭也。大伯不從、是以不嗣。蘭洲先生曰、伝唯書不從、朱子何由知其不從翦商之志也。因援王制、此文曰、不從時王之制、如史遷所謂文身斷髮、示不可用、是以不得嗣也。是說得之」という。中井竹山『礼断』王制篇、卷三、九丁表。
- (二二) 中井竹山『礼断』檀弓上篇、卷二、五丁表―五丁裏。
- (二三) 中井履軒「礼記雕題略」卷上、檀弓上篇。
- (二四) 王夢鷗の解釈によれば、「殷紂は甲子に自らの身に火をつけて死に、夏桀は乙卯に追放された。ゆえに、古代の王は甲子・乙卯を忌日とみなし、自らが戒めるように音楽を演奏しない」

という。王夢鷗『礼記今註今釈』上（台北：台湾商務印書館、

一九七〇年、二〇〇二年）、一七五頁。

(二五) これは「(大夫や士は、父母の喪において、(しばらく宗家に居て服喪するが)既に練祭を終えれば家に帰る。)そして毎月の朔日と忌日(命日)には宗家へいって哭泣する」という意味である。竹内照夫『新釈漢文大系二八、礼記』中、六八三頁。

(二六) 中井竹山『礼断』檀弓下篇、卷二、六九丁裏。

(二七) 中井竹山『礼断』祭義篇、卷八、三三三丁裏。

(二八) 中井竹山『礼断』檀弓上篇、卷二、八丁表。また、竹山は陳澧『礼記集註』の「三年之喪、實則二十五月。今已至二十四月矣」という注釈に対して是認せず、「竹山曰、大祥二十五月。註云今已二十四月、誤矣。蓋和今年正月之喪至次年正月、不計閏月、得十二月。又至次年正月、得十二月。合為二十五月」と首書して批判している。八丁裏。

(二九) 中井竹山『礼断』檀弓上篇、卷二、一一丁裏。

(三〇) 中井履軒『礼記雕題略』卷上、檀弓上篇。

(三一) 中井竹山『礼断』問傳篇、卷十、九丁裏。

(三二) 中井履軒『礼記雕題略』卷上、檀弓上篇、「孟獻子禫」条。

(三三) 詳しくは前掲拙稿「懷徳堂における儒教儀礼の受容——

中井家の家礼実践を中心に——」を参照されたい。

(三四) 大阪大学懷徳堂文庫蔵『喪祭私説附幽人先生服忌図』写

本に拠った。

(三五) これは中井家の私文書であり、髡庵、髡庵夫人をはじめ、蕉園、竹山、履軒以下の中井家一族の葬(祭)儀を記録したものである。現在、大阪大学懷徳堂文庫に所蔵され、一部の内容はすでに翻刻され、『懷徳』五四、五七号に掲載されている。(三六) 「九月廿七日 第百日」のすぐ後に、元来「擬大祥」らしい文字が書かれたが、墨で消されていた。

(三七) 中井竹山『礼断』表記篇、卷九、四九丁裏。

(三八) 前掲陳恆嵩『礼記集説大全』修纂取材來源探究、三、六頁。

(三九) もっとも、朱子自身は鄭氏の説よりも王肅説に賛同するような発言をしている。「二十五月祥後便禫、看來当如王肅之説、於『是月禫、徃月樂』之説為順。而今從鄭氏之説、雖是礼疑從厚、然未為当」という。『朱子語類』卷八九(中華書局、一九八三年)、二二八三頁。『性理大全』本『家礼』の喪礼にも上の朱子の言葉が附註として引かれている。

【附表】

通番号	引用氏名・書名(出現順)	原氏名・書名	引用回数	%
一	楊鳳閣曰(楊曰/楊云)	楊鳳閣	二四八	一七・〇一
二	說義曰	禮記說義集訂	一五七	〇・七七
三	藍田呂氏曰	呂大臨	二	〇・一四
四	方嚴陵曰(方氏曰/方曰)	方慤	六七	四・六〇
五	古註曰(古註/古註云)	禮記注疏	一三	〇・八九
六	永嘉戴氏曰	戴溪	二	〇・一四
七	吳郡范氏曰	范成大	一	〇・〇七
八	疏曰	禮記注疏	一七一	一・七三
九	鄭注鄭曰/鄭云	鄭康成注	一七九	一・二二八
一〇	孔疏曰(云)	孔穎達疏	四	〇・二七
一一	王子墨曰	王子墨	二	〇・一四
一二	馬氏曰	馬晞孟	八	〇・五五
一三	正義曰	禮記注疏正義	一	〇・〇七
一四	陳長樂曰	陳祥道	七	〇・四八
一五	王肅曰	王肅	二	〇・一四
一六	陳北溪曰	陳淳	一	〇・〇七
一七	程子曰	程頤	一	〇・〇七
一八	山陰陸氏(陸山陰)曰	陸佃	七	〇・四八
一九	吳臨川曰	吳澄	七	〇・四八
二〇	鄭氏曰	鄭康成	二	〇・一四
二一	字典曰	字典	一	〇・〇七
二二	唐韻曰	唐韻	一	〇・〇七
二三	鶴林玉露曰	鶴林玉露	一	〇・〇七
二四	國語	國語	一	〇・〇七
二五	李氏曰	李氏	一	〇・〇七
二六	胡鄱陽曰	胡氏	一	〇・〇七
二七	說文曰	說文解字	一	〇・〇七

禮記篇名	各篇引用批評	%
曲禮上 (一)	一三三	九・〇五
曲禮下 (二)	七三	五・〇一
檀弓上 (三)	一六七	一・四五
檀弓下 (四)	一三〇	八・九二
王制 (五)	七九	五・四二
月令 (六)	八五	五・八三
曾子問 (七)	二七	一・八五
文王世子 (八)	三一	二・一三
禮運 (九)	三一	二・一三
禮器 (一〇)	七四	五・〇八
郊特牲 (一一)	六七	四・六〇
內則 (一二)	四五	三・〇九
玉藻 (一三)	七二	四・九四
明堂位 (一四)	九	〇・六二
喪服小記 (一五)	二〇	一・三七
大傳 (一六)	一〇	〇・六九
少儀 (一七)	一三	〇・八九
學記 (一八)	二五	一・七一
樂記 (一九)	八〇	五・四九
雜記上 (二〇)	一四	〇・九六
雜記下 (二一)	二七	一・八五
喪大記 (二二)	二七	一・八五
祭法 (二三)	九	〇・六二
祭義 (二四)	四一	二・八一
祭統 (二五)	一六	一・一〇
經解 (二六)	三	〇・二一
哀公問 (二七)	一二	〇・八二

通番号	引用氏名・書名(出現順)	原氏名・書名	引用回数	%
二八	葉石林曰	葉夢得	一	〇・〇七
二九	邵金華曰		二	〇・一四
三〇	周延平(周氏)曰	周濶	五	〇・三四
三一	蔡氏曰	蔡氏	二	〇・一四
三二	張子曰	張載	二	〇・一四
三三	盧氏曰	盧氏	一	〇・〇七
三四	項江陵曰	項安世	一	〇・〇七
三五	呂東萊曰	呂本中	二	〇・一四
三六	真西山曰	真德秀	二	〇・一四
三七	輔慶源曰	輔廣	六	〇・四一
三八	應金華曰	應鏞	二	〇・一四
三九	王新安曰	王氏	一	〇・〇七
四〇	朱子曰	朱熹	八	〇・五五
四一	漢書藝文志曰	漢書藝文志	一	〇・〇七
四二	賈氏曰	賈公彥	一	〇・〇七
四三	慕容氏曰	慕容彥逢	一	〇・〇七
四四	劉清江曰	劉敞	一	〇・〇七
四五	處叔曰	中井履軒	一	〇・〇七
四六	竹山曰	中井竹山	四八一	三二・九九
四七	善按(竹山按/按)	中井竹山	四八	三・二九
引用批評回数合計			一四五八	一〇〇・〇

禮記篇名	各篇引用批評	%
仲尼燕居 (二八)	四	〇・二七
孔子閒居 (二九)	三	〇・二一
坊記 (三〇)	三	〇・二一
*中庸 (三一)	〇	一・五八
表記 (三二)	〇	〇
緇衣 (三三)	二二	一・五一
奔喪 (三四)	一九	一・三〇
問喪 (三五)	五	〇・三四
服問 (三六)	五	〇・三四
間傳 (三七)	二	〇・一四
三年問 (三八)	三	〇・二一
深衣 (三九)	一	〇・〇七
投壺 (四〇)	三	〇・二一
儒行 (四一)	六	〇・四一
*大學 (四二)	二	〇・一四
冠義 (四三)	〇	〇
昏義 (四四)	二	〇・一四
鄉飲酒義 (四五)	二	〇・一四
射義 (四六)	九	〇・六二
燕義 (四七)	四	〇・二七
聘義 (四八)	四	〇・二七
喪服四制 (四九)	五	〇・三四
合計	一四五八	一〇〇・〇



# 『履軒古風』 卷一翻刻・訳注 (附卷二校勘記)

湯 城 吉 信

現実の国では、いかに美しい幸福、快適な生活に恵まれても我々は常に重力の影響下に動いているにすぎず、たえずこの影響にうちかたなければならぬ。だが思想の国では、我々は物体ならざる精神であり、重力という必然の重みから免れる。そのため地上のいかなる幸福も、美しい豊かな精神が時をえて自らの中に見いだす幸福には比すべくもない。

— ショウペンハウエル「思索」(『読書について 他二篇』、

岩波書店、一九八三、二〇頁)

『履軒古風』は中井履軒著の漢詩集である。全四巻。

履軒は近体詩の規則を好まず、三十代以降、専ら古体詩を作った。『履軒古風』では製作年代順に作品が収録される。作品から確認できるおおまかな年代は以下のようである。

巻一 〓 明和三年(一七六六) 【京都行まで】

巻二 明和三年(一七六六) 〓 明和四年

【京都行前後の詩】

巻三 帰坂後 〓 安永二年(一七七三)

巻四 年が確認できる詩：

甲辰(一七八四)、辛亥(一七九二)

この中、巻一と巻二とは、履軒の思いを表出した詩が多い点注目される(巻三、巻四は画賛が多い)。その他、老荘を題材にした詩は思想史上、(おそらく)キンケイを詠った詩は博物学史上、注目に値する。巻二は『洛汭奚囊』として別にまとめられており、筆者はすでに『洛汭奚囊』— 中井履軒の京都行(『懷徳堂センター報』二〇〇四)として、その全文と訳注とを紹介した。本稿で

は、卷一の全文とその訳注とを紹介したい。卷一からは、京都に旅立つまでの履軒の思いを窺うことができる。

テキストは、懷徳堂文庫には、履軒手稿本の他、「懷93」のラベルのある写本が一冊あり、新田文庫にも二冊の写本が、北山文庫にも吉田鋭雄写だと思われる写本が一冊ある。新田文庫の一冊（E138）は卷二以降だけを取めるが、履軒の添削が見える手稿で、詩作の過程を窺うことができるので貴重である。もう一冊（E147）は卷四にも句点があるので読解の参考になる（手稿本では卷四は「会虞―観天地第一」以外は句点がない）。北山文庫にある北山写本は、文字は見やすいが誤字もあるので注意が必要である。

本稿では、手稿本を底本とし、適宜各テキスト参照した。翻字は、現代通用字に改めた。

先に述べたように、筆者は、卷二の内容をすでに『洛納奚囊』―中井履軒の京都行』（『懷徳堂センター報』二〇〇四）で紹介した。ただ、その後、手稿本『履軒古風』に先立つ履軒草稿だと思われる新田文庫本（E138）を発見した。『洛納奚囊』と手稿本『履軒古風』卷二とでは若干出入があるが、新田文庫本『履軒古風』（E138）にはそれらすべての詩が見える。また、漢字を見せ消ちにして書き換えた箇所があり、推敲の跡を確認することが

できる。以上のことから、各テキストの前後関係は以下のようなであると推測できる。

新田文庫本『履軒古風』（E138）（卷二の部分）

↓『洛納奚囊』↓手稿本『履軒古風』卷二

そこで、本稿では、新田文庫本『履軒古風』（E138）（卷二の部分）中の『洛納奚囊』との異同を紹介したい。なお、その作業の中で、拙稿『洛納奚囊』―中井履軒の京都行』における翻刻ミスを発見した。お詫びを申し上げます、合わせて挙げたい。

## 『履軒古風』

印「履軒圖書」、「懷徳堂圖書記」、「天生寄進」、「大阪大學圖書之印」、受入印「昭和39.12.22受入/104997」

## 序

履軒幽人喜誦古風詩賦、時而出之者、此篇是也。有類乎兩漢之詞、有類乎唐人長短篇、若兩漢巨賦、非其所好也。又有倣乎三百篇\*、有倣于楚之騷\*。幽人不喜魏晉六朝

之詩、尤不許陳思<sup>\*</sup>之八斗<sup>\*</sup>矣。然酷愛彭沢<sup>\*</sup>之辭、而不能學也。擬而非類焉者、亦或有之。及銘贊辭皆附焉、合而命之、曰履軒古風。其用韻獨循古韻、断々乎弗奉休文<sup>\*</sup>正朔也。蓋汚之、其好古之癖不可医也。若斯、宜乎今人之弗吾聽。

履軒幽人自序「既雨既處<sup>\*</sup>」「尚德積載<sup>\*</sup>」(印)

【注】○三百篇：『詩經』のこと。○楚之騷：楚の国の『離騷』。広く楚辞のことを言うと思われる。○陳思：曹植のこと。○八斗：謝靈運が曹植の才能を称えて、「天下才共一石、曹子建独得八斗、我得一斗」(天下の才一石を共にし、曹子建独り八斗を得、我一斗を得)(『南史』謝靈運伝)と言ったことに基づく。○彭沢：陶淵明のこと。○休文：梁の沈約の字。沈約は、『四声譜』を著した音韻学の權威。○奉：正朔：「正朔を奉じる」で臣下になること。○「既雨既處」「尚德積載」(印)：『周易』小畜の卦(上九)の「既雨既処、尚德載」に基づく。履軒は、この文句を「既に雨ふりて既に処<sup>ちよ</sup>り、徳の載<sup>お</sup>むる尚ぶ」と読み、「不遇な状況においても心安らかに居り、(表立った行動は取らずに)徳を積むことだけを尊ぶ」と解していたらしい。履軒の『周易雕題』には以下のようにある。「『処』、安居也。時可則出行、不可則不出。『既

雨』、不可行之時也。故安居不出、便是德積而未見於行事之時也。…往必遇害。君子唯脩德於身、靜以処之而已。君子在乱世棄富貴、独積德於身者当此。…」。履軒の自己認識、生き方の覚悟を見ることができよう。

【書き下し文】

履軒幽人喜びて古風詩賦を誦し、時にして出だす者、此の篇是れなり。両漢の詞に類する有り、唐人の長短篇に類する有れども、両漢の巨賦の若きは、其の好む所に非ざるなり。又た三百篇に倣<sup>なま</sup>う有り、楚の騷に倣<sup>なま</sup>う有り。幽人魏晋六朝の詩を喜ばず、尤も陳思の八斗を許さず。然くして彭沢の辞を酷愛するも、学ぶ能わざるなり。擬して焉<sup>これ</sup>に類せざる者、亦た或いは之有り。銘贊辞に及ぶまで皆な焉<sup>こゝ</sup>に附し、合して之に命づけて、『履軒古風』と曰う。其の用韻は独り古韻に循<sup>したが</sup>い、断々乎として休文の正朔を奉ぜざるなり。蓋し之を汚さんとも、其の好古の癖医<sup>な</sup>すべからざるなり。斯<sup>か</sup>くの若くんば、宜<sup>よ</sup>なるかな、今人の吾れを聽しとせざるは。

【訳】

履軒幽人は、古風な詩賦を詠み、折に触れて作つたものがこの篇である。「その中には」両漢の詞に類するも



のもあれば、唐人の長短篇に類するものもあるが、兩漢の長編の賦のようなものは、その好むところではない。また『詩経』を模倣するものもあり、楚辞を模倣するものもある。幽人は魏晋六朝の詩を喜ばず、特に曹植の八斗の天才は認めない。そして陶淵明の辞を酷愛するが、学ぶことはできない。真似しようとして真似できなかったものもまたある。銘賛辞に及ぶまでみなここに附して、合わせてこれを名づけて『履軒古風』と言う。その用韻は専ら古韻に従い、断固として沈約には従わない。おそらくどのようなにしても、その好古の癖は治すことはできないであろう。以上のようなので、今の人が私を良しとしないのは、もつともなことだ。

【参考】

履軒は、古韻を研究し、明和六年（一七六九）に『諸韻瑚璉』を、明和七年（一七七〇）に『履軒古韻』を著している。

卷一

\*三十五歳に京都に行くまでの作品を収める。自らの生き方の模

索が見える。

礼賦

\*『荀子』の礼賦に異議を唱え、礼のすばらしさを織物に喩えて歌い上げた賦。

荀卿氏六賦、礼其一也\*。其致意也遠、其厝辞也高。然要其歸、依然性悪善偽之説已\*。余偶読焉、憮然久之、遂有是述、其辞曰、

荀卿氏が六賦、礼は其の一なり。其の致意や遠く、其の厝辞せじや高し。然れども其の歸を要するに、依然として性悪善偽の説のみ。余われ偶たままた焉これを讀み、憮然たること之を久しくし、遂に是の述有り、其の辞に曰く、

崑崙之丘

靈蚕吐糸

法天兮為經

則地兮為緯

展之駕之

造化之機

載登載織

漢上之女子\*

其質太素

崑崙の丘

靈蚕糸を吐き

天に法りて經と為し

地に則りて緯と為し

之を展べ之を駕る。

造化の機

載ち登し載ち織り

漢上の女子

其の質太素

上帝之衣

玄黄<sup>\*</sup>絢之

維有陶唐氏<sup>\*</sup>

嬀也繼之

九文五采

姑伝婦承

至于鎬之姫<sup>\*</sup>

織染之工

於斯大備

其縷三千

其綜三百

煌々濟々

其文有郁

大君作被兮

煦万方赤子

姫氏老而婦不良

機朽蠹兮靈蚕死

被百結兮四出

赤子喁々兮莫之慰

彼卉之絮兮

亦可以為被

被之彫兮

上帝の衣

玄黄もて之を絢る。

維に陶唐氏有り

嬀や之を継ぎ

九文五采

姑伝え婦承く

鎬の姫に至り

織染の工

斯に於いて大いに備わる

其の縷三千

其の綜三百

煌々濟々として

其の文郁有り

大君被を作り

万方の赤子を煦む。

姫氏老いて婦良からず

機朽蠹し靈蚕死す。

被百結して四出し

赤子喁々として之を慰む莫く

彼の卉の絮や

亦た以て被と為すべく

被の彫るるや

誰其為之

陶唐之裔兮

有漢之季

其采伊何

維紅暨紫<sup>\*</sup>

豈謂不懿

不如靈被也

洵煥且美

自茲厥後

是統是似<sup>\*</sup>

有弊有革

于今千祀

嗟乎靈蚕兮

終世不可觀

撫彼百結之餘

其何所徂

薄言楮之

以待後之作者

誰か其れ之を為めん

陶唐の裔

有漢の季

其の采伊れ何ぞや

維だ紅の紫に暨ぶも

豈に靈被に懿からず

如かずと謂わん

洵に煥として且つ美し

茲厥より後

是れ統ぎ是れ似ぎ

弊有り革有り

今において千祀

嗟乎靈蚕や

終世観るべからず。

彼の百結の餘を撫いて

其れ何くにか徂く所ぞ

薄か言に楮し?

以て後の作者を待つ。

【校勘】○而…「兮」を上から直す。○之、以…「之、兮」を上から直す。

**【注】**○荀卿氏六賦、礼其一：『荀子』に「賦篇」があり、冒頭は礼の賦である。○依然性悪善偽之説已：礼の賦に「性不得則若禽獸、性得之則甚雅似者歟」とあることを言うのであろう。○漢上之女子：『詩經』周南、「漢広」に「漢上游女、無求思者」とあるのを参考にするか。○玄黄：『孟子』滕文公下篇に、王への礼物の布として登場する。○陶唐氏：太古の伝説上の帝王、堯のこと。儒教で理想の君主とされる。○媯：堯と並び称される太古の伝説上の帝王、舜の姓。○鎬之姫：周王の姓は姫。鎬は、周の都の所在地。周代の文王、武王も理想の君主とされる。○百結：つぎはぎの服。『藝文類聚』卷六七所引王隱『晋書』「董威輦每得殘碎繪、輒結以為衣、号曰百結」など。○紅暨紫：『論語』陽貨篇に「惡紫之奪朱也（紫の朱を奪うを惡む）」という孔子の言葉が見える。古来、中国では朱が正式な色とされた。○是綫是似：「似」も継ぐの意。『詩經』「良耜」に見える。

**【訳】**荀子の六つの賦の中、礼の賦はその一つである。その内容は深く、その表現は高邁である。だが、その帰着するところは、やはり性悪説にすぎない。私はたまたまこれを読んで、しばらく惘然としてしまい、やがてこの文章をしたためることになった。その言葉に言う。

崑崙の丘で靈妙なる蚕が糸を吐き、天に則って縦糸とし、地に則って横糸とし、これを操った。造化の織機にのぼしては織り上げていき、漢水のほとりの神女は汚れなき性質を持ち、上帝の衣は「天地の色である」黒と黄とで飾られた。ここに、堯が登場し、舜がそれを継ぎ、すばらしき文が織りなされ、それを姑が伝え、婦人が承けた。姫氏（周王朝）に至って、織物の技術はたいそう完成した。その布は種類も多く、煌々と美しき模様があり、大君は布団を作って、世界中の赤子を育んだ。姫氏（周王朝）が衰えて、婦人は良くなく、織機は朽ち、靈妙なる蚕も死んだ。布団はつぎはぎの物が様々出現し、赤子はギャーギャーと「泣き」慰められず、木綿で布団も作れるが、乱れた布団は、誰がよくそれをおさめよう。堯の末裔、漢末には、この綫ほどのようになったであろう。紅が紫に混じった（正式な色が失われた）が、靈妙なる布団に比べてあなたがち悪いわけでもない。まことに暖かくかつ美しい。その後、継承されたり壊されたり革められたりしつつ、今に至るまで千年、ああ、靈妙なる蚕は、ついぞ見ることはできなかった。あのつぎはぎの遺物を拾って、さてどのようにすればよいのか。とりあえず、ここに記して後世の作者を待ちたい。

将棋引

\*将棋の対局を活写する。引は楽府体の詩。

方地瓜分垠封疆	方地瓜分し封疆を垠り
中天星墜殺氣揚	中天星墜ち殺氣揚がる。
閩外秋令元有寄	閩外の秋令元有り
桂殿春芳擁玉皇	桂殿の春芳玉皇を擁す。
六師死命仰鉞旄	六師死命鉞旄を仰ぎ
千里成筭下廟廊	千里成筭廟廊を下る。
歩卒九道先啓行	歩卒九道先に行を啓き
令巖部伍森成行	令巖たる部伍森として行を成す。
前徒知進不知退	前徒進むを知りて退くを知らず
五伐七伐声鏘々	五伐七伐声鏘々たり。
威名元伝漢飛将*	威名元漢飛将と伝え
意气縦横不可当	意气縦横たりて当たるべからず。
軽車衝墉多轆軻	軽車墉に衝たりて轆軻多く
驕馬遭步或玄黄*	驕馬歩に遭い玄黄に或う。
更把生虜補卒乘	更に生虜を把りて卒乗を補い
遂鼓死士奪塹陞	遂に死士を鼓して塹陞を奪う。
従軍有賞皆金印	従軍賞有り皆金印
幕府策勲拜龍章	幕府勲を策して龍章を拜す。

金将本来数奇者	金将本来数奇なる者にして
血戦功就独相忘	血戦功就り独り相忘わる
不見夫差心益驕	見ずや夫差の心益々驕りて
豈料勾践胆日嘗	豈に料らんや勾践胆を日々嘗むるを。
虎賁积嚴寇伺釁	虎賁嚴を積き寇釁を伺い
将军在外邦無良	將軍外に在りて邦に良無し。
疾雷一声不掩耳	疾雷一声耳を掩わず
車馬衝虚忽翱翔*	車馬虚を衝かれ忽ち翱翔す。
金銀棄擲徒資敵	金銀棄擲し徒らに敵を資け
四面重围災剥床	四面重围され災い床を剥ぐ。
禁垣車馬接踵没	禁垣の車馬踵を接して没し
勤王旌旗引領望	勤王の旌旗引領を引きて望まる。
且躋且長遡洄道	且つ躋り且つ長く洄道を遡り
不遂不退触藩羊*	遂まず退かず藩に触るる羊。
白虹竟天謫何在	白虹天に竟り謫何にか在らん
非王是将非将王	王に非ず是れ将にあり将王に非ず。?
股肱移禍雖已矣	股肱に禍を移すこと已われりと雖も
天殃寧知弗可攘	天殃寧んぞ攘うべからざるを知らん。
左将孤軍天一角	左将孤軍天一角
斜指斜突氣激昂	斜めに指し斜めに突き氣激昂す。
一木胡能支崩厦	一木胡ぞ能く崩厦を支えん
櫬壁便見哭道傍	櫬壁便ち見る道傍に哭するを。

鬪蝸自古夢一覺 鬪蝸 古より夢一たび覚むれば  
留与閑人鑒興亡 留めて閑人と興亡を鑒む。

寄語多少青衿子 寄語す 多少の青衿子よ

莫動機心徒自荒 機心を動かして徒らに自ら荒むこと

莫かれ、と。

詩中所序碁勢、往々凡庸敗局、非高手須有、所謂簾下店頭手  
段\*。亦只為吾輩人言、非為高手謀也。

詩中序の碁勢、往々にして凡庸敗局、高手須く有るべきに非ざるなり。所謂簾下店頭手段なり。亦た只だ吾輩の人の為に言うのみに、高手の為に謀るに非ざるなり。

【校勘】○何：「安」の上に「何」と書く。

【注】○閫外：域外の意。転じて出征軍。○漢飛：将漢の李広が匈奴からこう呼ばれた。○玄黄：この場合、馬の病。黒毛の馬が黄色になるからと言う。○翱翔：さまようこと。○触藩羊：『周易』大壯の卦(上六)に「羝羊触藩、不能退、不能遂、无攸利」(羝羊 藩に触れ、退く能わず、遂む能わず、利する攸無し)とある。行き場を失うこと。○白虹：兵の象。「白虹貫日(太陽を貫く)」で君に危害を加える象。『史記』などに見える。○股肱移禍：『史記』楚世家に、昭王が病気になった際、その

禍を将相に移すことができるといふ太史の言に対して、昭王が「将相、孤之股肱也。今移禍、庸去是身乎」(彼らは私の体の一部だ。彼らに禍を移しても我が身から禍が去ったことにはならない)と言ったことに基づく。○簾下店頭手段：縁台将棋のへぼ将棋という意味であろう。

【訳】升目に国境を分かち、中空を星が落ち殺気がただよう。都城の外では軍隊が舍りに落ち着き、宮殿では春の草が皇帝を取り囲んでいた(最初の整った駒の配置を言う)。天子の軍隊は命を受け武器や旗飾りを取り、千里に作戦を巡らし朝廷を辞した。歩卒(歩)は全国の道路(九つの目)に先鋒となり、厳格たる部隊は並び行進する。前方の卒(歩)はひたすら前進し後退することを知らず、声を上げながらひたすらに斬りかかる。威名はもと漢の飛將軍と賞され、意気盛んに防ぐことができな。軽い車(香車)は、城壁にぶつかると行きなずみ、驕れる馬(桂馬)は歩卒に遭うと窮地に陥る(桂の高飛び歩の餌食)を言うのである。捕虜を生け捕りにして我が兵力を補い、遂に志士を鼓舞して敵の陣地を奪う。従軍に賞あるのはすべて金印で(金に成ること)、幕府で功名を称揚するのに龍の文様を拝む(龍に成ること)。金将は元来不幸者で、血戦で功名を遂げれば忘れられてしま

う。ご覧あれ、夫差の心はますます驕り高ぶり、勾踐が胆を嘗めて復讐を誓っているのを知るよしもない。精銳軍も嚴重な守りを緩め、敵が隙を窺う。將軍は出払い、国に優れた部下もなく、急襲されて防ぐ暇もない。車馬は虚を突かれ逃げまどう。金や銀を捨ててひたすら敵を助け（敵の駒になること）、四面を包囲され、災禍は寢室にまで迫る。宮廷の車馬は次々となくなり、勤王の旗印を首を長くして待つ。くねくねと長い道を逃げ回り、前進も後退もできず、行き止まりにぶち当たる。白い虹が天をわたり、罪は誰にあるかと議論し、王か將軍かと取り沙汰す。？〔昭王と違つて〕股肱の臣下にも禍を移したが、天罰はどうにも払いのけることができない。左の將軍（角のこと）は天の一角で孤軍奮闘し、斜めに指し斜めに突撃し、意気盛んだ。〔だが〕一本の木では崩れゆく建物を支えることはできない。棺を道端に泣き叫ぶのを見、蝸牛角上で争つた蝸牛が夢から覚めれば、〔盤をそのまま〕留めて暇人が攻防を云々する。若者諸君よ、巧詐の心を勞して自らを損なうことのないように。

詩の中で描写したのは、凡庸な負け将棋で、上手な人の手ではない。いわゆる縁台将棋のへぼ将棋というやつである。また私のような輩のために言つただけで、上手な

人のために言つたものではない。

### 秋夜独坐

\*秋の夜に時間の過ぎゆくのを嘆く詩。

独有流年感

独り流年の感有り

挑燈坐三更

燈を挑<sup>か</sup>げて三更に坐す。

疎簾挂落月

疎簾に斜月挂かり

寒蛩悲中庭

寒蛩<sup>きよう</sup>中庭に悲しむ。

木葉知落尽

木葉落ち尽くすを知れるは

此夕減秋声

此の夕べ秋声減じればなり。

【校勘】○落：「斜」の上に「落」と書いている。

【訳】独り月日の過ぎ去るのを感じ、灯りをかいて真夜中に座る。疎らな簾に傾いた月が懸かり、晩秋のコオロギは中庭で悲しんでいる。木の葉はすっかり散つたらしい、今晚は木の葉の音が聞こえにくくなつたから。

### 樵者

\*樵が自然にとけ込んで、無心の境地に達しているがごとき状況を詠う詩。竹山『奠陰集（詩集）』卷一（影印本二六六頁）に「樵

者」と題する詩が、卷二（影印本二八〇頁）に、「雪中樵夫」（『和歌新題百首詩』）と題する詩がある。いずれも題詠であろう。

与木石居鹿豕遊 木石と居り 鹿を豕しかいて遊ぶ  
不知孰是忘機者 知らず 孰たれか是れ機を忘るる者なるかを  
無端斧斤動雲根 端はし無く 斧斤を雲根に動かせば  
一雨滿山霜葉下 滿山に一雨ふり 霜葉下る

【注】○忘機…機心（巧詐の心）を忘れる。○雲根…山の高所を言う。

【訳】木や石という、鹿を追って遊ぶ。  
（この中）誰が巧詐の心を忘れる者なのであろうか。  
無心に斧を雲の根に振るうと、滿山に一雨降り、紅葉が落ちる。

寓燭閨情（燭に閨情を寓す）

\*閨情は閨（ねや）での情。

空房復何有 空房 復たた何か有らん  
孤燭思難裁 孤燭 思い裁ち難し。  
滴尽千行淚 千行の涙を滴したり尽くし

丹心亦作灰 丹心 亦た灰と作なる。

【訳】 人気がない部屋には他に何も無い。一本の灯りの思いはたち（「芯を」裁つ（かく）」に「（未練を）断つ」を掛ける）がたい。千筋もの涙を流し尽くし（「蠟が流れる」ことと「涙を流す」ことを掛ける）、赤い心（「赤い芯」に「真心」を掛ける）はまた灰となる。

墨水咏、倣閩東体（墨水咏、閩東体に倣う）

\*墨水は隅田川の漢名。閩東体は未詳。

西岸下武陵 西岸 武陵を下り  
東岸上綵州 東岸 綵州に上る。  
岸々秋一色 岸々は 秋一色に  
凄風滿客舟 凄風 客舟に滿つ。

其二

王孫昔此遊 王孫 昔 此こゝに遊び  
芳草年々緑 芳草 年々 緑なり。  
于今白鳥飛 今において 白鳥飛び  
京客勞心曲\* 京客 心曲を勞す。

【注】○王孫昔此遊：『楚辭』「招隱士」の「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」を意識するか。○京客勞心曲：心曲は、心のくま、心中。『伊勢物語』第九段「東下り」で、京から「隅田川」に来た男が都鳥（ユリカモメ）を見て郷愁に襲われるという有名な話に基づく。

【訳】西岸は江戸に下り、東岸は上総に上る。両岸は秋一色に寒風は客船に満ちる。

（その二）貴族の子弟は昔、ここで遊んだが、芳しい草は毎年緑色に茂っている。今は白鳥が飛び、京都の客は心を悩ませる。

班婕妤

\*班婕妤は、漢の武帝の寵愛を得た美人。後、寵愛を失い、自らを秋の扇に喩えて、「怨歌行」という歌を作った。

廟廊正色士 廟廊正色の士  
内宴召来不 内宴召し来たるやいなや。  
一自辞同輦\* 一たび自ら輦を同じくするを辞すれば  
棄扇不待秋 棄扇秋を待たず。

【注】○同輦：『蒙求』に、成帝が、後庭に遊んだ際、

同じ輦（車）に乗ろうと班婕妤を誘うと、「古の聖賢はそのようなことはしませんでした」と断った話がある（『班女辞輦』）。

【訳】朝廷のまじめな士（？）が宮廷での宴会に招くかどうか。

ひとたび同じ輿に乗ることを拒否したばかりに、扇は秋を待つまでもなく捨てられた。

怨詞

\*女性の怨みを詠った閨怨詩。題詠であろう。

妾如弓上絃 妾は弓上の絃の如く  
君如絃下弓 君は絃下の弓の如し。  
絃懸合繩墨 絃懸かりて繩墨に合うも  
弓体不可窮 弓体窮むべからず。

【訳】私は弓の上の弦のようで、あなたは弦の下の弓のようです。  
弦は規則に従いますが、曲がった弓の体はどうしようもありません。



老子

\*道家の祖として有名な老子を詠った詩。履軒は老荘について一家言を有していた（拙稿「中井履軒の老荘観」〔中国研究集刊〕四六号、大阪大学中国学会、二〇〇八年）参照。

退歩吾不做 退歩して吾れは做さず

說雌\*更禁人 雌を説きて更に人に禁ず。

恕視\*天下湖 天下の湖るるを恕視するも

百年營此身\* 百年此の身を営む。

【注】○雌：履軒は老子の道を「雌道」だと言った。雌

道とは、消極的で卑怯な方法を言う（拙稿「中井履軒の老荘観」〔中国研究集刊〕四六号、大阪大学中国学会、二〇〇八年）参照。○恕視：恕（カイ、カツ）は、憂える、心配のない様など相反する意味を持つが、ここでは「介」に通じ、気にする意にとらえた。○百年營此身：老子が長生きしたという言い伝えを踏んでの発言であろう。履軒は老子を養生術の祖と見ないが、一般的伝承に従ったのであろう。『史記』老子列伝「蓋老子百有六十餘歳。或言二百餘歳。以其修道而養寿也。」履軒『老子雕題』二八（五九治人事天章）「…与養生無干涉。…老聃元無仙術。謬為道家之祖、受誣太甚。」

【訳】退歩して自分は何もしないばかりか、消極的なやり方を説いて、人にあれこれするなどと言う。世の中の人々が耽溺していると文句を言いつつ、自分は養生に励んでいる。

【参考】

『篋陰集（詩集）』卷二（影印本二八一頁）に竹山作「老子」詩があり（蘭洲「和歌新題」に題を取った竹山「和歌新題百詩」）、「青牛蓬累日、何物候真人、関上奪朱氣、釀成胡羯塵」と詠う。

独興 在馬山作（馬山に在りての作）

\*馬山は有馬山。履軒の師五井蘭州は、宝暦九年（一七六〇）に中風の湯治に有馬に行った。その際、履軒も供した（西村天囚『懷徳堂考』上五一頁）。これはその際の作品であろう（蘭洲の作品は『蘭洲遺稿』に見える）。有馬へは懷徳堂関係者はたびたび訪れたらしく、履軒の弟子竹島實山も「馬山紀行」を残している。

行到樺樹下 行きて樺カクの樹の下に到り

掃石坐泉声 石を掃きて泉声に坐す。

無風葉自墜 風無くして葉自ら墜ち

時聴魚子鳴 時に魚子の鳴くを聴く。

【校勘】○樺：手稿本は「樺」を墨で消す。ラベル「懷93」の写本は「霜」に作る。○葉：墨で消す。

【注】○樺：履軒はサクラに樺の字を当てた（履軒著『画觸』に詳しい説明が見える）。

【訳】歩いていってサクラの木に到り、石を掃き清めてせせらぎの音を聴きながら座る。風がないのに葉は自然と落ち、時々、魚の子が鳴くのが聞こえる（?）。

蠹魚

\*自分を蠹魚（しぎょ）に擬えた詩。

此魚不躍淵

此の魚 淵に躍らず

老死在陳編

老死すること陳編に在り。

男兒七尺軀\*

男兒 七尺の軀からだ

偏与爾相憐

偏なんじえに爾と相い憐れむ。

【注】○七尺軀：陸雲詩に多く見える。

【訳】この魚（シミは漢字で書くと蠹魚）は淵で飛び跳ねず、古書の中で老いて死ぬ。七尺の身を持つ男兒であ

りながら、ひたすらお前と（同じ境遇を）憐れみ合う。

聚頭扇

\*扇子のこと。

破輪用陽数\*

破輪 陽数を用ゆ

三分三十輻\*

三十の輻を三分し

楮輞飛生風

楮輞 飛びて風を生じ

一駕解焔々\*

一駕 焔々たるを解く

【注】○陽数：奇数。（扇子の骨の数は奇数だった?）

○三十輻：車輪の矢の数は三十と決まっていた（『老子』十一章「三十輻共一轂」を参照）。○輞：大輪。車輪の回りのたが。○駕：乗り物。○焔々：盛んな様。

【訳】破れた車輪（\*扇子を喩える）は奇数を使う。三十の矢を三分し（\*扇子はおよそ百二十度なので、三百六十度の三分の一）、紙の車輪が飛んで風を起こし、一台の乗り物が炎暑を払う。

舟行雜詩

網干在龍野西南三里許

(網干は龍野西南三里許ばかりに在り)

\*龍野は中井家の出身地であり、履軒・竹山兄弟も何度も訪れている(履軒著「昔の旅」を参照されたい)。この詩は、懷徳堂文庫所蔵の「竹山・履軒諸先生張交(はりませ)」と題箋の張られた屏風に「舟行雜詠」として見え、題辭の下に「賦昔遊寄播中兄弟」とある(末尾に「履軒幽人」の署名と「完」「履軒幽人」の印あり)。若干の違いについては、【注】ならびに【参考】に示した。

山城平旦氣

山城 旦の氣

正与猿鶴\*似

正に猿鶴と似たり。

結伴出郭門

結伴して郭門を出れば

即便伊川はら沚

即ち便ち伊川のほとり沚。

其二

行々長堤草

行き行く長堤の草

草短鞋底柔

草短くして鞋底に柔し。

行々且莫な亟

行き行き且くはいと亟な莫かれ

将喚下灘舟

将に下灘の舟を喚よばんとす。

其三

日出東岑上

日は東の岑みねの上に出

未消一川烟

未だ一川の烟消えず。

烟際頻回首

烟の際に頻りに首を回めぐらせども

棹声不見船

棹声(のみにして)船を見ず。

其四

烟破棹影来

烟は棹の影を破りて来たり

載薪霜未乾

薪を載せて霜未だ乾かず。

嗟来将一醉

嗟あ来、将に一醉せんとするに

載我到網干

我を載せて網干に到る。

其五

篙人顧我笑

篙人こ我を顧みて笑い

転棹舟成巴

棹を転じて舟巴を成す。

低歌無答語

低く歌いて答語無く

艤舟在晴砂

舟をつ艤つくること晴砂に在り。

其六

同人一椀酒

同人一椀の酒

探囊各準還\*

囊ぶくろを探り各々還まわすを準はかる。

買得長江水

長江の水を買い得て?

兩岸三里山\*

兩岸 三里の山。

其七

烟波一條路\*  
勢靄\*穿得開  
右山每牆面\*  
左山遠徘徊

烟波 一條の路  
勢靄 あひだ 穿ち開き得たり。  
右の山は つね 毎に牆 かべ に面し  
左の山は 遠く徘徊す。

其八

急流半篙水  
山々一樣春  
山鳥啼送舟  
山花笑迎人

急流 半篙の水  
山々 一樣に春なり。  
山鳥 啼きて舟を送り  
山花 笑いて人を迎う。

其九

舟繞山趾過  
山背舟行走  
山容看不足  
双眸每在後

舟は山趾を繞りて過ぎ  
山は舟行に背 そむ きて走 に ぐ。  
山容は看れども足りず  
双眸は つね 毎に後ろに在り。

其十

水浅鑑人面  
魚在菱花中  
投食莫猜鉤

水は浅くして人面を鑑 うかが し  
魚は菱花の中に在り。  
食を投ぐるも鉤 かぎ を猜 な げず莫かれ

機心我已空

機心 我れ已に空し。

其十一

時々過淺瀬  
憂々船有声  
船底薄如紙  
能擗砂石行

時々 淺瀬を過ぎ  
憂々 あつち と船 声有り。  
船底 薄きこと紙の如し  
能く砂石を擗ちて行く。

其十二

春水能送舟  
春風不劳帆  
咄嗟長干尽  
網干竹樹巖

春の水は能く舟を送り  
春の風は帆を勞せず。  
咄嗟に長干尽き  
網干 竹樹 巖たり。

【注】○猿鶴：戦死者の靈を言う。『太平御覽』卷八五皇王部、卷八八八妖異部四「變化下」、卷九一六羽族部「鶴」「抱朴子」曰、周穆王南征、一軍尺化、君子為猿為鶴、小人為虫為沙」とある。○探囊：ここでは「探籌」(くじを引くこと)と解した。○買得長江水、兩岸三里山：李白「早發白帝城」「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿声啼不住、輕舟已過萬重山」の「兩岸」「千里」を意識するものか。○路：「竹山・履軒諸先生張交(は

りませ)」では「道」に作る。○斃霧「竹山・履軒諸先生張交(はりませ)」では「歎乃」に作る。○牆面：『論語』陽貨篇に、見通しが利かないことを言う表現として見える。履軒は『論語雕題』で、「面、虚字、猶向也。牆面、面於牆也」と雕題を付けている(『小学雕題』でも同様)。

【訳】

(その一)

山城の夜明けの気配は、ちようと(死人が化したという)猿や鶴のようだ(\*注参照)。

伴とともに城門を出れば、すぐに掛保川のほとりになる。(その二)

長い堤を歩いて行けば、草は短く草鞋の底に柔らかである。

まあ、慌てるなさるな、今、川下りの舟を呼びますから。

(その三)

日は東の峰の上に出、川一面の霧はまだ晴れない。

霧の際をしきりに見回してみるが、棹の音だけで舟は見えない。

(その四)

霧を破って棹の影が現れ、薪を載せて、霜はまだ乾いて

いない。

さあ、一酔いしようかと思いきや、私を乗せてもう網干に着いた。

(その五)

船頭は私を見て笑い、棹を回して船が旋回する。

低く歌って答えることもせず、舟を晴れた砂浜に着ける。

(その六)

同人が一椀の酒をくじ引きで飲む順番を決める。

長江下りを買った気分、両岸には三里の山が続く。?

(その七)

水面の一筋の路がたちこめた霧を開いて進む。

右の山は絶壁に面し(たように迫り)、左の山は遠くにある。

(その八)

急流は棹半分ぐらいの深さがあり、山は春の色でいっぱいである。

山鳥は鳴いて舟を送り、山花は笑って人を迎える。

(その九)

舟は山の麓を巡り、山は舟の後ろへと遠のいていく。

山の姿を見足りずに、瞳は常に後ろを振り返る。

(その十)

水は浅く人の顔を映し、魚は菱の花の中にいる。

餌を投げて釣りを疑わなくてよいぞ、私には魚を釣ろうという魂胆などすでになくなってきているのだから。

(その十一)

何度も浅瀬を過ぎ、かつかつと船に音が響く。

船底は紙のように薄く、砂利を打ちながら進んでいく。

(その十二)

春の水はよく舟を進め、春の風は帆にやさしく吹く。

たちどころに長い岸が尽き、網干の竹林が厳かに現れる。

【参考】 懷徳堂文庫所蔵「竹山・履軒諸先生張交（はりませ）」と題箋の張られた屏風中の「舟行雜詠」では、『履軒古風』のその十が九番目に、その九が十一番目にあり、両首の間に『履軒古風』にはない以下の作品がある。

舟中有屈生\*

舟中に 屈生有りて

莫謾誇独醒

独り醒めたりと 謾誇すること 莫かれ

魚小不堪葬

魚 小さくして 葬るに堪えず

水浅不没脛

水 浅くして 脛を没せず

【注】 ○屈生：憂国の詩人として有名な屈原のこと。以下、【解説】を参照されたい。○謾：あなどる。

【訳】 舟の中で、屈原がいて、「世の中で」自分だけが醒めていると誇るな。

魚は小さくて「漁夫辞」にあるように、人を「葬る」ともできないし

水は浅くて脛にも達しない（「漁夫辞」にあるように、足を洗うこともできない）。

【解説】『楚辞』で屈原作と伝えられる「漁夫辞」を踏まえる。同詩では、放逐され、世の混濁を嘆く屈原に対し、漁夫が世に合わせて生きていくことを説いている。関係する原文は以下のようである。

・屈原曰、举世皆濁、我独清。衆人皆醉、我独醒。是以見放。

（屈原が、世の中は皆濁り、私だけが清んでいるので放逐されたと言う。）

・屈原曰、寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白而蒙世俗之塵埃乎。

（屈原が、純白の身を濁った世の中で汚すより、投身自殺して魚の餌になる方がましだと言う。）

・漁夫：乃歌曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足。

（漁夫が、水が清んでいれば冠の紐を洗えば良いし、

濁つていれば足を洗えば良い（状況に合わせて行動しろ）と言う。）

### 食板銘

\*まな板を擬人化してその食への耽溺を諷める銘。銘はいさめの言葉。

民之有生	民の生有るは
得食維艱	食を得ること維れ艱んず。
惟茲口腹	惟だ茲の口腹
有性自天	性の天よりする有り。
惟哲知命	惟だ哲のみ命を知り
不敢沈瀕	敢えて沈瀕せず。
几案申警	几案に警を申ぶ
嚴恪饗殮*	饗殮を嚴恪にせよ、と。
彼昏不知	彼昏くして知らず
溺心芻豢*	心を芻豢に溺る。
饗餐敗義	饗餐義を敗り
与色同愆	色と愆を同じくす。
易牙乱齐	易牙を乱し
阿衡昌殷*	阿衡殷を昌んにす。
矧此蒙士	矧んや此の蒙士の

敢求飽安 敢えて飽安を求むるをや。  
 古人有言 古人言有り  
 咬得菜根\* 菜根を咬み得る、と。

【注】○饗殮：饗は朝食、殮は夕食。○芻豢：家畜。転じてご馳走の意。○饗餐：飲食を貪るとされる悪獣。青銅器の裝飾に多く用いられた。○易牙：齊の桓公の宦者。厨房を司り桓公の寵愛を受けた。君主に取り入るために自らの子を料理した故事（「蒸子食君」）で有名（「韓非子」十過篇、二柄篇、「管子」小称篇などに見える）。

○阿衡：殷代の名宰相、伊尹の職名。『蒙求』の「伊尹負鼎」の項に、伊尹が湯王に仕えるために料理人になり、遂に志を得て宰相の位にのぼったことを述べる。○咬得菜根：朱子『小学（外篇）』末尾に、汪信民の言葉として「人常咬得菜根、則百事可做」とある。『呂氏師友雜録』に因る言葉だと言う。貧窮の中に大事をなす素地ができる、の意。また、この言葉に題名を取った明代の洪自誠の『菜根譚』も有名。

### 【訳】

庶民の生活においては、食を得ることが問題だ。この飲食は、天性によるものだ（どうしようもない）。

ただ賢人だけが天命を知って酒食に耽ることがない。  
机の上に「食事を慎め」という警句を書いて、

彼は蒙昧無知にして、ご馳走に耽溺する。

饕餮とうてう（\*ここでは心の悪い面を言うのであろう）が道義

を破り、色欲と罪を同じくする。

易牙えきがは（道義に背いた飲食で）斉の国を乱し、〔一方〕

伊尹は殷を盛んにした。

〔古の賢人さえこのように様々あった。〕ましてやこの蒙

昧の士が満腹や安逸を求めるのはどうしようもない。

古の人は次のように言った。

草の根を噛め〔そうすると何事も成し遂げることができ

る〕、と。

### 履軒吟

\*履軒が自らの生き方を表明した詩。履軒という号に託した思

が読み取れる。

寥々乎林之丘乎

浩々乎河之洲乎

飄々乎天之衢乎

隱々乎山之幽乎

氣象之殊兮有昼夜乎

寥々たり 林の丘

浩々たり 河の洲

飄々たり 天の衢かど

隱々たり 山の幽

氣象の殊なるや 昼夜有るも

吾心所適兮無春秋乎

紅塵不至兮白丁弗遇

披陳編兮尚友兮前修

務遠心之害兮

胡憫乎躬之疾

嗟嗟、履之无妄兮

庶幾乎彷彿

中而下位兮

剛而能屈

我其夙夜

履道之坦兮

享貞之吉

優哉游哉

聊以卒歲兮度日

吾心適う所 春秋無し。

紅塵至らず 白丁遇わず

陳編を披ひらきて 前修を尚友す。

務めて心の害を遠ざけ

胡ぞ躬みの疾を憫まんや。

嗟嗟、之を履むこと妄ならず

彷彿たるを庶幾いう。

中にして下位にあり

剛にして能く屈す。

我其夙と夜に

道を履むこと之れ坦たり。

貞の吉を享け

優なるかな 游なるかな

聊か以て歳を卒おえ日を度わたらん。

【校勘】○浩々…中井木菟麻呂『懷徳堂水哉館先哲遺事』  
所収の「履軒幽人伝」では「演々」に作る。○妄…北山  
写本は「忘」に誤る。

【注】○履之无妄以下…『易経』履卦九二爻辞こうじに「履道坦々、  
幽人貞吉（道を履むこと坦々、幽人貞にして吉）」とあり、  
その象伝に「幽人貞吉、中不自乱也（幽人貞吉とは、中



自ら乱れざるなり」とある。履軒はこれを自分の生き方の基準とした。○卒歳：『楚辞』「九辯」に見える。

【訳】ひっそりとした林。広々した川の洲。ヒューヒューと天の道。黒々とした山の深み。様々な現象により昼夜ができるが、私の心の適うところには春秋がない。俗事も至らず仕官もせず、古い書物を開き、古人を友にする。つとめて心の害を遠ざけ、どうして我が身の病を憂えよう。ああ、道を踏み行うこと正しく、「完璧は望まず」だいたいのところを目標にする。中ぐらいでありながら下位におり、剛つよいがよく屈す。朝に夕に坦々と道を踏み行い、正しい吉を受ける。「そうして」ゆつたりと、いささか年を終え、日を過こそうとしよう。

【参考】

「履軒幽人伝」（『懷徳堂水哉館先哲遺事』所収、同書には「弊帚旧稿二載ス」と言う）

幽人居一樓、南北有牖、南棚葡萄延蔓盈区、翠光撼席、実之離々可頼（フ・ふす）而哺也。故命斯樓曰、龍珠之樓。北牖之外、展枝可踞、施欄可倚、脩竹青々、傍欄而宜上者数十竿矣。扁其上曰履、志其脩也。故自号曰、履軒幽人。性多病不喜出、不邀客、終日兀坐、凶書著作之

外、無復嗜好也。讀書又不能彊力、每未及倦而輟、輒倚梧对此君、隱几眄龍珠、清風時來、簷鐸鏘然、幽人意甚適也。若斯者十年如一日、蓋將以是自終焉者也。其所誦詩曰、

寥寥乎林之丘乎、：

詠史（史を詠ず） 孔安國

\*孔安國は、前漢の儒者。孔子旧宅の壁から発見されたという古文の『尚書』、『論語』を献じたことで有名。

漢家尊礼執唾壺\* 漢家礼を尊び 唾壺を執らしめ  
僕々\*胡遑耻鼎問\* 僕々は胡ぞ鼎問を耻ずるに  
遑あらんや。

祖孫遺業壁中簡 祖孫の遺業 壁中の簡  
寧料大道資詰訓 寧んぞ料らんや  
大道 詰訓を資けんとは。

褒聖\*任他\*万斯年 褒聖 任他さかもあらはあれ 万斯年  
掌上天下不復運 掌上の天下 復びは運らず

【注】○執唾壺：『漢書』孝獻帝紀注が引く『漢官儀』に「武帝時、孔安國為侍中、以其儒者、特聽掌御唾壺、朝廷榮之」と見える。○僕々：煩わしいことという意味

もあるが、ここではしもべ、下々の者の意に解した。

○耻鼎問：「耻下問」という語を踏まえると考えられる。  
『論語』 公冶長篇では「耻下問」（下問を恥じる）目下に尋ねることを恥じる（ことのないことが、「文」の要素として挙げられている（原文「敏而好学、不耻下問、是以謂之文也」）。「問鼎軽重」という語「問鼎軽重」（鼎の軽重を問う）で、天下を窺うことの意があるが、ここでは関係がないと考えた。○褒聖：孔子のこと。後世に贈られた追諡の一つ。○掌上天下：『孟子』公孫丑上篇に、儒教の仁政を行えば、天下を治めることは掌上に運らすようなものだ（簡単だ）と言ったとある（原文『孟子曰、「人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心、斯有不忍人之政矣。以不忍人之心、行不忍人之政、治天下、可運之掌上」』）。

【訳】漢王朝は礼儀を尊んで（孔安国に）儒者に皇帝の痰壺を管理させ、下々の者は（礼儀の習得に忙しく）、どうして儀式の鼎について尋ねることを恥じている暇があるうか？ 祖先の遺業である壁の中の木簡が、大道の訓話の助けになるとは思いも寄らなかった。（だが）孔子の時から万年経って、もはや天下を掌上に運らすことはできない。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

\*有名な「莊子」の胡蝶の夢を題材とした葩関月の画への画賛。

周之未夢兮無蝶  
蝶之方飛兮無周  
蝶果不知周乎\*  
嗟周也既知蝶之喻矣\*

周の未だ夢みざるや蝶無く  
蝶の方に飛ぶや周無し。  
蝶果たして周を知らざるか  
嗟周や既に蝶の喻しみを

周自知其遽々乎\*

周自ら其の遽々たること  
知り。

即蝶之栩栩

即ち蝶の栩栩たるを知れり。

蝶自知其栩栩乎

蝶自ら其の栩栩たること

即周之遽々

即ち周の遽々たるを知れり。

人病不知喻其所喻

人其の喻しむ所を喻しむを

必欲喻人之所喻

知らざるを病み  
必ず人の喻しむ所を喻しまんと

猶周之欲蝶於栩栩

猶お周の蝶の栩栩たるを欲し

而蝶之欲周於遽々

蝶の周の遽々たるを欲するが

ごとし。

【注】○不知周：『莊子』齊物論篇原文に見える。履軒『莊子雕題』は、この部分に「不知周」言蝶不自知其身本

為莊周也」と言う。○喩：楽しみ。これも『莊子』齊物論篇原文に見える語。○遽々：『莊子』齊物論篇原文に見える語。履軒『莊子雕題』は、「遽々」猶朴々、是揚々之反、即与栩々対」と言う。つまり、「栩々」は楽しげな様、「遽々」は気が晴れない様。

【現代語訳】 莊周がまだ夢をみていない時には蝶はいないし、蝶が飛んでいる時には莊周はいない。蝶は果たして莊周を知らないのだろうか。〔でも〕 莊周〔の方〕は蝶の楽しみを知っている。莊周は、自ら自分が鬱々としていることは、「実は」蝶が楽しげなことと同じであることを知っている。蝶は、自らが楽しげなことは、「実は」莊周が鬱々として同じであることを知っている。人が自分が楽しむところを楽しむことを知らないことを思い煩い、人の楽しむところを楽しむものとするのは、莊周が蝶に楽しみを求め、蝶が莊周に鬱々とすることを求めるのと同じだ（適わぬ望み、あるいは求めるべきでない望みだ）。

【参考】 履軒の文集『弊帚統編』にも、胡蝶の夢を題材にした詩が以下の三首に見える。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

周之夢為蝶与。蝶之夢為周与。自千載之後觀之、蝶亦夢也、周亦夢也。栩々之与遽々、奚扞焉。嚮製此図者、亦已夢、今之題言者、独得非夢邪。則後之觀焉者、遞亦皆夢已。嗟乎、人能自知身之夢、而不動於欲、不誑於利与名、逍遙保其性、而全其天、此則善处乎夢者、斯之謂真覚。

履軒幽人夢中、筆於華胥国天楽楼偷語欄之下。

【注】 ○周之夢為蝶与：『莊子』本文にもある。○華胥国天楽楼偷語欄：履軒は自分の居宅、書齋、書齋の欄干をこのように名づけた。華胥国とは、黄帝が夢に遊んだとされる古代の理想国で、『列子』に見える。天楽とは、『莊子』天道篇の「与人和者、謂之人楽。与天和者、謂之天楽（人の和に与る者、之を人楽と謂い、天の和に与る者、之を天楽と謂う）」に因る言葉で、高い境地の楽しみを言う。また、偷語とは、いい加減な言葉。履軒が自分が放言する様を謙遜して言ったもの。『春秋左氏伝』襄公三十一年に、叔孫豹が趙孟の死を予言し「趙孟将死矣。其語偷、不似民主（その言葉がなおよざりでもとも君主のように見えない）」と言ったとあることに基づく。履軒著『弊帚統編』には、「華胥国記」、「天楽楼記」、「偷語

欄戒約」という文章が見える。

【書き下し文】周の夢に蝶と為るか。蝶の夢に周と為るか。千載の後より之を覩れば、蝶亦た夢なり、周亦た夢なり。羽々の遽々と、奚れか扱ばん。嚮に此の図を製する者、亦た已に夢なり、今の題言する者、独り夢に非ざるを得んや。則ち後の焉を覩る者、遞いに亦た皆な夢のみ。嗟乎、人能く自ら身の夢たるを知り、欲に動かず、利と名とに誅れず、逍遙として其の性を保ち、其の天を全うすれば、此れ則ち善く夢に処する者にして、斯れを之れ真覚と謂わん。

履軒幽人夢中に、華胥国天楽楼偷語欄の下に筆す。

【訳】 莊周が夢で蝶になったのか、蝶が夢で莊周になったのか。千年の後から見れば、蝶もまた夢、莊周もまた夢である。楽しげなものがっかりしているのと、どちらも変わりはない。先にこの図を作った人は、すでに夢（幻）と消えていった。今、題辞を書く人も夢（幻）と消えていき、後にこの図を見る人も、夢（幻）と消えていくであろう。ああ、人が自分の身が夢（幻）であることを知り、欲に動かされず、名利の誘惑を受けず、悠然と養生し、その天性を全うできれば、これがすなわち夢によく

対処するする者であり、これを真覚（本当に覚めている者）というのだ。

履軒幽人が夢の中で、華胥国天楽楼偷語欄のもとで記す。

【解説】 莊子よりさらに高みに立ち、すべては夢であるという。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

周之覚之遽々、而羨蝶之夢之栩栩、其亦有味哉。夫転世輪廻、苟信有焉、吾願従事焉。如牛之臥嚼草、鶴之舞于天、夏魚之浮游、秋虫之悲吟、可羨者亦多矣。夫畏転輪者、不知何悲。

【書き下し文】 周の覚むるや遽々たりて、蝶の夢の栩栩たるを羨むは、其れ亦た味有るかな。夫れ転世輪廻、苟も信に焉有れば、吾焉に従事せんことを願う。牛の臥して草を嚼み、鶴の天に舞い、夏魚の浮游し、秋虫の悲吟するが如き、羨むべき者亦た多し。夫れ転輪を畏る者、何を悲しむかを知らず。

【訳】 莊周が覚めている時にはがっかりしていて、蝶が夢で楽しげなことを羨むのは、また味があることだ。本

当に輪廻転生ということがあれば、私はぜひ体験したいものだ。牛が寝転がって草を噛んだり、鶴が天に舞ったり、夏の魚が遊泳したり、秋の虫が鳴いたりなど、羨むべきものは多い。輪廻転生を畏れる者は何を悲しんでいるのか理解できない。

【解説】 仏教では苦しみと見る輪廻を、相対的視点からまたよしとし、動物となるのもよいではないかと言う。

題画蝶（画蝶に題す）

栩栩然、蝶之樂也至矣。豈吾精魂所化耶。抑千載之前、莊周所化、儼然猶存于今耶。醉中夢思朦朧、不能辨是非、且録此、以問於觀者。

【書き下し文】 栩栩然として、蝶の楽しみや至れり。豈に吾が精魂化する所ならんや。抑も千載の前、莊周化する所、儼然として猶お今に存するや。醉中夢思朦朧とし、是非を辨ずる能わざれば、且く此に録し、以て觀者に問う。

【訳】 栩栩として、蝶の楽しみは極まっている。もしや、私の精神が化したものなのであろうか。そもそも千年前

に、莊周が化したところが儼然として今も存在するのだろうか。酔っぱらい夢うつつの状態で、是非の判断ができないので、とりあえずここに記録して、見る人に問いたい。

【解説】 ここでは、蝶の楽しみは私の楽しみか、あるいは莊周の思いが残っているのかと嘯く。先の詩では、現実が夢（幻）であることを強調していた履軒であるが、ここでは、むしろ、時代を超越した精神の永遠性を詠っているかようである。

以上、履軒は「栩栩」「遽々」（うれしい感情と悲しい感情）という言葉も多く取り上げている。「遽々」を「栩栩」と対にし、鬱々たる状態をいうとするのは一般的訓詁ではない（成玄英疏には「驚動之貌」と言う。履軒が雕題を付けている林希逸『莊子膚齋口義』は「僵直之貌」と言う。この注釈ではないが『韻会』には「遽々」は「自得之貌」とある（履軒と全く逆）。それをわざわざ対に解釈し、この一節は幸福感が云々したものにとらえる点に履軒の特徴がある。やや強引だと言えるが、履軒の特徴（世俗的幸不幸から解放されたい？）がよく表れた箇所と言えよう（拙稿「中井履軒の老莊観」の末尾近く「履

軒の思想が表れた部分」の履軒の人生に対する考えを参照されたい。

【参考】画に関する情報

履軒の孫の『並河寒泉遺稿』巻八(丁巳稿(安政四年)一ノ上、第八)二十五葉「安政丁巳仲冬」に「書幽人先生賛莊周画幅匣陰」という文章がある(注)。これによれば、蔀関月(一七四七〜一七九七)の画に履軒が賛を付けたものと言う。題名からすると「題夢蝶図」なのであろう。

(注) 原文「莊生夢蝶図、関月蔀氏画之、幽人先生賛之。賛辞取在先生『弊帚』中、其賛辞蓋是幅而成焉者、可珍襲焉。嘗聞斯幅也、丹丘釀家某氏所藏、今也転為他家之藏、是亦莊生夢蝶妄幻之所以驗也与。噫」。

蔀関月については、高松良幸「蔀関月の画業―懐徳堂との交流を中心に」(『フィロカリア』十一号、大阪大学文学部美学科、一九九四年)が詳しい。同稿では、蔀関月が一七八三年から一七九二年まで懐徳堂に住んだことや、その画に竹山や履軒の賛が多く見られることが紹介されている。ただし、「莊生夢蝶図」については言及さ

れていない。

竹山が賛を着けた蔀関月の画には確認できるものは以下のようである。一つは、「海楼之図」(関西大学所蔵大坂画壇目録「二九頁」の「巋矣城楼、煥矣丹青、滄溟万里、坐我洞庭(竹山居士題)」というもので、『箕陰集(詩集)』巻三(影印本三一頁)に「岳陽楼図賛」として見える。もう一つは、蔀関月筆、中井竹山賛「春花見図」(大阪大学懐徳堂文庫蔵121 042 001、平成十年購入、『懐徳』六七彙報に紹介あり)である。

靚青赤二神相撲図、戯題

(靚青赤二神相撲図を靚、戯れに題す)

\*画賛。どのような画であったかは未詳。博雅の士のご教示を仰ぎたい。

赤者南極之老耶

赤は南極の老か

青者東帝之使乎

青は東帝の使いか

\*争霊功兮不相下

霊功を争いて相い下らず

ト贏兮一場戯

贏うらなちをトウ一場の戯

【校勘】○争…「救済」を見せ消ち。○兮…「争」を見せ消ち。○相下…「決」を見せ消ち。○ト…「輸」を見

せ消ち。○兮…「枉付」(?)を見せ消ち。

【注】○南極之老…七福神の中の寿老人のことを南極老人とも言う。○東帝…未詳。

【訳】赤い方は南極老人(寿老人)であろうか。青い方は東帝?の使いであろうか。靈功を争って相い下らず、雌雄を決せんと一試合交える。

婿語婦(婿婦に語る)二首

\*婿が嫁に語る詩。履軒は、宝暦十三年(一七六三)に革嶋みわを娶っている。この詩は、配列順からすると、それより以前に書かれたものであると思われる。

貯爾無金屋 爾を貯うるに金屋無く

紙窓任爾補 紙窓、爾の補うに任す。

借問鮑宣妻 借問す 鮑宣の妻

有短布裳無 短き布裳有りや無しや、と。

伯姒爾兄弟 伯姒は爾の兄弟にして

阿姑爾阿母 阿姑は爾の阿母なり。

我短向他説 我的短は 他に向かいて説くも

向我莫説他 我に向かいては 他を説く莫かれ。

【注】○鮑宣妻…桓少君。裕福な出身であったが、自ら進んで貧しくして贅沢を好まない夫に従い、賢婦として称えられたと言う。『後漢書』鮑宣妻伝に短い衣裳を着た(「著短布裳」とある。

【現代語訳】お前を住まわせるのに立派な屋敷もなく、障子はお前が繕うに任せる。ちよつとお尋ねする、鮑宣の妻よ、短い衣裳はあるか(貧乏の覚悟はできているか)。義理の姉もお前の実の姉だ、姑はお前の実の母だ。私の短所は彼らに告げてもよいが、彼らの短所は私に告げるな。

小婦釣魚(小婦魚を釣る)

\*釣りに慣れない若い娘が青年に助けを求める様子を詠った詩。

未慣釣魚術 未だ釣魚の術に慣れず

釣餌倩郎理 釣餌は倩郎が理む。

更請釣出時 更に請う、釣り出だす時

為儂卸魚鯢 儂の為に魚鯢を卸せと。

【訳】 まだ釣りには慣れず、エサや釣鉤は若者任せ。その上さらに、釣り上げた時には私のために鰓から針を外してちょうだいとおねだりする。

霜葉

\*霜葉は紅葉のこと。

喚霜染我衣 霜を喚びて我が衣を染め  
呵風戒我駕 風を呵りて我が駕を戒む。  
料知草玄人 料り知る草玄の人の  
奇字待我写 奇字我が写すを待つを。

【注】 ○草玄：漢の楊雄作の『太玄経』の別名。後、世  
事から離れて著述に専念することを言う。○奇字：『漢  
書』芸文志に書体の一つとして見えるが、ここでは、奇  
なる字、あるいは文章と解した。

【訳】 霜を喚んで私の衣を染め、風をしかって私が舞い  
上がるのを押さえる。おそらく、風流人が妙なる文字(文  
章)(紅葉が美しい文をなすことを喩えるか)を私が書  
くの待っているのだろう。

擬唐詩(唐詩に擬す)

\*【解説】を参照されたい。

人言生男好 人は男を生むは好しと言うも  
争知父母情 争でか父母の情を知らんや。  
生女不下堂 女を生めば堂を下されざるも  
生男向辺城 男を生めば辺城に向かう。

【訳】 人は男を生むのがよいと言うが、どうして、父母  
の情を知りえようか。女を生んでも離縁はされないが  
(?)、男を生めば辺疆の城に向かうことになる。

【解説】 息子を生むよりも娘を生む方が良いと詠う唐詩  
に、以下のようなものがある。

・杜甫「兵車行」 「信知生男悪、反是生女好。生女猶得  
嫁比隣、生男埋没随百草。」  
・白居易「長恨歌」 「遂令天下父母心、不重生男重生女。」

周道有松

\*『詩経』風の四言詩で讃岐の良医尾池恭菴の長寿を祝す。竹山『笈

陰集(詩集)』卷二に「寿恭菴医士六表詞二闕」(影印本二九三頁)  
がある。履軒の詩も同じ時(竹山は吉野行(宝暦十三年(一七



六三二の頃）に書かれたもので、恭菴の還暦を祝う詩なのであろう。讀岐は、懷徳堂初代学主の三宅石庵が四年滞在したこともあり、懷徳堂と繋がりがあつた。

周道有松、寿尾池恭菴也。恭菴、讀之良医、邦人仰之如神。故詩人賦此、使讀人歌以送觴。

「周道有松」は、尾池恭菴を寿ことほくなり。恭菴、讀の良医にして、邦人之を仰ぐこと神の如し。故に詩人此を賦し、讀人をして歌いて以て觴さかづきを送らしむ。

周道有松 周道 松有り

其陰翳々 其の陰 翳々。

君子寿考\* 君子 寿考し

靡勸我思 我が思つかいを勸なる靡かれ。

周道有松 周道 松有り

翳々其陰 翳々たり 其の陰。

君子豈楽 君子 豈がらく楽し

実慰我心 実まことに我が心を慰む。

周道有松 周道 松有り

可以留連 以て留連すべし。  
彼其之子 彼れ其の子  
邦之司命 邦の司命。

我有父母 我に父母有り  
我有稻梁 我に稻梁有り。

君子之光 君子の光  
俾我能養 我をして能く養わしむ。

我有子兮 我子有り

我有孫兮 我孫有り。

君子有祉 君子さいわい祉有り  
庶幾靡患 患ない靡ちかきに庶幾し。

父母生我 父母 我を生み

誰俾我寿 誰か我をしていのちながく寿からしむ。

欲報之德 之が徳に報いんと欲して

我心悠々 我心悠々たり。

春酒在瓶 春の酒は瓶に在り

嘉肴在俎 嘉まじき肴は俎またに在り。

酌言献之 酌まみて之を献じ

酌言献之 酌まみて之を献じ

以永厥祜

以て厥その祜さいわいを永くす。

春酒盈瓶

春の酒は瓶みに盈みち

穠花盈庭

穠しげれる花は庭みに盈みつ。

且歌且舞

且つ歌い且つ舞う

君子之堂

君子の堂。

黄髮台背\*

黄髮台背を

母謂一家之慶

一家の慶びと謂う母かれ。

祈爾永年

爾が永年を祈るは

維百里之寿星

維だ百里の寿星なればなり。

周道有松、九章章四句

【注】○周道…『詩経』「小雅」「四牡」などに見える。大

きな路の意。○寿考…長生きの意。『詩経』「大雅」「行葦」

に見える。○酌言…言は助字。酌言は、『詩経』「小雅」「瓠

葉」に見える。○台背…しみ肌。『詩経』「大雅」「行葦」

に見える。○百里…方百里の地。転じて一県の地。

【訳】

大きな路に松があり、その陰は深々としています。君子

が長生きなされ、私は安心していられます。

大きな路に松があり、深々としています、その陰は。君子が  
お楽しみあそばされ、私の心は慰められます。

大きな路に松があり、引き留められます。あなた、その人は、  
国の重要な救い主です。

私に父母がおり、食べ物もあります。君子のお光により、私は  
養生することができます。

私に子があり、孫がおります。「これも」君子のお恵みのお陰で、  
ほとんど思いがありません。

父母は私を生み、誰が私を長生きさせるのでしょうか。この  
ご恩に報いようとして、私の心は思い悩みます。

春の酒は瓶みにあり、おいしい肴まなごは俎なだの上たにあります。ここに  
これらを献上して、その幸せが長く続くようにしたいと思  
います。

春の酒は瓶みに満ち、咲き誇る花は庭にに溢あふれています。歌  
いかつ踊ります、君子の屋敷で。

長寿を全うされていることを一家の慶びと言わないでくだ  
さい。あなたの長寿を祈るのは、国全体の長寿星だから  
なのです。

幽情賦

\*これも履軒が自らの生き方を宣言した詩として重要。なお、「幽

「情」という語は、班固『西都賦』に見える。

履軒幽人独坐読書。思方濃、有客来勸其仕。幽人仰而笑、俯弗答。客弗憚、援古談今、問難旁午。幽人竟不有所答焉。援笔作幽情賦、以寓意。客受読焉、怡然若有領意、盛諸懷而去。其辞曰、

履軒幽人独り坐し読書す。思い方に濃たまはにして、客有り来たりて其の仕うるを勸む。幽人仰ぎて笑い、俯して答えず。客憚おそはず、古を援き今を談じ、問難すること旁午ぼうごたり。幽人竟に答うる所有らず。笔ふでを援きて幽情の賦を作り、以て意を寓す。客受けて読よみ、怡然として意を領する所有るが若く、諸これを懷に盛りて去る。其の辞に曰く、

春日遲遲\*  
鳥鳴啾啾  
春去在昨  
忽諸又来  
四序之循環兮  
紛繆繆其如馳  
感我生之易邁  
思昔人兮流涕

春日 遅遅ちぢたり  
鳥 鳴くこと 啾啾しゅうしゅうたり。  
春 去ること 昨に在り  
忽ち諸これ又来たる  
四序の循環するや  
紛繆ぶんみゆう々として其れ馳せるが如し。  
我が生の邁すすぎ易きに感じ  
昔の人を思ひて涙を流す。

噉噉、皇考之愛我\*  
誨我兮自夫未有知

言則以愈  
食則以右  
維方韶亂\*  
載就師氏\*

容止は修  
組紉麻枲\*  
習劉向之伝\*  
誦班氏之誠\*  
素心洵其為矢  
指古人兮自期  
胡我之不揚兮

乏玉容与壞姿  
幸無贅瘤\*懸於頤  
庶幾修飾以潔思  
愧夫粉墨也乱真  
羞於妖妍之嫵媚  
服彫雜兮不衷  
鑑於詩人之刺

噉あ、皇考の我を愛するや  
我を誨おしうるに夫の未だ知有らざる  
よりす。

言は則ち以て愈なほし  
食は則ち以て右にす。  
維これ韶しやう亂らんするに方あたり  
載すなわち師氏ししに就く(就かしむ?)。  
容止は是れ修め  
組じゆを組み麻まし枲しと  
劉向の伝を習い  
班氏の誠めを誦す。  
素心まこと洵まことに其れ矢やいちかきを為し  
古人を指して自ら期す。  
胡なぞ我の揚がらず  
玉容と壞姿とに乏しきや。  
幸いに贅瘤しゆいの頤いに懸かる無く  
修飾しゆしし以て思おもひを潔きよくせんことを  
庶こゝろ幾ねがう。

夫かの粉墨の真を乱すを愧じ  
妖妍の嫵媚ぶいめいの彫ぼう雜さを服して  
衷あつならざるを羞す。  
詩人の刺いめに鑑かみ

介然而自守  
維以与世違

介然として自ら守り  
維れ以て世と違う。

春日遲遲

春日 遲遅たり

鳥鳴啾啾

鳥鳴くこと 啾啾たり。

含哺而反

哺を含んで反り

将雛而飛

将に雛たりて飛ばんとす。

草木綺其榮茂

草木 綺として其れ榮茂し

發芬芳乎清墀

芬芳を清墀に發す。

万物得其情

万物 其の情を得

欣々其相嬉

欣々として 其れ相い嬉ぶ。

維我之独矣

維れ 我之れ独りなり

誰与而展懷

誰と与に懷いを展べん。

当冷風而奏梳（疏？）

冷風に当たりて 奏梳（疏？）し

髮鬢々兮長垂

髮鬢々として長く垂る。

臨清漣而顧面

清漣に臨みて 面を顧い

素顔映而相視

素顔 映じて 相い視る。

曳朱裾而襲素衣

朱裾を曳きて 素衣を襲

佩芳蕙兮簪花枝

芳蕙を佩びて 花枝を簪とす。

賦窈窕兮托興

窈窕を賦し 興を托し

撫錦瑟以写思

錦瑟を撫して 以て思いを写す。

景翳々漸以傾

景翳々として 漸く以て傾き

鳥声喧而掃棲

鳥声喧しくして棲に掃る。

思断続而弗接

思い断続して接らず

魂迷朦其如疲

魂迷朦して其れ疲るるが如し。

天黯淡而弗辨

天 黯淡として辨ぜず

心鬱陶其傷悲

心 鬱陶して 其れ傷悲す。

就角枕而憩息

角枕に就きて 憩息すれども

耿耿兮不成寐

耿耿として 寐りを成さず。

推衾而起以坐

衾を推して 起きて以て坐し

聊整衣而塞帷

聊か衣を整えて 帷を塞げれば

月娟々懸乎樹端

月娟々として 樹端に懸かる。

帶唐棣之瑤枝

唐棣の瑤枝を帯び

光璨々入我懷

光璨々として 我が懷に入り

氣凄々徹乎肌

氣凄々として 肌に徹す。

歎貞操之無儔

貞操の儔無きを歎き

悼歲月之徒逝

歲月の徒らに逝くを悼む。

嗟夫、世之味味兮

嗟夫、世の味味たるや。

淫辟日以熾

淫辟 日々以て熾んに

嘉治容之虚飾

治容の虚飾を嘉みす。

棄中情之貞思

中情の貞思を棄て

汨蕩々乎無所戻止

汨蕩々として 戻止する所無し。

夫天倫之炳如

夫れ 天倫の炳如たる

我胡為乎廢之

我 胡ぞ之を廢するを為さん。

輝章甫於越郷

烏知我之匪戻

毀玉而為瓦

心寧忍為之

噫、伯鸞ちやう弗再矣

欽徳輝于千載

維我其無所遇矣

寧幽独兮守素志

章甫を越郷に輝かせれば

烏いずくぞ我の戻らざるを知らん。

玉を毀ちて瓦と為すは

心寧なやぞ之を為すに忍びん。

噫あゝ、伯鸞ちやう再びして

欽徳千載に輝かず。

維たた我其れ遇う所無し

寧むじろ幽独して素志を守らん。

【校勘】○愛我：「愛乎我」の「乎」を墨筆で消す。北山写本では残している。○就師氏：「就」は墨筆で消しているが残した。

【注】○旁午：入り交じること。○春日遲遲：『詩経』「邠風」七月、『詩経』小雅「出車」に見える。

○韶亂：齒が生え替わること。『顔氏家訓』「序致」に「昔在韶亂、便蒙誨誘」とある。○組紉麻桌：組紉はひも。麻桌は麻。これらを作れることが女子のたしなみとして

『礼記』「内則」（家庭での礼を述べる）に見える。（「女子十年不出。姆：執麻桌、治絲繭、織経、組紉。」）

○劉向之伝：前漢の学者劉向作の『列女伝』のことである。○班氏之誠：『漢書』の編纂で有名な班固の妹の

班昭（曹大家）が女子教育のために著した『女誡』七篇を言うのである。○贅瘤：名譽や位のこと。嵇康「答難養生論」に「蓋將以名位為贅瘤…」とある。○興：物に託して表現する法。古来『詩経』について「風・雅・頌、比・賦・興」の六義があると言われている。○中情：『楚辞』に多く見える。○伯鸞：後漢の梁鴻の字。梁鴻は人に頼らず行いを全うした人。履軒が雕題をつけている『世説新語補』「德行上」に見える。なお、『履軒古風』卷三「祭亡妻」では「十載伯鸞妻」と自分を伯鸞に喩えている。

【訳】履軒幽人が独り座り読書し思考が深まっていたその時、客が来て仕官を勧めた。幽人は顔を上げて笑いうつむいて答えなかった。客は気分を損ね、昔を例に今を談じて質問責めにした。幽人は終始（とうとう）答えず、筆を引き幽情の賦を作って思いを託した。客は受けてこれを読み、なるほどと思いを悟ったようで、これを懐にしまつて帰つていった。その言葉は次のようであった。

春の日はうらうら、鳥はちゅちゅと鳴く。

春が去つたのは昨日なのに、たちまちまた来る。

四時が循環するのはごうごうと駆けるかのようだ。

我が人生の過ぎやすいのを感じ、昔の人を思つて涙を流す。

ああ、亡き父は私を慈しんでくださった。私が物心つかないうちから教育し、言葉を直し、箸を右手に持たせてくださった。

齒の生え替わる頃には、教師をつけ、容儀を修めさせてくださった。

紐の編み方や麻の取り方を習い、劉向の『列女伝』を習い、班氏の『女誡』を暗誦した。

先人を目標にしようと、心から誓いを立てた。

〔それなのに〕なんと私の不甲斐ないことか。

見目麗しくもなく、ただ余計な瘤がぶら下がっていいことを幸いに、行いを慎み、思想を清くすることを願う。

女性の化粧に惑わされることを羞じ、美人の媚びが純粹でなく心正しくない(下心に満ちている)のを羞じる。

詩人の諫めに鑑みて、堅く自ら守り、そのため世の中と合わない。

春の日はうらうら、鳥はちちつと鳴く。

餌を含んで帰り、雛が飛び立とうとする。

草木は美しく茂り、清い庭に芳香を放つ。

万物はその情に適い、にこにここと喜び合う。

ただ私だけがひとりぼっちで、誰に思いを述べることができようか。

冷たい風に当たり思いを述べ(髪をとかす?)、髪は乱れ長く垂れる。

清い漣に臨み顔を洗えば、素顔が映って、見つめあう。

朱色の裾を白い衣に重ね、香草を身に纏い、花の枝を簪にする。

美しきを賦し、感興を託し、錦の琴を奏でて思いを表す。

影は黒々と次第に傾き、鳥は喧しく鳴いて巣に帰る。

思いは切れ切れでつながらず、魂は混迷して疲れたようだ。

天は暗澹としてよく見えず、心は鬱屈して痛み悲しむ。

角枕について休もうとするが、意識がはつきりして寝られない。

布団を推して起きて座わり、いささか衣服を整えて帳を上げれば、

月は清らかに梢に懸かり、唐棣(\*履軒著『画簾』えくけん)によれば「はねず」が玉のような枝を帯びている。

光が燦々と私の懐に入り、空気は凜として肌突き通る。

貞操を守る同志がいらないのを嘆き、歳月が無駄に過ぎていくのを悼む。

ああ、世の中の暗いことよ。

よこしまが日々盛んになり、なまめかしい姿の虚飾をよしとする。

衷情の正しい志を棄て、ゆらゆらさまよい 戻ることが

ない。

そもそも天の道の明らかなるものを、私はどうして廃す  
ことができよう。

儒冠を異郷に輝かせれば（他の地方に仕官すれば）、ど  
うして私が戻らないことを知ろう（必ず戻る）。

玉を壊して瓦とすることは、どうしてなすに忍びよう。

ああ、「独り徳行を全うした」伯鸞が再び現れ、徳を千  
載に輝かすことはない。

私は世の中と合わない。

むしろ独り静かに清き志を守るとしよう。

### 有感（感有り）

\*これも自らの思いを述べた詩。

読書破万卷

読書一万卷を破るも

身上無一成

身上一つも成る無くんば、

雖多其何益

多しと雖も其れ何の益あらん

均不知一丁

一丁を知らざるに均し。

傲然誇俗士

傲然として俗士に誇り

臯比坐揚揚

臯比に坐すること揚揚たり、

是謂為他人

是れを他人の為に

裁縫嫁衣裳\*

嫁の衣裳を裁縫すると謂う。

窃痛此風長

窃かに此の風長ずるを痛み

惕然以自警

惕然として以て自ら警む。

言之若甚易

之を言うは甚だ易きが若きも

踐之实匪輕

之を踐むは実に軽からず。

眇眇我所服

眇眇たり我が服す所

日夕勞經營

日夕 經營を勞す。

短褐雖不温

短褐 温かからずと雖も

庶幾以自養

以て自ら養うを庶幾う。

【注】○臯比：虎の皮。転じて、講義の席。○為他人裁

縫嫁衣裳：他人のために働くこと（秦韜玉「貧女」詩）。

また、『論語』憲問篇に「古之学者为己、今之学者為人」

とあるのを参照。○短褐：貧しい人の喩え。ここでは徳

を言うか。

【訳】万卷の書を読破しても、何も身に付いていなければ、

多いと言っても何の益があるろう。一字も知らないのと同

じだ。傲慢に一般人に誇り、得意げに講義の席に着く。

こういうのを「他人のために嫁入り衣裳を作る」という

のだ。「私は」密かにこの風潮が蔓延するのを痛み、慎

んで自らを諫めている。これを言うのは簡単なようだが、

実践するのは実に難しい。私が実行できるのはわずかな

ことだが、朝に夕に努力する。短い衣は温かくはないが、自分を養えればいい(養うことを希望する)。

城南墳

\*明和元年(一七六四)、履軒が師の五井蘭洲の墓参りをした際の作。自らの不甲斐なさを嘆く。五井蘭洲は宝暦十二年(一七六二)亡くなり、現大阪市天王寺区にある実相寺に葬られた。

甲申之歳

甲申の歳

季春之望

季春の望、

愴我夙歎

我が夙歎を愴き

歩言南行

歩みて言に南行す。

経閭閻之喧闐兮

閭閻の喧闐たるを経

臨郊野之蒼茫

郊野の蒼茫たるに臨む。

晨景慘而小雨

晨景 慘として小雨ふり

霑我之衣裳

我の衣裳を霑す。

飛花寂兮鳥音

飛花 鳥音に寂として

雜彼兮鐘磬

彼を鐘磬に雜せる。？みだす？

蕭寺綿相連

蕭寺 綿として相い連なり

墳塋累稠々

墳塋 累稠々たり。

惟人生之須臾兮

人生の須臾なるを惟うも

曾弗違乎回頭

曾て頭を回らずに違あらず。

顧瞻連甍之轟々兮

顧みて連甍の轟々たるを瞻る。

死生昼夜而相求

死生は昼夜なるも相い求め

素旆相逐

素旆相い逐い

如之或馭

之く或いは馭けるが如し

独行易感

独行して感じ易く

神愴踟躕

神愴みて踟躕す。

肆上実相之丘兮

肆に実相の丘に上り

展苔墳而洒掃

苔墳に展りて洒掃す。

維先師之幽室兮

維れ先師の幽室なり。

懷音容而灑涕

音容を懷いて涕を灑ぐ。

歎日月之遄逝兮

日月の遄かに逝くを歎くに

再期之忌歎將至

再期の忌 歎ち將に至らんとす。

夫箕裘之莫繼兮

夫れ箕裘の継ぐ莫く

誰其頌德而紀事

誰か其の徳を頌え事を紀さん。

弟子故旧兮

弟子故旧

揮淚以相規

涙を揮いて以て相い規る。

謂我兄弟兮

謂く我が兄弟

久学且芸

久しく学び且つ芸あるを。

兄也撰辞\*

兄や辞を撰し

弟也制字

弟や字を制す。

爰咨爰謀

爰に咨り爰に謀り

遂濟其志

遂に其の志を濟ぐ。



買石命工  
 是董<sup>\*</sup>是視  
 碑成孔懿  
 適今之時  
 載建栽植  
 載土載築  
 環之以棘  
 有暉花樹  
 以照其域  
 其人如玉  
 整衣拜跪  
 傾衷情以懇思  
 噫、民之生于三兮  
 我独隠淪於草野  
 遭疾之未瘥兮  
 復遭師之徂  
 心旃旒而弗繫兮  
 胡我生之多岨  
 惆悵以思念兮  
 伊遺音之誘我  
 矢心其循止  
 豈謂報徳乎

石を置いて工に命じ  
 是れ董<sup>はか</sup>り是れ視<sup>はか</sup>  
 碑成り孔<sup>はな</sup>だ懿<sup>よ</sup>。  
 今の時に適<sup>あ</sup>たり  
 載<sup>すなわ</sup>ち建て載<sup>た</sup>ち植<sup>て</sup>  
 載<sup>すなわ</sup>ち土し載<sup>た</sup>ち築<sup>く</sup>。  
 之を環<sup>か</sup>らすに棘を以てし  
 暉<sup>ちか</sup>かの樹有り  
 以て其の域を照らす。  
 其の人玉の如し。  
 衣を整え拜跪し  
 衷情を傾け以て思いを懇<sup>うた</sup>う。  
 噫、民の三に生まるるや  
 我れ独り草野に隠淪し  
 疾<sup>やま</sup>の未だ瘥<sup>い</sup>えざるに遭<sup>あ</sup>ひ  
 復た師の徂<sup>ゆ</sup>くに遭<sup>あ</sup>ひ  
 心旃<sup>は</sup>旒<sup>は</sup>として繫<sup>ひ</sup>がれず。  
 胡<sup>な</sup>ぞ我が生の岨<sup>せ</sup>多きや。  
 惆悵<sup>ちゆうたう</sup>して以て思念<sup>し</sup>す。  
 伊<sup>い</sup>れ遺音<sup>い</sup>の我を誘<sup>い</sup>ひ  
 心<sup>こ</sup>に其の循<sup>じゆん</sup>止<sup>し</sup>するを矢<sup>や</sup>う。  
 豈<sup>あ</sup>に徳に報<sup>ほう</sup>いると謂<sup>い</sup>わんや。

心愼無為  
 此之長歌  
 心愼<sup>いきてお</sup>れども為<sup>な</sup>す無<sup>な</sup>く  
 此<sup>こ</sup>に之<sup>これ</sup>れ長歌<sup>ちやうか</sup>す。

【校勘】○董：北山写本は「薰」に誤る。

【注】○兄也撰辞：『大阪訪碑録』（浪速叢書一〇）（浪速叢書刊行会、一九二九年）に実相寺の五井蘭洲の墓碑文がある。末尾に、「中井積善撰 弟積徳書並篆額」とある。また、『寛陰集（文集）』卷三（影印本四八頁）に「祭蘭洲五井先生文」（宝曆十二年（一七六二）、竹山三十三歳）がある。また、同卷（影印本五五頁）に「蘭洲先生墓表」（宝曆十三年（一七六三）五月）も題のみ記されている。

【訳】甲申の歳（明和元年（一七六四））、三月十五日、私のかねての嘆きのため息をつき、徒歩で南に向かった。喧しい町中を過ぎ、青々と広がる郊外の野に臨んだ。朝の景色は寂しげで小雨が降り、私の衣を濡らす。鳥の声の中、花びらが静かに散り、鐘の音が聞こえる（割って入る？）。寺院が連綿と続き、墳墓が重なり合う。人生が短いことは知っていたが、これまで振り返る余裕がなかった。連なる薨が高く聳えるのを見る。死生は昼夜のようにはかないのに追い求め、旗を奪い合い（権力闘争

五井蘭州墓



し）、奔走するようだ。独り行けば感じやすく、気持ちがふさいで行きなすむ。ようやく実相寺の丘に上り、苔むす墓に参り掃除する。これが先師の幽室だ。お声とお姿を思い出して涙を流す。時間が速やかに過ぎるのを嘆くうちに、三回忌がもうすぐ来る。先師の学を継ぐ者ではなく、誰がその徳を頌え事跡を記そう。弟子と旧友は、涙を拭って相談した。「結果」我が兄弟は、久しく学問しかつ文才があるとのことで、兄が文辞を撰し、弟が文字を書いた。よくよく考え、遂に念願を遂げた。墓石を買って石工に命じ、よくよく相談し、墓碑はけっこうに



五井蘭州の墓のある実相寺の門（上本町）（二〇〇八年四月一九日 著者撮影）

仕上がった。この時、墓標を建てて、土を固め、築き上げた。その周りに棘をめぐらせ、麗しい花の木を植えて、あたりを照らした。かの人は玉のようなお方だった。衣服を正して拝礼し、衷情を傾けて我が思いを訴える。ああ、民が三界（迷い多きこの世）に生まれるや、私独りが在野に埋没し（隠れ）、病気も癒えず、さらに師の逝去に遭遇し、心が揺れ動き落ち着かない。どうして私の人生には障害が多いのだろう。悲しみ嘆き思い悩む。師の声が私を導き、心に遵守することを誓う。「だが」どうしてその徳に報いると言えようか。腹立ちを感じながらどうすることもできず、ここにこの長歌を賦した。

錦雉賦

\*錦雉は、おそらくはキンケイ（口絵2参照）。博物学史上の資料としても重要。特に、履軒の描写は注目に値する。

夫羽族之多類、固紛綸難窮譬\*。或因德賞、或以才媚、或懷臭味而登俎、或籍文章兮飾君子之儀、簡冊所記、拳不可備。

我觀錦雉之狀、実雉而錦文、朱身輝兮孔陽、翠翰翮其琅玕\*、金線環頸而婆娑\*、頂糸彪其如弁。是其概而可言者。若夫五采相繆\*、鬱郁縹以續紛\*、糾錯如綺、比連如淪、如

画如刻、如貝如鱗、則目不可究察焉、矧口可得談哉。洵羽族之鍾美、豈孔翠之足論。我独傷其離故土而飄零也、撫籠而唁之、因称曰、

夫羽族の類の多きは、固より紛綸として窮譬し難し。或いは徳に因りて賞され、或いは才を以て媚び、或いは臭味を懷きて俎に登り、或いは文章を籍りて君子の儀を飾り、簡冊記する所、挙げて備うべからず。

我錦雉の状を觀るに、実に雉にして錦の文、朱身輝きて孔だ陽らかに、翠翰翮として其れ琅玕たり、金線頸を環りて婆娑たり、頂糸彪として其れ如弁の如し。是れ其の概ねにして言うべき者なり。若し夫の五采相い繆り、鬱郁として縹として以て續紛たり、糾錯すること綺の如く、比連すること淪の如く、画の如く刻するが如く、貝の如く鱗の如きは、則ち目究察すべからず、矧や口談ずるを得べけんや。洵に羽族の鍾美にして、豈に孔・翠の論するに足らんや。我独り其の故土を離れて飄零するを傷み、籠を撫して之を唁み、因りて称して曰く、

嗟爾遐産於海表之國、嗟爾遐く海表の國に産し、娟妙姿兮自累重、娟なる妙姿を自ら累重し、凌波濤兮万里、波濤を万里に凌え

淹萍跡于茲邦

祈愛顧乎通人

寄微命於樊籠

木葉飄兮秋風

氣凜々兮寒空

望家山兮引領

雲千重兮万重

恋旧林兮抗音

誰其察爾之恫

楚囚之悲兮

胡爾無辜而遭斯憫凶

於是雉方步玉趾寢金弁

搖瑤鬢而啄黃粒

聽斯言也

載勃々而業々

鼓翼而徐進

復顧而却立

若欲語而不能

似將辨而弗及

萍跡を茲の邦に淹む。

愛顧を通人に祈り

微命を樊籠に寄せ

木葉 秋風に飄い

気 寒空に凜々たり。

家山を望みて領を引くも

雲は千重に万重たり。

旧林を恋い音を抗くするも

誰か其れ爾の恫みを察せんや。

楚囚の悲しみなり。

胡んぞ 爾 辜無くして斯の 憫凶に遭う。

是に於いて雉 方に玉趾を歩み

金弁を寢て

瑤鬢を揺らして黄粒を啄むに

斯の言を聴くや

載ち勃々として業々とし

翼を鼓して徐るに進み

復顧し却立し

語らんと欲して能わざるが若く

將に辨ぜんとして及ばざるに

似たり。

噫我知之

吾過矣吾過矣

今夫貴遊之門

素封之家

宝遠物而胥傲

尚異物而相誇

畜錦雉者

豈趨十百數

胡海外之貢

若斯之繁且多

故踰海之禽

於今為曾為祖

而今之所有

咸卵翼於樊籠之中者

條桷為山兮

竹欄為林

板屋為蒼穹兮

頃歩之地為平原

一勺盤水兮

為澗谷源泉

曾無家山兮可望

噫我之を知れり。

吾過れり 吾過れり。

今夫の貴遊の門

素封の家

遠物を宝として胥い傲い

異物を尚びて相い誇り

錦雉を畜うる者

豈に趨だに十百數ならんや。

胡んぞ海外の貢ぎ

斯くの若く繁く且つ多きや。

故に海を踰ゆるの禽

今において曾と為り祖と為り

今の有る所

咸な樊籠の中に卵翼する

條桷を山と為し

竹欄を林と為し

板屋を蒼穹とし

頃歩の地を平原と為し

一勺の盤水を

澗谷の源泉と為し

曾て家山の望むべき無く

又無旧林兮可恠  
宜也乎怪於吾斯言矣

又た旧林の恠<sup>おそ</sup>べき無し。  
宜<sup>む</sup>なるかな 吾<sup>ご</sup>が斯<sup>こ</sup>の言<sup>ご</sup>を

嗟爾之為生

嗟<sup>あは</sup>爾<sup>なんじ</sup>の生<sup>な</sup>たるや

怪しむは。

肉臭腥兮不可食也  
声啾啾兮不可聽也

肉 臭腥にして食らうべからず  
声 啾啾として聴くべからず。

既無德可稱兮

既に徳の稱すべき無く

又無聰慧之性

又た聰慧の性無く

徒以采色兮媚媮於人  
而不足以飾儀表兮壯觀望

徒らに采色を以て人に媚媮し  
儀表を飾るを以て

独拘囚於狎狴兮

獨り狎狴に拘囚さるるも

載揚々以為性所然

載ち揚々として

觀望を壯んにするに足らず

弗悟野禽肥乎得意

野禽の意を得て肥ゆるを悟らず

翻慍怒乎仁人之言

翻りて仁人の言に慍怒す。

信可哀而憫

信に哀れみ憫れむべし。

雖然爾微物也已

然りと雖も爾微物なるのみ。

我又安知無人而類斯禽焉哉

我 又た 安んぞ

人にして斯の禽に類する無きを知らんや。

【校勘】○噫……「嘻」を消す。○兮……手稿本では、「兮」

を「可」に直しているようだが、諸本により「兮」が適当であると判断した。

【注】○紛綸……多くて乱れること。○窮譬……譬は説明するの意。○翠翰……翰は羽の意。○琅玕……美しい様。

○娑娑……舞う、ゆったりする。○繆……合わさる。交わる。

○鬱郁……綾が盛ん。○續紛……乱れる様。○糾錯……もつれる。○勃々、業々……ともに盛んな様、動く様。○卵翼……はぐくみ育てる。○啾啾……鶏などの鳴き声の擬態。

○狎狴……牢獄。

【訳】そもそも鳥類の種類の多さは、もとより様々であったが、品が良いことをもって称されるものもあれば、人に媚びる才能のあるものもあり、独特の香りにより食に供されるものもあり、きれいな文様で飾りに使われるものもあり、書物に記載されるものは、枚挙に暇がない。

私が金鶏の様子を見ると、まことに雉であり、錦の文様があり、朱色の体は明るく輝き、翡翠色の羽（\*翡翠色は青緑だが、実際のキンケイの羽は主に青色）美しく翻り、金色の線が首を巡って舞い、頭上の羽が豊かです。さかのようだ。表現できる概略は以上のものである。五

五

色が混じり合い、様々に綾を織りなし、さざ波のように連なり、絵のようでもあり彫刻のようでもあり、螺鈿のようでもあり鱗のようでもあるのは、目で窮めることもできないし、まして口で表現することもできない。まことに鳥類の美の粹であり、孔雀や翡翠も論ずるに足るまい。私は、ひとり、その故郷を離れて落ちぶれたのを傷み、籠を撫でてこれを慰めて言った。

ああ、お前は遠く海外に生まれ、艶やかなる姿を思いとし（う）、万里に波濤を越えて、この国に漂うことになった。風流人（趣味人）に可愛がられることを祈り、はかない命を籠に寄せ、木の葉は秋風に漂い、空気は寒空に凛々とする。故郷の山を望んで首を伸ばしても、雲は幾重にも重なる。故郷の林を想い声を上げて、誰がお前の傷みを察しようか。他国に囚われた者の悲哀である。どうしてお前は罪なくしてこのような憂き目に遭うことになったのか。

この時、金鶏はちようどそのおみ足を歩ませ金色のときさを逆立て、玉のようなくちばしを動かして雑穀を啄んでいたが、私の言葉を聞くと、さかんに動いて、翼をばたつかせておもむろに進み出、振り返り退いて立ち（私を何回も見て姿勢を正して立ち？）、何かを言おうとしようと言えない様子であった。



キンケイ

ああ、私にはわかった。私の間違いであった。今、あのお金持ちの方々は、遠くの物を宝として、珍しい物を尊んで競いあっており、金鶏を飼う人も少なくはない。どうして海外からの貢ぎ物がこのように頻繁で多いのであろうか。そこで、海を越えて来る鳥は、それが祖先となり、今いる鳥は、すべて籠の中で生まれ育ったもので、止まり木を山だと思ひ、竹柵を林だと思ひ、板葺きの家を大空だと思ひ、わずかばかりの土地を平原だと思ひ、一掬いの鉢の水を谷の泉と思ひ、望むべき故郷の山もかつてなく、また懐かしむべき故郷の林もない。どうりで私の言葉を怪しんだはずだ。ああ、お前の生態は、肉は臭くて食えず、声はギャーギャーと聞くに堪えず、称えるべき徳もなく、聡明な性質もなく、いたずらに美しい容姿をもって人に媚び、「かと言って」儀式の飾りとしてその雰囲気厳かにすることもできず、ひとり牢獄に閉じこめられながら、意気揚々とこのようなものだと思ひ、野生の鳥が意を得て健康に過(こ)しているのを知らず、かえって思いやりある人(\*履軒自身のことを言うのであろう)の言に憤慨する。まことに憐れむべきことだ。だが、お前は畜生に過ぎない「だから許そう」。人でこの鳥のような者がいないと誰が知ろうか。

**【参考】** 江戸時代におけるキンケイ

磯野直秀『日本博物誌年表』(平凡社、二〇〇二)によれば、江戸時代にはキンケイが頻繁にもたらされ、飼育されたり、見せ物になったりしていた。同書により、キンケイに関わる主な記述を整理してみると、以下のようになる。

キンケイは、早くに、慶長一五年(一六一〇)に献上記録が見え、水戸光圀が飼っていたという記録もある(元禄一三年(一七〇〇))。宝永二年(一七〇六)には玩弄のための鳥の飼育が禁じられたが、唐鳥は輸入され続け、宝永三年(一七〇七)にもキンケイがもたらされたとの記録がある。享保二年(一七一七)には四条河原でクジャクやキンケイが見せ物になっていた。そして、宝暦八年(二七五八)夏には、大坂の道頓堀で珍鳥の見せ物が開かれ、ここでもキンケイは見られた(『摂陽奇観』)。これは、もとは高槻藩主永井直行侯の愛鳥であった。安永二年(一七七三)、城西山人巨川著『唐鳥秘伝百千鳥』にはキンケイの飼育に成功していた記述がある。寛政一二年(一八〇〇)には江戸浅草・両国、大坂下寺町、名古屋末広町などに、人寄せに珍鳥を飼う孔雀茶屋ができ、ここでもキンケイは見られた(大田南畝は享和一年(一八〇一)、大坂の孔雀茶屋でキンケイを見ている)。

なお、孔雀茶屋の様子は、『撰津名所図会』巻二にある(下図参照)。そこには以下のように書かれている。

「孔雀は、孔子の家禽とし、文恵太子は羽毛を織て裘とし、交趾の人は翠毛を取って扇とす。ここには孔雀の錦毛の美なるを出し其外諸鳥を飼て茶店の賑ひとなす事これを俗にまねきといふ」

その他、井原西鶴『好色五人女』(一六八六)巻五「もろきは命の鳥さし」に見える(「その奥に庭籠ありて、はつがん、唐鳩、金鶏、さまざまの声なして:」。また、『百千鳥』『飼鳥必用』には飼い方が紹介されている(『古事類苑』による)。

また、『国立国会図書館月報』二〇〇八、四(No.565)表紙に、『梅園禽譜』(天保一〇年(一八三九)序)の美しいキンケイ図が見える(「驚雉」と題されている)。

なお、履軒の時代、大坂船場の八百屋町筋には鳥を扱う商人が多く、鳥屋町筋とも呼ばれたと言う(秋里籬島著、竹原春朝画『撰津名所図会』(寛政八年(一七九六)、十年(一七九八))(七八頁図参照)。そこには以下のように書かれている。



孔雀茶屋の様子 (『撰津名所図会』巻二)

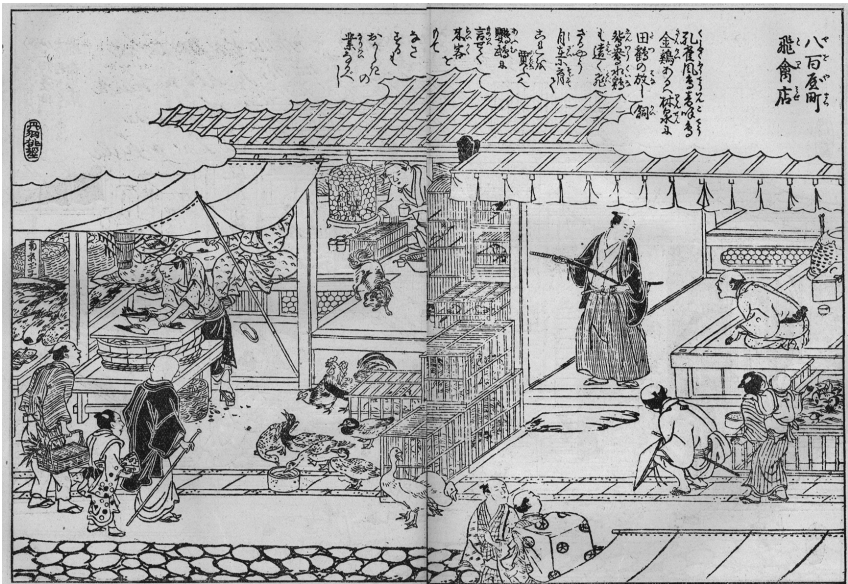


「孔雀、風鳥、音呼鳥、金鶏、あるは林泉に田鶴の放し飼、鴛鴦、水鶏も遠く飛ざるやう自在に育て、これを買ふなり。鸚鵡に言せて来客をもてなさするもおかしきの業なるべし」(巻四「八百屋町飛禽店(やおやまちとりみせ)」)

【参考】キンケイの名称

『日本国語大辞典』では、キンケイの和名として「にしきどり」を挙げる。おそらく、江戸時代は一般にこう呼ばれていたのであろう。一方、『和漢三才図会』巻四二「原禽類」や、小野蘭山『重訂本草綱目啓蒙』巻三二「原禽」では、キンケイの名称(別名)として、「山鶏」「錦鶏」「金鶏」「采鶏」「驚雉」「鷓鴣」など多くの漢名が挙げられているが、いずれにも履軒の「錦雉」は見えない。履軒は事物の名称にこだわりを持ち、自ら新しい命名を試みることもあった(拙稿「中井履軒の名物学―その『左九羅帖』『画觴』を読む」中井履軒『左九羅帖』『画觴』本文・注釈)ともに武田科学振興財団杏雨書屋編『杏雨』一、一、二〇〇八年 所収)を参照されたい。「錦雉」もおそらくは履軒が考え出した名称なのであろう。

\*その他、菅原浩他編『日本鳥名由来辞典』(柏書房、一九九三)にも「錦雉」の名は見えない。



大坂船場の八百屋町筋 飛禽店 (『撰津名所図会』巻四)

書寧靜舎壁示諸子(寧靜舎の壁に書し諸子に示す)

\*寧靜舎は懷徳堂の学寮の名。これは、竹山が一年間京都の西岡に行き、履軒が校務を執った時の作と言われている(加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九二頁)。

盈々白露下 盈々たる白露の下

啾々冷風来 啾々として冷風来たる。

沈々天色浄 沈々として天色浄く

草木凄其衰 草木凄として其れ衰う。

風光如逝川 風光は逝く川の如く

情愕更若疑 情愕として更に疑う若し。

諸君何為哉 諸君何為れぞ

負笈茲相隨 笈を負いて茲に相い隨う。

既無塵慮雜 既に塵慮の雜す無く

又絶室家累 又た室家の累いを絶つ。

如今不努力 如今努力せずんば

悠悠待何時 悠悠何時を待たん。

水流不可挽 水流れば挽くべからず

時去不可追 時去れば追うべからず。

青年能幾日 青年能く幾日ぞ

白頭徒懷愧 白頭徒らに懷愧す。

太息長太息 太息し長く太息す

為之者誰居 之を為すは誰ぞや。

酣歌聖所戒 酣と歌と聖戒むる所

玩好傲喪志 玩好喪志を傲む。

況敢弗顧獲 況んや敢えて獲を顧みざるをや

豈遑提爾耳 豈に爾が耳を提ぐるに遑あらんや。

勸君青燈下 君に勸む青燈の下

他事母歴思 他事歴思すること母かれ。

言言爾藥石 言言爾が藥石

語語爾老師 語語爾が老師。

降心其玩索 心を降し其れ玩索し

強聒靡用為 強聒用て為すこと靡かれ。

【注】○提爾耳…「提耳」は懇ろに諭し教えること。『詩經』「大雅」「抑」に見える。○強聒…かまびすしいこと。学舎の名(寧靜)通り、静かにしろというのだろう。

【訳】満ち満ちた白露の下、ヒューヒューと冷たい風が吹く。天は澄み渡り、草木は萎む。時間は流れ行く川のようで、「その早さに」驚き、「本当かと」疑うほどだ。諸君は何のために、書箱を負って「はるばる遠く」ここに集まったのか。すでに雑事に心乱されることもなく、また家庭の煩いもない。今、努力しなければ、ぐずぐず

と何時を待つのか。水は流れると引き戻すことができな  
い。時は去ると追いかけることができない。若い時はど  
れほどあるだろう、白髪になっていたずらに後悔する。  
ため息をつきまたため息をつく。そうなるのは誰か。飲  
酒と歌とは聖人が戒めるところだ。「また」器物をもて  
あそんで精神を乱すこと（玩物喪志）を戒める。まして、  
規則（学則か）を顧みないことは、どうして、懇ろに教  
え諭す暇があるうか。君たちに勧める。灯りの下、他の  
ことは妄りに考えるな。すべての言葉は君たちの葉だ。  
すべての語が君たちの先生だ。謙虚に熟読熟考し、声高  
に説くことなかれ。

甲申歳晚自叙

\*甲申は明和元年（一七六四）。歳末に自らの思いを吐露した詩。

歳晏人事休 歳晏人事休  
対酒聊自叙 酒に對して聊か自ら叙ぶ。  
軒冕非吾事 軒冕は吾が事にあらず  
琴書性所娛 琴書は性 娛しむ所なり。  
且欣無知己 且つ知己無きを欣び  
囂々守窮廬 囂々として窮廬を守る。  
八絃入胸襟 八絃 胸襟に入り

俛仰得我所 俛仰に我が所を得。  
刺字久已漫 刺字 久しく已に漫れ  
簡牘不出戸 簡牘 戸を出でず。  
豈乏縫腋士 豈に縫腋の士に乏しからんや  
志尚異所趨 志尚 趨く所を異にす。  
退蔵日加慎 退蔵し 日々慎を加え  
避名若蝎蛇 名を避くること 蝎蛇の若し。  
问我笑為然 我に問う、笑ふぞ然りと為す  
請看蕩々者 看るを請う 蕩々たる者を。  
祇怕浮名伝 祇だ 怕る、浮名の伝わり  
偶在指頭伍 偶々 指頭の伍に在るを。

【注】○軒冕：高官のこと。○囂々：自得の様。○俛仰  
：伏したり仰いだり。日常の起居動作を言う。○刺字：  
「刺字漫滅」で、久しく人付き合いをしないために名刺  
の字が読めなくなること。○縫腋：上官の衣。○蕩々：  
『論語』述而篇に「君子坦蕩々、小人長戚々」とある。  
【訳】年の暮れ、仕事を終え、酒に向かつていささか自  
分のことを述べる。宮仕えは私の仕事ではなく、琴と書  
物が好むところだ。かつ、知己のいないのを喜び、平  
然とみすばらしい庵を守っている。宇宙を我が物とし、

起居に我が所を得たりとする。名刺も(使わないため)字が読めなくなり、手紙のやり取りもない。どうして地位の高い人がいないであろうか。「ただ」目指すところが違うだけだ。引退して日々謹慎し、名が知れることを蛇蝎の如く避ける。私に尋ねる、どうしてそうなのだ、と。見てください、あのゆつたりした人を。「彼らは」ただ名前が空しく伝わって、五本の指に入る(有名になる)ことだけを怖れているのだ。

孝思詩三首

\*稲垣子華の孝養を称えた詩、子華(一七二三〜一七九七)は、美作出身の懷徳堂門人。安志藩に仕えたが、親の介護のために仕事を辞し、宝暦十三年(一七六四)に孝子として幕府から褒賞を受けた。この作品はその時の作。『履軒古風』巻三に、子華を詠い本人に贈った「招隠土」(贈稲垣子華)と「席上贈稲垣子華」が見える(帰坂(一七六七年)後すぐ、履軒三六歳、子華四四歳の作)。なお、「招隠土」は『楚辞』に同名の賦がある。

克孝維人 克く孝たり 維のこ  
百行攸基 百行基づく 攸  
維伊稻生 維だ伊れ 稻生  
洵是孝思 洵に是れ 孝思

童廿離郷 童廿にして郷を離れ  
裹粮尋師 粮を裹みて師を尋ぬ  
我考是師 我が考は是れ師たりて  
誘以孝弟 誘うに孝弟を以てす  
服膺弗爽 服膺して爽わず  
学優而仕 学優れて仕う。  
資事公卿 公卿に資事し  
順徳は比しむ攸なり。  
親老無養 親老いて養なう無く  
逸かに其の思いを勞す。  
愾焉永歎 愾焉として永歎す  
盍ぞ帰りて来たらざる、と。  
云に旋り云に帰るも  
薄田二頃のみ。  
彼の耒耜を執り  
茲の黍梁を莠う。  
稲梁生じ  
秀根盛んなり。  
蓬髮鶉衣にして  
経を帯びて耨く。  
既に饑えて且つ渴くも

童廿離郷 童廿にして郷を離れ  
裹粮尋師 粮を裹みて師を尋ぬ  
我考是師 我が考は是れ師たりて  
誘以孝弟 誘うに孝弟を以てす  
服膺弗爽 服膺して爽わず  
学優而仕 学優れて仕う。  
資事公卿 公卿に資事し  
順徳は比しむ攸なり。  
親老無養 親老いて養なう無く  
逸かに其の思いを勞す。  
愾焉永歎 愾焉として永歎す  
盍ぞ帰りて来たらざる、と。  
云に旋り云に帰るも  
薄田二頃のみ。  
彼の耒耜を執り  
茲の黍梁を莠う。  
稲梁生じ  
秀根盛んなり。  
蓬髮鶉衣にして  
経を帯びて耨く。  
既に饑えて且つ渴くも

子職靡墮	子の職墮すること靡し。
上堂奉親	堂に上り親に奉ずるは
維魚暨脯	維だ魚暨び脯なり。
酒醴是承	酒醴は是れ承くるは
維子暨婦	維だ子暨び婦なり。
左之右之	之に左し之に右し
嬉々其娛	嬉々として其れ娛しむ。
眉寿永年	眉寿は永年
靡知憂虞	憂虞を知る靡し。
厥徳升聞	厥の徳升り聞こえ
旌典是膺	旌典を是れ膺く。
大君有命	大君命有り
錫爾十朋	爾に十朋を錫う。
俾爾終養	爾をして養うを終うるまで
無不充矣	充てざる無からしむ、と。
友朋咸喜	友朋咸な喜び
如躬受賜	躬ら賜を受くるが如し。
幽人積徳	幽人積徳
式作此詩	式て此の詩を作り、
遥貽稻生	遙かに稻生に貽り
称颺其美	其の美を称颺し、

以伝四方 以て四方に伝え  
 俾民興起 民をして興起せしむ。  
 我聞古訓 我古訓を聞く  
 孝子不匱\* 孝子匱しからず、と。  
 (稻垣子華、名隆秀、美作人。)

【校勘】○黍…「稻」の上に「黍」と書く。

【注】○莠稂：ユウロウ。雑草。「詩経」「小雅」「大田」に「不莠不稂」とある。○酒醴：醴は甘酒。○眉寿：老人のこと。「詩経」「豳風」「七月」に見える。○孝子不匱：「詩経」「大雅」「生民之什」「既醉」に「孝子不匱、永錫爾類」(孝子匱しからず、永く爾の類を錫う)とある。ちなみに、履軒は豊後の孝女はつを称える文章を「錫類記」と名づけている。

【訳】すばらしく孝行である、この人は。「孝は」百行の基礎である。

ただ、この稻垣生が、本当に孝行で親思いである。幼くして故郷を離れ、糧を包んで師を尋ねた。私の父がその師であり、孝悌の道で誘った。

慎んで心に銘記し違ふことなく、学問は優秀で宮仕えした。公卿を助け仕え、徳に親しんだ。

親が老いて養う者もなく、遥かに思いを馳せた。

長くため息をついて思った、どうして帰らないでおられないのか、と

そこで帰ったが、痩せた田が二頃（\*一頃は百畝）あるのみ。

鋤を執って穀物を植える。

稲穂が生じても、雑草が生い茂る。

ぼさぼさ髪に粗末な服で、経書を片手に田を耕す。

飲食に不自由しても、子としての務めは怠らない。

座敷に上がって親に奉じるのは、ただ魚と干し肉だけだ。

酒や甘酒を承けるのは、ただ子供と婦人だけだ（自分は口にしない）。

親の側に仕え、嬉々として楽しんでいた。ませていた？

ご老人はずっと憂いというものを知らなかった。

その徳がお上に届き、表彰を受けた。

主君より命があった。お前に報奨金を賜う、

お前が孝を全うするのに必要なものはすべて与える、と

のことであった。

友らは皆、自分が表彰されたかのように喜んだ。

世捨て人の私、積徳が、この詩を作り、

はるかに稲垣生に贈り、その美德を賞揚し、

世の中に伝え、人民が感動し奮起するようにした。

古の言い伝えに言う、孝子は乏しくない、と。

（稲垣子華は、名は隆秀、美作の人である。）

### 【参考】

懷徳堂の孝子顕彰運動については、西村天囚著『懷徳

堂考』下巻「好善の家風」（一九一一年）、加地伸行編『中

井竹山・中井履軒』（明徳出版社〈叢書・日本の思想家

二四〉、一九八〇年）第二章第五節「孝子顕彰運動」（小

堀一正執筆）に見える。

なお、稲垣子華墓碑は、今も岡山県美作町田殿に存在

する（『懷徳堂センター報』二〇〇五口絵参照）。竹山の

子蕉園作の墓碑は以下のようなものである。

稲垣子華碑銘

寛政九年丁巳春正月六日、瀧崑先生稲垣子華諱隆秀卒于播、其弟

子在作者三十餘人、相會而哭、乃相議曰、「剖析周密以訓詁章句鳴

焉者世或有之。高逸妍麗以辭賦文章鳴焉者亦或有之。矯揉自修僅

得一節之長者寔蕃有徒。夫温厚恭儉、博學篤行、能風化邦國、如

吾夫子粹而全者未之有也。吾夫子之德大矣哉。今也夫子捐我諸子、我諸子將安放。蓋碑于其故邑、擇諱夫子之惠行而文焉者而銘之、我諸子歲時拜薦有所適、後世子孫景慕者有所仰、不亦善乎。」乃使三宅生來請于余曰、「竹山先生向有孝狀之撰、吾師之行事、於是乎詳矣。不可重煩先生。請子銘之。」余與生語、問之以其侍疾助葬之狀、則對辭愿款、目潤色戚、追慕之誠、可掬也。則可以知其徒咸然也。亦可以想其後世子孫咸然也。夫子之遺愛何其深也。昔蔡邕爲郭太碑文、謂其友曰、「吾爲碑文多矣、皆有慚德、唯郭有道無愧色耳。」余於斯銘亦然。銘曰、

嗚呼夫子、何德之純。孝友其素、飾之以文。清約其守、能惠于人。學之斯優、内彼玄纁。有赫之都、肉粟之郡。侯氏乃喜、台得蓋田。士庶宵慶、戎有良翰。父兮土思、不肯徙遷。

軻其迎養、歸養之牽。夫子曰噫、曷以官爲。言告侯氏、言告言歸。厥養維何、其體其志。厥業維何、其耒其耜。扇枕臥冰、豈足專美。炎畦霜疇、胼胝其支。出酸處辛、其色有怡。父兮安此、逸豫無期。孝弟力田、邦家之本。王侯爲光、紛舉旌典。三命之俯、德音孔膠。彼其不蹟、胥則效矣。隣保之訛、覃及邦陲。愛之愛之、愛莫助之。日月已愒、孝潰于成。載乘載書、輻其名聲。侯曰於戲、既畢爾志。勉爾通思、誨台赤子。

夫子曰噫、我事全矣。

旧恩亦渥、豈有遐心。乃眷東顧、往即前職。所居風草、民莫不毅。

嗚呼夫子、何德之純。

濟濟多士、莫之與倫。維時丁巳、何歲之厲。天不慙遺、俾民亡師。

鄉人質買、如喪家狗。

仰歎俯泣、銜恤相訓。我之無辜、夫子之故。拊我育我、我之父母。

再駕于播、俾我心苦。

尚曰旋歸、豈遐棄我。噫今若斯、云何其眚。蒼天有命、斯謂之何。乃石乃文、于彼田殿。

以酌以羞、歲時不倦。豈敢爲報、薄以慰心。視死之日、猶生之年。

嗚呼夫子、何德之純。

唯其純矣、是以有然。

大阪 中井曾弘撰并書

【解説】碑銘の作者は、中井曾弘、号蕉園（一七六七～一八〇三）。中井竹山の子。詩才に恵まれ、一晚で十篇の賦を書き上げた「一宵十賦」を残している。将来を期待されたが、三十六歳の若さで亡くなった。「子華碑銘」は、三十歳の時の作（寛政九年は一七九七年）。蕉園の詩文を集めた「墳集」にも見える。序と銘からなり、銘は、経書に典書を持つ四字句を連ねた荘重な文章である（注参照）。

【訳】

寛政九年（一七九七）の正月六日に瀧嶺先生稲垣子華、本名隆秀は播磨で亡くなった。美作にいる弟子三十人ほどは、集まって慟哭し、相談して言った。

「分析が緻密な儒教經典の注釈で世の中に知られた人はいるだろう。また、非凡で美麗な辞賦文章で知られた人もいるだろう。自制心を持ち勉学に励み一芸に優れる人は非常に多い。ただ、温厚で慎ましく、博学で篤行家で、国を感化することができるのが、我が師ほど純粹かつ完全な人は、いまだかつていなかった。我が師の徳はなんと偉大なことか。今、師は我々諸子をお捨てになった。我々はこれから何によつたらよいのか。その故郷に碑を建て、師の徳行を覚えていたる者を選び、文章を作り銘に彫ればいいではないか。そうすれば、我々諸子は季節ごとの墓参に行く所ができるし、後世の子孫で敬慕する者も拜む所ができる。これはよいことではないか」と。

そこで三宅生を私の処に遣わして言った。「先に竹山先生に孝状をお書き頂き、我が師のこれまでの行いは、明らかにしました。再度先生を煩わせるわけにもまいりません。あなた様に銘を書いていただけませんか」と。私は生と語り、看病や葬儀の助けた様子を尋ねた。答えは慎ましかで、涙を浮かべ沈痛な表情であり、真心から師を追慕していることがよくわかった。よつて、その弟子は皆そのようであることがわかるし、また、後世の子孫

も皆そうであろうと予測できる。師の遺愛は何と深いことか。昔、蔡邕が郭太の碑文を作りその友人に、「私は碑文をたくさん書いたが、皆徳に不完全なところがあつた。ただ郭有道だけは完璧であつた」と言った。私がこの銘においてもその通りだ。銘に言う。

ああ師よ、何と純粹な徳をお持ちだったことか。生まれながらに〔素地として〕孝徳を備え、〔加えて〕文才も持ちつてあつた。

謙虚で慎ましかで、人には恵み深く、学問は優れ、徳を蔵し、

都に名を馳せ、郡に招聘され、

国に忠臣が得られたと、領主はお喜びになり、

いい人が得られたと、武士や役人は喜んだ。

父上は土地にこだわらず、引つ越しを承知なさらず、

迎えて養うことを拒まれ、帰つて養うよう引かれた。

師は「ああ、どうして宮仕えしておられようか」とおっしゃい、

そこで領主に告げてお帰りになった。

注（宝暦四年（一七五四））

〔父上の〕お体とお心をお養いなさる、

畑仕事を生業とされた。

師のすばらしさは孝行だけではない。

炎暑厳寒の畑仕事で、手足はあかぎれだらけ。

〔でも〕いくら辛い思いをしても、微笑んでおられる。



父上はすっかりご安心なされ、心安らかに過ごされた。孝行で友人にも親切で農業に勉めるのは、国の礎。將軍様とご領主とは誇りとされ、表彰された。

注(明和元年(一七六四))

位が進んでもますます謙虚に、評判は揺るぎなきものとなった。

そのすばらしき行いを、役人は見習い、

村を感化し、さらに国の隅々にまで及んだ。

だが、いくらお慕い申し上げても事態をどうすることもできなかった。

歳月が経ち、孝行を遂げ(父上が亡くなり)、

琴を弾き、書を読み、名声を隠しひっそりと住まわれた。

ご領主がおっしゃった。「志を遂げられた(孝を全うされた)今、

ひっそりと暮らし、子弟の教育でもなさい」と。

師がおっしゃった。「私の仕事は全うしました。

厚くご恩を被っておりますのに、どうしてお忘れできませんか」と。

そこで、東に赴き、前職にお就きになった。

その地の民草は悪い者がいなくなった。

ああ師よ、何と徳の純粹なことか。

並みいる名士の中にも、これほどの人はいない。

ただ、丁巳という年は、何とひどい年なのだ。

天は強いて(師を)お残しになられず、民から師を奪われた。

里人は意気消沈し、家を失った犬のように。

仰いで嘆き伏して泣き、悲しみを抱いて互いに嘆き合った。

私が罪がない(正しくいられた)のは、師のおかげだ。私を撫で育ててくださった、私の父母だ。

再び播磨へと赴かれ、私を悲しませた。

すぐに帰ってくるとおっしゃったのに、どうして遠く私をお棄てになったのか。

ああ、今このようになり、何を望めようか。

天には命があり、これをどうしようもない。

そこで、田殿に石碑を建て文を作り、

歳時怠らず酒と食物をお供え申し上げ、

報いとするには足りないが、せめて自らの慰めとする。

死を見ること、生のごとく「少しも恐れず」、

ああ、師よ。どうして徳がかくも純粹なのか。

ただ、純粹なゆえに純粹なのだ。

【注】○瀧崑…「崑」は「嶽(岳)」の異体字。故郷の田殿の清滝に因んでつけられた号。○三十餘人…碑の下部に名前が彫られている。「墳集」では「若干人」になっている。○寔蕃有徒…(「左伝」昭公二十八年「寔蕃有徒」、『書経』仲虺之誥「寔蕃有徒」。○放…「よる」(『論語』里仁篇「放乎利而行多怨」。○竹山・孝狀之撰…中井竹山に「稲垣子華孝狀」(明和二年(一七六五)作)がある。○愿款…「ゲンカン」。慎み深くて誠があること。○蔡崑爲郭太碑文…(『後漢書』郭太伝、「高士伝」。○郭有道…「有道」は举士

科目の一つ。○玄纁：「ゲンクワン」。黒い帛。人を招聘する際に用いるもの。ここでは、それに価する価値を言うか。○肉粟：食料。給料? (白居易「白氏長慶集」巻六五「七十三養老、在使之寿富貴」に「特頒其布帛肉粟之賜則謂養老之道尽於是矣」とあるのを参照。)  
 ○台得蓋臣：「蓋臣(ジンシン)」は「忠臣」(『詩経』大雅、文王)。  
 ○戎有良翰：「戎」は「なんじ」。「良翰」は才能のある人(『詩経』大雅、崧高)。  
 ○言告侯氏、言告言歸：「言」は「ここに」(語調を整える語、『詩経』によく見える)(『詩経』国風、周南、葛覃「言告師氏、言告言歸」)。  
 ○扇枕臥水：「扇枕」は暑い夏に親の枕を扇いで涼しくすること。「臥水」は王祥という人が、冬に親の好きな鯉を獲るため、臥して氷を解かしたこと(『捜神記』)。ともに、孝行を言う。  
 ○專美：美名を独占する(『書経』説命下、「書言故事」評論類、專美)。  
 ○胼胝：「ヘンチ」。あかぎれ。手のものを「胼」、足のものを「胝」という。  
 ○逸豫無期：十分に楽しむこと(『詩経』小雅、白駒)。  
 ○三命之俯：官位が進むに随つて益々謙遜すること(『左伝』昭公七年)。  
 ○德音：良い評判(『詩経』国風、狼跋、邶風、日月)。  
 ○覃及：「タンキユウ」。及ぶこと(『詩経』大雅、蕩)。  
 ○愛莫助之：(『詩経』大雅、蒸民)。  
 ○日月已怙：「怙(トウ)」は「過ぎる」(『詩経』唐風、蟋蟀「日月其怙」)。  
 ○載榮載書：「載」は「すなわち」(語調を整える語、『詩経』によく見える)。「榮」は「琴」。弹琴と読書。ともに風流なもの。  
 ○勉爾遁思：「遁思」は世を通れる意思(『詩経』小雅、白駒)。  
 ○遐心：「遐」は「遠く」。

「遐心」は疎遠にする心(『詩経』小雅、白駒)。  
 ○不穀：「穀」は「善」。  
 ○濟濟多士：(『詩経』大雅、文王)。  
 ○愍遺：「ギンイ」。強いて残す(『詩経』小雅、十月之交「不愍遺」)。  
 ○喪家狗：家を失った犬(『史記』孔子世家)。  
 ○銜恤相訓：「銜恤」は「悲しみを抱く」(『詩経』小雅、蓼莪)。「訓(シユウ)」は「呪う」。  
 ○遐棄：遠く見捨てる。生者を後に残して人が死ぬこと(『詩経』周南、汝墳)。  
 ○云何其盱：「盱」は「望む」(『詩経』小雅、何人斯「云何其盱」)。  
 ○羞：食物をすすめ供える。  
 ○薄：いささか。  
 ○視死之日、猶生之年：「史記」蔡沢伝に「視死如帰、生而辱不如死而榮、士固有殺身以成名、唯義之所在、雖死無所恨」とあるのを参照。

### 西岡雑詩

\*西岡での静かな滞在を詠った詩。京都の西岡は、竹山や履軒の妻の実家の革嶋家の所在地。竹山は、明和元年(一七六四)、革嶋家の家事を整理するため、一年間西岡に滞在し、『西岡集』という漢詩文集を残している。

環舍千畝竹　　舍を環る千畝の竹  
 翠光撼几席　　翠光几席を撼かす。  
 幽斎一炷香　　幽斎一炷の香  
 中有独眠客　　中に独り眠る客有り。

其二

暮烟籠竹樹  
蛙鳴水声外  
露牀夢亦幽  
不復還城市

暮烟樹に籠め  
蛙は鳴く 水声の外。  
露牀 夢亦た幽  
復た城市に還らず

其三

玉女宵翱翔  
遺却玳瑁簪  
朝來行人得  
尚帶雲髻沈

玉女宵に翱翔し  
玳瑁の簪を遺却す。  
朝來たりて 行人得れば  
尚お雲髻を帯びて沈む。

其四

襤褸戮龍兒  
龍兒鼎中泣  
祗為貞節軟  
甘心慘禍及

襤褸を褫きて 龍兒を戮せば  
龍兒鼎中に泣く。  
祇だ貞節軟きが為に  
慘禍及ぶに甘心す。

其五

竹芽烹初熟  
村醪沽未還  
先生興不舒

竹芽烹えて 初めて熟すも  
村醪 沽いて未だ還らず。  
先生 興舒はず

先齧兩三環

先に兩三環を齧む。

其六

為客在竹鄉  
日々林中行  
林中斜々逕  
唯有薰風清

客と為りて 竹郷に在り  
日々 林中を行く。  
林中 斜々の逕  
唯だ薰風の清らなる有り。

其七

為客在竹鄉  
日々林中行  
翠光透肌骨  
冷然染衣裳

客と為りて 竹郷に在り  
日々 林中を行く。  
翠光 肌骨を透り  
冷然として 衣裳を染む。

其八

為客在竹鄉  
日々林中行  
興來一長嘯  
上有憂玉声

客と為りて 竹郷に在り  
日々 林中を行く。  
興來たりて 一たび長嘯すれば  
上に玉を憂らす声有り。

其九

為客在竹鄉

客と為りて 竹郷に在り

饗殮きやうらん憑よ此君このきみ\*

饗殮きやうらん 此君このきみに憑よる。

久違くわい腥膻せいせん氣き

久くしく腥膻せいせんの氣きから違さり

清瘦せいしゆ絶た俗塵よくじん

清瘦せいしゆ 俗塵よくじんを絶たつ。

【注】○龍兒りゆうご：龍雛りゆうすうでタケノコのこと。○饗殮きやうらん：饗きやうは朝食。  
殮らんは夕食。前出の「食板銘」を参照されたい。○此君このきみ：  
竹の異名。晋の王徽之が竹を指して「何可一日無此君このきみ（何  
ぞ一日も此君無かるべけん）」と言つた故事に基づく。

【訳】

家を廻る広大な竹林、その翠みどりの光が机や席をうごめかす。  
ひっそりとした書齋に一筋の香、その中に一人眠る客が  
いる。

(その二)

暮れの烟が竹林に立ち籠め、蛙は水の音の外に鳴く。

帳はじりのない寢床で夢心地に幽玄を巡り、街中の喧噪を忘れ  
去る。

(その三)

天女が宵に舞い降りて（さまよつて）、玳瑁たいまいの簪かんざしを忘れ  
ていった。

朝が来て通りがかりの人が見つけると、まだ雲のような  
もとどりの形跡を残していた（玳瑁たいまいの簪かんざしとは、茶色の皮

を被つた竹の子か。それを朝だれかが掘つてきてくれた、  
そこにはまだ黒々と土がついている、か。沈は泥、雲髻  
は天女の黒々とした豊かな髪かみ 黒々と纏わりついている  
土の様子か？)

(その四)

皮を剥いで龍の子（タケノコ）を殺すと、龍の子は、鍋  
の中で泣く。

ただ貞節ていせつが不十分なために、このような惨禍さんごの憂うれき目に  
あつたのだ。

(その五)

筍たけのこが煮えて火が通つたが、村の濁り酒にごり酒を買いに行つた者  
はまだ戻らない。

先生せんせいは待ちきれずに、先にちよつとつまみ食い。

(その六)

竹の郷さとで客きやくとなり、日々林はやしの中を歩く。

林はやしの中の小径せうけいは斜かためで、ただ清らかな風が吹く。

(その七)

竹の郷さとで客きやくとなり、日々林はやしの中を歩く。

翠みどりの光は肌みにまで透みき通り、冷ひややかに衣裳いさうを染める。

(その八)

竹の郷さとで客きやくとなり、日々林はやしの中を歩く。

興きように乗じて一節いちせつぶつと、上で玉たまを鳴ならすような声こゑがする。

(その九)

竹の郷で客となり、毎食、この君(竹)に頼る。

久しく生臭物から遠ざかり、清らかに痩せて、俗塵を断つ。

送君舜之関東(君舜の関東に之くを送る)

\*竹山の門人である中村君舜(一七四〇〜一七八二)の送別詩。

君舜は履軒の後妻(安永八年(一七七九)再婚)の兄。名は有則。

号は出身地の平野郷から見える二上山に因み両峯と言う。明和

三年(一七六六)の履軒京都行の際、同時に白木屋に仕えに行つ

たこともある。『履軒古風』卷三にも「春夜小集似君舜」と題す

る詩が、卷四に「清虚館小集呈君舜」と題する詩がある。この

詩の関東行はおそらく明和二年(一七六五)。竹山『笈陰集(詩

集)』卷二に、明和二、三年(一七六五、六)の作だと思われる

「君夷告別之江都、聞先到京師留宿子甚家、辨行事而後発、故追

寄此」という詩がある(影印本三〇〇頁)。「笈陰集(文集)』卷

四には、明和三年(一七六六)作の「送中村君舜之江都序」が

ある。

臨別問帰期 別れに臨みて 帰期を問う

帰期不可久 帰期 久しかるべからずと。

君言跋涉艱 君は言う、跋涉艱く

且避煩熱時 且く煩熱の時を避けん、と。

東土多士叢

英華繽紛紛

況君芝蘭姿

翩躚往其間

相得且歎晚

牽衣投君轄\*

離別原太苦

新交更難割

偏恐三秋天

空見鴻雁來

所頼在感情

氣象日推移

蓴鱸\*此地多

秋風入君懷

去々千里羈

霧露\*慎興寢

分手意黙々

相顧更一言

東土雖樂矣

海上有故人

東土士叢多

英華繽紛紛たり。

況んや君が芝蘭の姿

翩躚して 其の間に往くをや。

相い得て 且つ晩きを歎き

衣を牽きて 君が轄を投ぐ。

離別 原より太だ苦しけれども

新交 更に割き難し。

偏えに恐る 三秋の天

空しく鴻雁の來たるを見るを。

頼る所は 感情に在るも

氣象 日々推移す。

蓴鱸 此の地多く

秋風 君が懐に入る。

去々 千里の羈よ

霧露 興寢に慎め。

手を分かつに 意黙々たり

相い顧みて 更に一言す。

東土 樂しと雖も

海上 故人有りと。

【注】○投君轄…投轄は、車のくさびを井戸の中に投ず

る意。客を愛して強いて帰れなくすること。○蓴鱸：蓴羹鱸膾の略。ジュンサイの羹とスズキの膾。晋の張翰はこの二つの故郷の名産を味わおうと官を辞して帰郷した(『晋書』文苑伝、張翰伝)。後、故郷を思う情を言う。  
○霧露：病気のこと。

【訳】

別れに臨んで帰る時期を尋ねる、遅くなつてはいけな  
よと。

〔すると〕君は言う、山を越え川を渡るのは大変ですよ、  
当分は暑い時期を避けます、と。

関東は名士が多く集まつており、花が咲き誇っている。

まして君の芳しい姿が、その中で軽やかに飛び回ればど  
うであろう。

知り合いになるのが遅かったと嘆き、君の衣を引いて留  
めるであらう。

別れはもとより苦しいものだが、新しい交わりはさらに  
そうだ

〔以上のようなことから〕私が心配するのは、秋になって、  
雁だけ帰ってくる(君は帰ってこない)ことだ。

頼りとするのは感情だけだが、それも日々移り変わる。  
おいしいものはこの地に多く、秋風が君の懐に入れば思

い出さだろう(？)

行け、千里の旅人よ。起き伏しに病気には気をつけよ。  
別れに際して、気持ちには晴れないが、振り返つて一言だ  
け付け足す。

関東が楽しくても、大阪に友人がいることを忘れるな  
よ、と。

臥龍贊

\*在野にありながら才能を有していた諸葛亮を賛美する詩。

瓊玉為質、蕙蘭為衣、布衣之賢、王佐之才。三代之下、  
吾見若人、偉矣哉。所以臥草廬而龍名、駕輕軒而虎威、  
翼微君於泥中、峙鼎足于西陲、粲然王政、永觀遺愛。斯  
人而寿、事未可量知矣。非天下之奇才、其孰能之。嗟夫  
抑時言之、公之業可謂大成也。而公之志、則弗遂、命矣哉。  
即以不能混一寰宇而疾公者、曾不說史矣。

【注】○蕙蘭：香草。香草で人を称えるのは『楚辞』な  
どによく見える。○龍名：諸葛亮が臥龍と呼ばれたこと  
を指す。

【書き下し文】瓊玉を質と為し、蕙蘭を衣と為し、布衣

の賢にして、王佐の才あり。三代の下、吾若の人を見るに、偉きかな。所以に草廬に臥して龍の名あり、輕軒に駕して虎の威あり、微君を泥中に翼け、鼎足を西陲に峙して、王政を粲然たらしめ、永く遺愛を觀す。斯の人にして寿ければ、事未だ量り知るべからず。天下の奇才に非ざれば、其れ孰か之を能くせん。嗟夫れ時に抛りて之を言えば、公の業大成と謂うべきなり。而して公の志は則ち遂げざるは、命なるかな。即し寰宇を混一する能わざるを以て公を疚む者あれば、曾て史を讀まざるなり。

【訳】 寶石のような性質を持ち、香草を衣服にし、平民の賢人にして、王を輔ける才能があつた。夏殷周の三代以降では、この人を見るに、実に偉大であると言える。そこで、草の庵に住んで臥龍と呼ばれ、軽い車を操つて猛虎の威力があり、危うい主君を泥の中から救い、西のはしに三国を鼎立せしめ、王政を輝かせ、長く遺愛を示した。もしこの人が長寿を全うしたら、事態はどのようになつていたか計り知れない。天下の奇才でなければどうしてこのようなことができたであろうか。ああ、当時の状況を考えれば、公の業績は偉大だと言ふべきである。だが公の志が遂げられなかつたのは、運命だ。もし、天

下を統一できなかつたことで公を責める人がいるとすれば、「その人は」歴史を讀んだことがない人である。

### 通天橋霜樹

\*京都の東福寺の紅葉を詠う（口絵3参照）。

彩霞染衣澗辺 彩霞 衣を染む澗の辺  
 明錦満目崖上 明錦 目に満つ崖の上。  
 青樽欲開何処 青樽 何処に開かんと欲して  
 躊躇魚炙熊掌\* 躊躇す 魚炙と熊掌と。

【注】 ○通天橋：通天橋は京都の東福寺にある橋廊。紅葉の名所として今も有名。○青樽：清樽。清酒を入れた樽。○魚炙熊掌：焼き魚と熊の掌。美味の代表。『孟子』告子上篇に、生命と道義の両方を取ることはできないことを言う譬えとして、「魚我所欲也、熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也」と見える。

【訳】 谷川のほとりで艶やかな霞が衣を染め、崖の上ではまばゆい錦が目一杯に広がる。酒樽をどこで開けようかと考え、酒の肴を何にしようかと悩む。

## 巻二

巻二は、三十五歳の時の京都行に関する作品を収めており、基本的に『洛汭奚囊』と重なる。その全文の翻刻、訳注は拙稿「『洛汭奚囊』—中井履軒の京都行」(『懷徳堂センター報』二〇〇四)において紹介した。同稿において、『洛汭奚囊』と『履軒古風』巻二との異同を以下のように述べた。

・『洛汭奚囊』になく『履軒古風』巻二にあるもの…「離恨」「読王祥伝」

・『洛汭奚囊』にあつて『履軒古風』巻二にないもの…「離席、奉答伯兄」「既上舟、奉寄伯兄(三首)」「雪朝奉呈菅公」「丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公」「碧山樓陪菅公賦奉酬」「遊高台寺」「答土蒼 其二、其三」「九月十三夜」「南帰途中口号 其二(最後の詩)」

・『洛汭奚囊』との文字の異同

\*「永輔義佐寄酒鷄子来、題簡背謝之」↓「早原寄酒鷄子来、題簡背謝之」

\*「述客中況、答早土蒼」「憶旧遊寄早土蒼」の「早」なし。

\*「川上習之」の「川上」なし。

以下、『洛汭奚囊』にない二作のうち、上記拙稿で紹介しなかった「読王祥伝」を紹介する(九七頁)。また、「はじめに」で述べたように、履軒の草稿であると思われる新田文庫『履軒古風』(E138)との異同を述べたい。履軒の創作過程がよくわかるからである。また、上記拙稿における誤植も、お詫びし訂正したい。

### 【誤植】

五一頁上段一〇行目、下段二行目、一四行目、

五二頁上段一二行目

『寔陰集(詩集)』巻三↓『寔陰集(詩集)』巻二

五二頁 四、「到京、奉寄伯兄」詩(其二)

我身↓吾身〔書き下し〕我が身↓吾が身

五六頁 一〇、「羈鳥辞」

以和↓以相和〔書き下し〕以て和す↓以て相和す

五七頁 一二、「偶成」

簡篇↓簡編〔書き下し〕同上

六四頁 二〇、「鴨林納涼」



溪流↓溪水〔書き下し〕同上  
〔訳〕川辺の林↓川の水

六七頁 「歎拘」

植表而推秋／毫弗遁兮↓植表而推／秋毫弗遁兮  
〔書き下し〕 植表し推秋し／毫も遁うしなわざれば

↓表を植て推し、／秋毫も遁うしなわざれば

六七頁 「歎拘」

有微有悪↓有微有悪

〔書き下し〕 微しき↓嫩よき

〔訳〕 卑しいのも良くないのもあるが

↓良いのもあれば悪いのもあるが

七一頁 「九月十三夜」

不再来↓不再求

〔書き下し〕 再びは来ず↓再びは求めず

【文字の異同】（\*履軒草稿↓『洛内叢書』）

二、

五〇頁 席上↓離席

三、

五一頁 自咲↓自笑

五一頁 休憂阿徳貧、貧時即是福（自無塵繩縛）↓休憂阿徳貧、自無塵繩縛（\*竹山『奠陰集（詩集）』卷二の引用は「休愁阿徳貧、貧時即是福」）

\*定稿では「心配しないでください。貧乏人の私は、世俗の塵に縛られることはありませんから」の意になる。一方、見せ消ち前の草稿では、「私が貧乏なことを心配しないでください。貧乏な時が幸せなのですか」の意になる。「休憂」の係る範囲が変わる。そして、この草稿は、前の詩の結句「多事從茲始」（厄介なことはこれから始まる）に対応するものと言えよう。つまり、草稿では、これまで貧乏でもついていた履軒が、世の中に出て出世することを暗示するものであるのに対し、定稿では、初めから出世することがないという言い方に変えられているのである。後者は、京都市の後の「答早士誉」に「豈是貧寵栄」（貧乏人がどうして恩寵に浴しよう）と言い、一年後の帰阪時に詠んだ「南帰途中口号」に「一掛京洛塵、未化旧素衣」（一度、京都の塵を払うと、白い衣は元のままで）というのと同様、結果を見てからの視点で書かれている

ることがわかる。履軒も出立時には、出世を意識していたが、後にはそれを隠したと言えるかもしれない。

八、

五三頁 英輔↓永輔

（cf.『履軒古風』手稿本では「早原二生」）

五三頁 「牘背」の「牘」の横に「簡」とある↓簡背

五三頁 「遠相贈」とあり「遠」の横に「並」とある

↓並相贈

一〇、

五五頁 「朝飲」とあり「朝」の横に「晨」とある↓朝飲

五五頁 紫霓↓紫電

五五頁 汨揺々↓汨蕩々

十五、

六〇頁 「肱」は「鈎」(?)を改める↓肱曲

十八、

六二頁 「朽靡姿」とあり「姿」の横に「軀」とある

↓朽靡姿

六二頁 驩未洽↓歎未洽

二十一、

六六頁 「中之与晷」とあり「晷」(\*)「晷」は日陰の意を消して「晷」とある(『洛晷奚囊』も同じ)↓中之与晷

二十四、

六九頁 「葱根」とあり横に「蕤花」とある↓蕤花

六九頁 至小者↓至少者

二十五、

七〇頁 忘朝饑↓忘朝餓

二十七、

七一頁 「独鶴」とあり「独」の横に「別」とある

↓別鶴

【ない作品】

八と九の間

研究室銘 代菅公(研究室の銘、菅公に代わる)

玄々の室 玄々の室に

伏彼秋兔 彼の秋兔を伏す

儻遭風雨 儻し風雨に遭えば

化作龍蛇 化して龍蛇と作る

【注】○研究室：硯箱。○玄々：奥深い様。『老子』第一章の「玄之又玄、衆妙之門」が有名。○秋兔：秋の毛は細いと言う。その秋の兔を使った筆を言うか。

【訳】奥深い部屋（\*硯箱）に、あの秋の兔（\*筆）が潜んでいる。

もし、風雨（\*墨汁）に遭うと、化して龍や蛇（\*字）になる。

【参考】硯箱、硯を詠んだ履軒のその他の詩

研究室銘（新田文庫『履軒古風』（E138））

（次の「寄長洲」は辛卯（明八年・一七七二）孟春の作）

我之無能 我れ之れ無能にして

惟其有容 惟だ其れ容るる有り

鈍鋭殊質 鈍鋭質を殊にし

並受待用 並びに待用を受く

狡兔之林 狡兔の林となり

龍蛇之淵 龍蛇の淵となる

【訳】私は能なしで、物を容れることしかできません。優れたものと劣ったものとはもとより性質を異にします

が、それぞれ使われ方があります。すばしい兔（\*筆のこと？）の林となり、龍や蛇（\*字を喩える？）が棲む淵となります。

研銘（『履軒古風』巻四）

窮谷之材 窮谷の材

隱見有期 隱見期有り

爾性已鑿 爾の性已に鑿たれ

爾用方施 爾の用方に施されんとす

【訳】奥深い谷の材が、隠れたり現れたりするのはそれぞれ時期がある。

お前の質はすでに鑿たれて、これから用をなそうとして

いる。

十七と十八の間

泉家石地炉銘

彼洛之水 彼の洛の水

有汚其支 汚ぎるあり 其の支

遭運之利 遭運の利

万民攸倚 万民倚る攸

泉家之莊 泉家の莊

在東之涯

乃祖菟裘

孫子敬止

修其壞弊

獲其玄器

四周無縫

廓然虛矣

無蓋無底

類井之幹

先世旧物

觀斯有感

就作地炉

以示弗忘

永貽厥孫

育齋処士

孝思攸覃

属銘其友

履軒幽人

時属孟夏

明和四年

東の涯てに在り

乃ち祖菟裘

孫子敬止し

其の壞弊を修む

其の玄器を獲り

四周縫無く

廓然として虚なり

蓋無く底無く

井の幹に類す

先世の旧物

斯れを觀て感有り

就ち地炉を作り

以て烹飪に供し

以て忘れざるを示す

永く厥の孫に貽し

育齋処士

孝思 覃（およぶ？ふかい？）

銘を其の友

履軒幽人に属す

時 孟夏

明和四年に属す

攸

【校勘】○属：「在」を改める。

二十一と二十二の間

離恨（略）：『履軒古風』もあり。

二十七と二十八の間

読王祥\*伝（王祥伝を読む）：『履軒古風』もあり。

淳徳一代望 淳徳 一代望み

孝友継虞\* 孝友 虞\*を継ぐ

奈何馬食槽 奈何せん 馬食の槽

可惜風吹耳 惜むべし 風の耳を吹くを

揖讓勞文飾 揖讓は 文飾を勞し

榮華没年齒 榮華に 年齒を没す

古人言忠臣 古人言う 忠臣は

須求之孝子 須く之を孝子に求めよ、と

此語徒虚辞 此の語 徒らに虚辞にして

掩卷為君慨 卷を掩いて君が為に慨く

【注】○王祥：『晋書』に伝がある。晋の人。冬、母のため鯉を捕ろうとした時、氷が自然に割れて鯉を得たという話がある。二十四孝の一つ。○虞\*：『史記』周紀に、礼を尊んだ土地として登場する。○古人言（以下）：

『戦国策』卷一九「王立周紹為傳」（王周紹を立て傳と為す）に、趙王の言として「人有言子者曰、『父之孝子、君之忠臣』（人子を言う者有りて曰く『父の孝子は、君の忠臣なり』と）とある。この故事に基づく「孝詩」という詩にも「欲得忠臣者、求之孝子門」（忠臣を得んと欲する者は、之を孝子の門に求めよ）とある。

【訳】「王祥の）淳き徳は世の中こそぞって仰ぎ、その孝行と友情は虞汭を継承するものであった。

だが、どうしよう、大食らいの桶（のような食器）を。また、惜しむべし、「礼儀など」どこ吹く風という態度を。（?）

礼儀は表面を取り繕い、栄華の中に天寿を全うした。古の人（\*『戦国策』に見える趙王）は「忠臣は孝子に求めよ」と言った。

この語はいたずらに空語となっている。本を閉じて君のために嘆く。

【参考】王祥は、魏に仕えながら、司馬氏の晋に仕え、高官の地位で天寿を全うした。孝行だが、魏には忠臣ではなかった。末尾は、「忠臣は孝子にもとめよ」との格言は、王祥の生涯を見れば、虚言だ、嘆かわしい、と言

うのであろう。孝行という徳行と現世での栄達とは両立しないという履軒の考えを反映するのかもしれない。

帰省浪華飲黒田氏宅、時季秋閨之晦也

（浪華に帰省し黒田氏宅に飲む、時季秋閨の晦なり）

秋尽氣蕭森\* 秋は尽き 氣は蕭森たり

高堂杯盤羅 高堂に 杯盤羅なる

歛極生愁思 歛極まりて 愁思生じ

不謂三句多 三句も多しと謂わす

【注】○蕭森…物寂しい様。

【訳】秋は終わり、物寂しさが広がる。お屋敷には杯や皿が敷き並べられている。

歛楽が極まって愁いが生じ、三十日も多いと思わない（閨の月がいつもより早く尽きて帰らなければならぬことを歎くか?）。

同前 醉中揮筆（醉中に筆を揮う）

揮筆走龍蛇 筆を揮いて龍蛇を走らせ

吾復何所讓 吾れ復た何をか讓る所ならんや。

醉墨題醉語 醉墨にて醉語を題し

因酔見吾狂 酔に因りて吾が狂を見す。

発散させたか。

【訳】筆を揮つて龍や蛇のような字を走らせ、私はもはや遠慮などせぬ。

離恨 (離れの恨み)

酔っぱらった筆で酔っぱらいの言葉をしたため、酔いに乗じて我が狂なる部分を見せよう。

瞻彼北山 彼の北山を瞻

同前 賡竹里子<sup>\*</sup> 国詩韻 (竹里子が国詩の韻に賡ぐ)

吾党不羈才 吾党不羈の才

文酒気雄哉 文酒気雄きかな

徒長燕市傲 徒らに燕市の傲りを長じ

使人感慨催 人をして感慨を催さしむ

發我南音<sup>\*</sup> 我が南音を発す。

清商入徵<sup>\*</sup> 清商徴に入り

凄惋動人 凄惋 人を動かす。

有客問我 客有り我に問う

何為乎然 何為れぞ然るや、と。

人鮮兄弟 人兄弟鮮なく

他郷離散 他郷に離散す。

素秋将央 素秋 将に央きんとし

草木且変 草木 且に変せんとす。

霧露侵体 霧露 体を侵し

思夢煩襟 思夢 襟を煩す。

匪飢匪渴 飢えず渴せざるも

伏枕輾転 枕に伏して輾転す。

何日斂翼 何れの日か翼を斂むること

于彼旧林 彼の旧林においてせん

【注】○賡…つぐ。「賡韻」は「和韻」に同じ。○竹里子：加藤景範。懷徳堂で学んだ歌人。○燕市：燕の都。刺客として有名な荆軻は、酒を好み、ここで日々酒を飲んだと言う (『史記』荆軻伝)。

【訳】我らは、束縛を受けない才人だ。詩文を作り酒を飲み気は猛々しい。

いたずらに酒飲みの倨傲だけを長じ、人をあきれさせる。\*やや自暴自棄な詩である。京都でのストレスを一気に

【注】○南音：南の音楽。○清商入徴：商徴ともに古代中国の音階。○匪飢匪渴：『詩経』「小雅」「甫田之什」

「車癡」に見える。

【訳】あの北山を見て、我が南の音楽を奏でる。調べは短調へと変わり、その凄まじさは人を動かす。ある人が私に尋ねた。「どうしてこのようなのですか」と。「私は答える」「それだけでなくも兄弟が少ないのに、他郷に離散しているのです」と。秋はまさに尽きようとし、草木はまさに色褪せようとしている。露が体を侵し、悩ましき夢が心を痛める。飢えも渴しもしていないが、枕に伏せて寝返りを繰り返す。いつになったら、あの故郷の林で翼を休めることができるのだろうか。

## 中井木菟麻呂

### 『懷徳堂水哉館先哲遺事』卷五・卷六・卷七翻刻

釜田啓市

#### 懷徳堂水哉館先哲遺事卷五

##### 碩果遺事

碩果ノ事蹟ハ、記録寥寥、遺聞亦希ナリ、今僅ニ一二ヲ載スルノミ、  
箎集ハ大阪圖書館ニ藏スト聞ク、故ニ其書ニ因リテ獲ル所ハ之ヲ畧ス、

##### ○碩果ノ名號

碩果ニハ小字アリシコトヲ聞カズ、想フニ七郎ハ幼時ヨリノ通稱ナルベシ、抑樓ハ少壯ノ頃ニ用井シモノニテ、晩年ニハ碩果ノミヲ用井タリ、多クハ石窩ニ作ル、

##### ○碩果ノ風貌性格

碩果ニハ肖像存セザレバ、其容貌ヲ揣知スルニ由ナケレドモ、母ナドノ話ニヨレバ、「幼穉ノ頃ニテ確ニハ記憶シ居ラザレドモ、唯面ニ痘痕アリテ、コハキ様子ノ方ナリシコト丈ヲ覺ユ、」ト云ヘリ、其性格ニ至リテハ、嚴正勁直ニシテ、蕉園ノ英明ニシテ弘潤ナルガ若クナラザリキ、



○碩果ノ教授并ニ管校職

碩果ハ明和八年辛卯ヲ以テ生マレタレバ、兄蕉園ヨリ少キコト四年ナリ、享和三年癸亥蕉園ノ歿スルニ至ルマデハ、天滿ニ別居シテ、私塾ヲ開キ居タルガ、蕉園歿後ハ懷德堂ニ歸リテ、學校預リト爲リ、明年甲子ニ竹山ノ歿スルニ及ビテ、教授職ヲ承ケ、學校預リヲ兼ネタリ、碩果ニハ嗣ナカリシ故、一旦ハ並河寒泉ヲ養子トシタルコトアリシガ、寒泉ガ舊姓ニ復セシヲ以テ、袖園ノ子桐園ヲ養ヒテ嗣ト爲シタリ、然ルニ其年尚幼小ナリシ故、寒泉ガ代リテ庶務ヲ攝シタリ、寛政再建後ノ懷德堂ニテハ、樓上ニ教授職ガ居リ、下屋ニハ學校預リガ住フ定ナリシ故、碩果ガ樓上ニ居リ、寒泉ガ下屋ニ住ヒタルコトアリト聞ケルガ、想フニ此ノ時ナルベシ、

○碩果ノ經說

曠誌ニハ、潛心經術、往々多闡明、トアレバ、多少ノ經說ハアリシコト、思ハルレドモ、文字ノ上ニ存シタルモノナシ、強ヒテ之ヲ求ムレバ、先兄蕉園ガ盤庚ノ始ニハ錯簡多シト言ヒオキタル說ニ基ツキテ、序次改定シタル者ニ一枚、國文ヲ以テ左傳中ノ私說ヲ手記シタル者十三四枚アルノミナリ、

○編次鈔寫

碩果ニハ著書ナシ、其編次綴緝セシ者ニハ、履軒ノ史記雕題、戰國策雕題ガ、元本書ノ欄外ニ細書シタルヲ卸書ニシテ、七經雕題畧ノ體裁ニ爲シ、史記三卷、戰國策二卷ト爲シシ者アリ、戰國策ハ家ニ存セザレバ、刪數差異ナキヲ保セズ又碩果ハ、書ヲ讀ミテ鈔寫セザレバ、胸臆ニ留ムルコト能ハズトテ、讀書ノ際ニハ、務メテ之ヲ鈔寫シ、又門生ニモ斯ク爲サシメタリ、トノコトナリ、今存スル所ノ手寫本ニハ、春秋亂賊表、春秋闕文表、安齋叢書抄等アリ、

○碩果ノ詩文

碩果ノ文章ハ雄渾勁駿ノ氣魄ヲ缺クト雖、其人格ノ如ク堅正剛實ニシテ、用字行文軌範ヲ逸スルコトナク、一字苟セザル概アリ、

碩果詩ヲ好ム、篇什篋ニ滿ツ、風格精純ニシテ雅正ナリ、尤力ヲ詠史ニ用井タル者ノ如シ、亦咏物ヲ愛ス、人影、碧、涯孩兒等ヲ題トシタル者アリ、  
詩文共ニ編ヲ成サズ、並河寒泉墳集ニ次ギテ之ヲ編次シ、題シテ篋集ト曰フ、

○碩果ノ書風

碩果ノ書法モ亦所謂懷德堂風ノ甄陶ヲ經タレドモ、字體一變シテ其傳承セシ所ヲ得ルニ苦シム、然レドモ子細ニ結構ノ存スル所ヲ點檢スレバ、尚竹山ノ範型ヲ脱セズ、懷德堂辛丑壽卷ニ載スル所ノ少年時代ノ筆迹ヲ見レバ、其由來スル所ヲ知ルベシ、遺墨中書風ノ變化ヲ見ズ、其礫法ノ向上シタルハ獨得ノ筆法ナリ、  
碩果平生大字ヲ作ラズ、細書ハ其得意トスル所ナリ、其詩ノ如キハ、多クハ之ヲ半紙、又ハ書翰用ノ半切紙等ニ書シタリ、其寫字ハ點畫齊整シテ、前後一貫セリ、

○懷德堂風ノ變遷

懷德堂ノ學風ハ博約ノ聖訓ヲ遵奉シテ、歷世渝ルコトナカリシガ、懷德堂風ニ至リテハ、碩果ニ至リテ三變セリ、即當初ニハ町家ノ子弟ニモ自由ニ講筵ニ預ラシメ、専ラ聖道ヲ普及スルヲ務ムルニ在リ、所謂德育本位ナリシガ、竹山ニ至リテハ一變シテ、文藝旺盛ノ時代ニ入り、道德文章渙發シテ、博約ノ本義ヲ恢宏スルコト、ナリ、諸儒ト交游シテ、文詩ノ應酬ニ行レタリ、竹山蕉園共ニ歿シテ、碩果教授ヲ掌ルニ及ビテハ、歷代傳承ノ學風ヲ自重シ、懷德堂ノ地位ヲ保持シテ、東西儒家ノ上ニ傑出シタル者ト爲サンコトヲ務メシ者ノ如シ、故ニ學德一世ヲ睥睨シテ、俗間ノ儒流ヲ交游スルコトヲ喜バズ、其出入往復スル所ノ者ハ、社友門下生等、故舊親近ノ外ニ出デズ、其遺稿中ニモ、東肥ノ愛教微雲ニ答フル書ノ外ニ、社外ノ諸家ト贈答倡和セシ文詩アルヲ見ズ、サレバ竹山以上ハ開放時代トモ云フベキ二代ヘテ、碩果ニ至リテハ再變シテ、閉鎖主義ヲ取りタリ、以後ノ懷德堂ノ講帷ヲ撤スルニ至ルマデ、斯ノ風ヲ遵守セリ、

## ○碩果ガ政治上ニ關スル事蹟

碩果ノ擴誌ニハ嘗竊勸於平賀明府、表一忠臣、黜一姦臣、時人大悅、トアリ、此ハ碩果ノ事蹟中特筆スベキ事ナレドモ、家ニハ記録ノ微不至キ者ナケレバ、憾ムラクハ其轉末ヲ詳ニスルヲ得ズ、平賀明府ハ大阪市尹平賀信濃守ナリ、碩果モ亦竹山ノ後ヲ承ケテ、城代奉行等ニ出入シテ、經史ヲ講説シタレバ、此等ノ關係ヨリシテ、忠言ヲ進メタルコトアリシナルベシ、

## ○碩果ガ理財上ノ技能

懷徳堂ハ、竹山ノ時代ニハ用度給セズシテ、始終窮迫ノ情態ニアリシガ、碩果ニ及ビテハ社中同志ノ助力ニモヨルベケレドモ、碩果天性資材ノ運用ニ於テ特長ノ技能ヲ具ヘ、檢勤家ヲ御シテ、宜シキヲ失ハズ、其室篠田氏モ亦家政上節約ヲ主トシテ、頗ル内助ノ功アリタルニヨリ、懷徳堂ノ用度ハ一代ニシテ充足シ、綽トシテ餘裕アリ、藏書類モ、竹山ノ時代ニハ、必要ニ迫リテ僅ニ佩文韻府淵鑑類函ヲ購得セシ位ナレバ、幾何モナカリシニ、碩果ニ至リテハ、未文庫ヲ設クルニハ及バザリキト雖、能ク一代ニシテ汗牛充棟ノ圖籍ヲ貯ヘタリ、(此等多數ノ藏書ハ、碩果ノ時ニハ何處ニ存置セシニヤ詳ナラザレドモ、桐園ノ時ニ及ビテ、文庫一基ヲ設ケテ、之ヲ藏スルコト、ナレリ、是ハ桐園遺事中ニ述ベシ)堂背ニハ二十四疊敷ノ庫アリ、此ハ寛政再建當時ノ建設ナレドモ、庫中ニ蓄藏シタル多種ノ家什ハ、大抵碩果ニ至リテ購得シタル者ナリ、其中ニ幾棹カノ簞笥長持アリ、此等ハ歷世ノ婚嫁ノ節ニ新婦ノ携ヘ來リタル者モアレバ、必シモ盡ク碩果時代ノ新調ナルニハアラズト雖、他ニ家具調度ノ平生用井盡サザル程夥シクアリシハ、碩果ノ設備ニ屬ス、又庫中ノ四壁ニ傍ヒテ、十二個ノ頑丈ナル大櫃ヲ並ベテ、米穀ヲ貯藏シ、以テ饑饉等不時ノ窮乏ニ備ヘタリ、櫃前ニハ備餼糧トカ(正確ニハ記憶セズ)題シタルヲ記憶ス、

## ○碩果昆弟ノ友情

碩果ト蕉園トハ、竹山ノ諸子中僅ニ生育ヲ遂ゲタルコトナレバ、其性格ノ相違シタル所アルニ拘ラズ、友情極メテ親密ナリキ、左ノ一二文詩ニ因リテモ知ルヲ得ベシ、

荆庭拜別、忽爾逾月、弟之懶慢、曠闕馳問、負罪深重、不啻淵嶽、倏辱乎誨、慙悚慙悚、喜承咳勢稍殺、體況休裕、不以弟不肖、永夜耿耿、不交睫睡、二蘊兩處之念、爲未迫切、同根真情、感咽何勝、竹堂畫蕉一幀、筆痕適逸、佩荷厚賜、既命襍褻、須掛弊齋中、以慰翹企、冗務紛若、致謝稽晚、伏乞寬貸、鶉鮓■、謹、送得佐陽、羨一啜、幸甚、秋氣嚴肅、寒疾易侵爲時保衛、以副瞻禱、

蕉園哲兄座右

九月十二日

曾縮拜復

寄家兄

聞說豊侯待士寬、趨陪日整舊儒冠、原非犬馬魯君養、何用車魚憑子嘆、傷心楊柳梅見塚、奪目芙蓉天女壇、歸期莫秋猶熱、只怕蘓山客袖寒、

併シ書牘ノ往復ハ餘ニ好マザリシ由ニテ、蕉園ガ客居中、昆弟互ニ文書ヲ往復センコトヲ望ム旨ヲ竹山ニ云ヒ送リタルニ、竹山ガ返書中ニ左ノ如クアリ、

一 七郎尺牘之事至極尤にて候。早々相申間候左様之事少し嫌と筆鈍と相持にて候此事ハ兼而我等も不滿意候

○懷德堂告文

懷德堂ニハ、從來重要ノ事ニ遭遇セシ時ナドニ告文ヲ先哲ノ靈前ニ奉ル事ナカリシガ、碩果ニ及ビテ、二回告文ヲ捧ゲタルコトアリ、一ハ懷德堂創立百年ノ時、一ハ義金募集ノ時ナリ、篋集ニ収録シタルカト思ヘド、今之ヲ左ニ掲グ、

告祖考文

維文政八年乙酉六月七日、不肖竊恭具清酌庶羞之奠、昭告于 皇祖貽範先生、 皇考文惠先生之靈曰、伏惟府庠懷德書院之設創於享保丙午、 有德大君振先朝頽綱、宇宙一新、遵聖訓於珠經、本府庶富之民、欲加之以教、 皇祖奉命、

建學施教、勸諭忠孝、靡然嚮化、皇考大篤前烈、啓迪後人、誘掖諄至、四方矜式、寬政罹災、門牆具燼、越俟當路、蒙 賜營資、朋友助費、堂構復舊、嗚呼祖考抱有爲之才、值右文之運、明主德意、耀榮于鼓篋之始、良弼廟議、霑澤于馬土之餘、府庠再修、不廢爲榛莽者、豈非天乎哉、先兄聰敏、馳譽詞藝、學正識高、是爲師表、惜夫降年不永、繼不肖承乏教授、任重微、恐廢於半途、仰念成立外天之難俯戒覆墜燎毛之易、戰兢淵冰、勤儉弗怠、以至今茲、司教四世、歷年一百、具狀告 官、官乃賞我以承緒永久、弗墜先業、又勗我以傳之方來、永世弗渝、鄉黨親戚、執幣來賀、是豈我之績、實 祖考厚德之報、不勝感慕欣躍之至、敢陳菲薦、敬伸虔告、尚其顧歆、永垂庇祐、

不肖縮董沐頓首再拜

告皇祖鬻菴先生文

天保癸巳、六月七日、以建學命降之日、恭設几筵、告于

皇祖鬻菴先生之靈曰、維昔享保、歲次丙午、官命建學奔走勞劬、堂基斯立、文教大敷、火災蠹毀、不可弗虞、五友保任、謀爲永圖、人逝家亡、一榮一枯、迨皇考世、唯存一家、德必有鄰、其從如雨、親友協心、緩急幹蠱、壬子之災、通財築作、官金盡數、私財無餘、皇考即世、日月逾徂、棟撓屋破、何以修補、祝融爲祟、何以按堵、今而不備、如後患何、義金起議、親昵三五、施及疎遠、彼倡此和、遐邇孚信、輸金夥多、涓々爲河、是不虛語、錙積銖累、大德是荷、急難有備、靡墜遺緒、一家攸存、今復胡秦、懇々諸友、好義代任、姓名具告、明神其安、魚菽菲薦、魂兮來歆、

不肖孫曾編拜手稽首謹白

義金人名

山片平朔	加藤喜太郎	淡輪元潛	山片平右衛門	永井教筆	樋口十郎兵衛
山片七兵衛	永井藤四郎	島好篤	山片小右衛門	平井大之進	黑崎忠三郎
山片小三郎	清水彌三郎	堺屋直藏	安治義兵衛	古林正見	瀧山泉次郎

長谷川與兵衛 藤井庄五郎 備前屋權兵衛 藤田與市 平瀬宗十郎 井坂禮太郎

藤田九郎兵衛 平瀬九十郎 草間伊助 池上吉兵衛 富子亮右衛門 岡田周藏

黒田源右衛門 五十川七五郎 高一齋 伊藤政藏 田中方安 井坂六郎右衛門

規矩治三郎 山中善右衛門 二高清兵衛 重松武右衛門 大田晉齋 鴻池治助

森三壽 山中鶴之助 岩永文禎 天海屋善九郎 山本彦三郎 筒井新右衛門

龜山貞助 田邊治右衛門 筒井直之助 中川吉右衛門 天滿屋善兵衛 池上彌太郎

大塚義作 伊塚吉右衛門 田中龜太郎 大塚七兵衛 伊塚藤十郎 大田肥後守

革島兵庫 中井雄右衛門 小笠原孝治 井川復一 筱田重五郎 中井七郎

○碩果門人

碩果ノ高弟ハ左ノ二人ノ外ニ聞キ及ベルモノナシ

並河寒泉 別載

山田孝堂

名綱 字不詳 孝堂其號又號大隱清逸通稱養節晚以孝堂行 明治廿八年卒 年七十九 孝堂先生遺稿二卷アリ 藤澤南岳五十川淵三氏ノ序アリ

五十川氏ノ序ニ曰ク 播磨山田孝堂善詩文宗 世爲小野藩醫 少年專攻儒學 來大阪學于懷德堂書院 後下帷與篠崎小竹 後藤松陰 藤澤東暎

奥野小山諸先輩交 弱冠後專治經濟學 問游四方 訪名士碩儒 兼研究醫術 其足跡殆徧天下 年四十欲行江戶 有所爲 以瀆命遽列醫籍 又兼

儒官藩學大振 明治廢藩後 任飾磨縣學務総宰 功績有可觀 青阮而致仕 住鹿兒川驛 醫藥爲業 大殖家産云云

孝堂遺稿游爭龍灘記云 皆集灘上旗亭更開盛宴杯觴交錯 詩畫管絃以助興人人酣暢 余謂衆曰余幼時寓懷德堂書院 頼山陽翁來訪我先師 翁素嗜

酒 先師不好 飲杯間 暫對活而入室 使余輩二三名侍翁佐興 時談偶及西時耶馬溪之事 翁賞曰云云

右先師トアルハ石窩ヲ指ス也 予先年播州加方門ニアリ 孝堂方相識ル漢 石窩ノコトニ及バ常ニ先生ト稱ス(孝堂晩年妄ヲ審フ 品

行談スベキモノアリ)

逸身君創大成廟于其天王寺別業 蓋懷德書院歸君有也久矣 今用其材以作之云 今茲明治甲午春綱拜謁不堪喜 恭賦一詩以代頌繫之贊云  
高士相謀存舊庠 肅然廟下拜餘光 回頭六十年前事 味爽挾書朝講堂

## ○碩果時代ノ事變

碩果在世ノ天保中ニハ、大阪ニ大鹽騒動アリ、當時灘波ノ谷川氏ニ避難シタリト見エテ、左ノ二首アリ、

天保丁酉二月十九日、賊徒蜂起、避火南坡、宿醫師谷川氏、題主人壁

一朝楚炬赭民舍、荷擔狂奔西又東、何料外平避兵溺、窮猿投入杏林中、

翌日仙坡火燭、挈孥還家、

烈火縱燒南北鴻、幾多豪姓一齊空、府岸墻屋依然在、天護斯文襄祝融、

## ○逸話三件

〔頼山陽ハ、藝州ヨリ母ヲ伴ヒテ大阪ニ來リタル時ハ、常ニ之ヲ懷德堂ニ宿泊セシムルコト、シタレドモ、(梅颯ハ碩果ノ室貞正トハ伯母姪ノ間柄ニテ、交際親密ナリシ故) 自分ニ出入スルコトハ希ナリシガ、一日謁ヲ碩果ニ乞ヒテ、奠陰集ヲ一覽センコトヲ求メタレバ、碩果之ヲ授ケシニ、山陽碩果ノ前ニ在リテ處々ヲ繙讀シ居タルガ、追々ニ坐ヲ崩シ、身ヲ傾ケ、足ヲ出シ、遂ニハ横臥スルニ至リタレバ、嚴格ナル碩果ノ能ク堪フベキニアラザレバ、怫然トシテ坐ヲ起テ、復出デ接セザリキ、

懷德堂ハ諸役御免除地ノ事ナレバ、藝人物貫ナド、凡テ門内ニ入ルヲ得ザル定ナルニ、石窩教授ノ時代ニ、嘗テ虚無僧ガ門内ニ入り込ミタル事アリシニ、石窩内玄關ニ出デテ大喝シ、傲岸ナル虚無僧ヲシテ一言ナカラシメタリ、當時一快事トシテ傳稱セラレタリ、寒泉翁得意ノ談話、石窩ニ虚無僧ヲ咏ジタル詩アリ、其時ノ作ト云フニモアラザルベケレドモ、其轉結ノ如キハ、或ハ當時詰責セシ語意ノ一端、亦此ニアリシナルベシ、其詩、

深簷擁面法衣綮、巢鶴狡狴弄管行、怪爾虚無方外士、却成艷冶俗間聲、

大鹽後素ガ幼少ノ頃懷德堂ニ通學セシコトアリ、一日石窩ヨリ大學ヲ授讀セラレテ、與其有聚斂之臣、寧有盜臣、ノ句ニ至リテ、寧ト云フ字ガ覺エラレザリシカバ、石窩記憶ノ法ヲ授ケテ、下ニ敷ク筵席ムシロノ事ヲ覺エテ居レバヨイト云ヒシニ、翌日來リテ復讀スルニ、ゴザ盜臣アラント讀ミタリト云フ、

○新年自叙ノ作

篋集ニ載スルナラント思ヘド、左ニ抄録ス、

幹枝周匝值新正、天壽存亡感念生、碩果林梢懸不食、同根地下朽無萌、幸免小人剥廬禍、敢期君子得輿榮、窮愁頓與川氷解、先試兔毫聊寫情、  
七表已開春又至、誦絃無恙讀書堂、舌存猶坐新皐比、齒墜唯甘小宰羊、子曰松苗一掬綠、午窓梅影數枝香、遽瑗精修六十化、初心不忘舊時狂、

○碩果終焉詩

前賢鄒魯大經備、閑道儉勤心確如、掩棺薰蕕名可定、稀年碩果得承輿、

○文正先生襄事録抄

天保庚子三月廿四日寅刻終焉、諡曰文正先生、

護喪 古林正見 並河復一

副 笹脇正元 古林正倫

司書 稻垣犀太郎

司貨 古林正見

訃告 行司



廿六日七ツ時届書之覺 月番西町奉行

口上覺

私義老病ニ付養子悴修治江學問所相續爲致、甥并河復一江教授申付候 此段御届申上候 依而如先例御目見相願  
候 以上

子三月廿六日 中井七郎 判

堀伊賀守様御内

松本嘉藤大殿

中泉撰司殿

徳山石見守様御内

平光平左衛門殿

松原彌惣右衛門殿

廿七日早天届書之覺

口上之覺

父七郎義病氣之所今曉死去仕候 此段御届申上候 以上

子三月廿七日 中井修治 判

堀伊賀守様御内

訃告名宛

千草屋理兵衛

山片平右衛門

山片小右衛門

米屋彦右衛門

池上吉兵衛	藤田九郎兵衛	千草屋宗十郎	平野屋七五郎
千草屋市五郎	染屋泉次郎	泉屋禮太郎	天王寺屋忠次郎
田邊屋仁三郎	野村八郎	田邊次右衛門	鴻池霧之助
鴻池伊助	山片七兵衛	尼崎屋市右衛門	尼崎屋七右衛門
播磨屋吉右衛門	田中周安	高一齋	寺村日向
佐々木柳庵	岩永民藏	長瀬七三郎	三井元孺
櫻井雅之丞	千草屋金三郎	岩永文楨	炭屋彦五郎
武田七郎兵衛	泉屋六郎右衛門	加茂越後	廣屋徳左衛門
伊藤立言	高池八左右門	虎屋章五郎	佐渡屋市次郎
高池三郎右衛門	天満屋由太郎	今井官之助	加藤宗三郎
服部眞次郎	岩崎内藏之進	吹田屋彦三郎	内山彦次郎
和田寿八	渡邊十次郎	酒井三平	朝岡盤吾
中村藏太	山本善之助	古屋源之助	河方廣三郎
金谷鎌次郎	渡邊丹後介	寺井龜五郎	平部專右衛門
松田小一郎	淡輪與次郎	河邊多喜衛	野原源之丞
長嶋惣右衛門	小林原右衛門	本多爲助	重松武右衛門
伊勢屋藤四郎	天満屋善九郎	明石屋庄五郎	加島屋十郎兵衛
島屋市之助	西田耕耘	龜山貞次	川北秀六
中村辰八郎	西山豊三郎	備前屋權兵衛	大門主計
有田求馬	山口彦三郎	早野生三	黒田源右衛門

※「廣屋徳右衛門」欄外注「ココニ廣屋徳右衛門トアルハ履軒門人岩崎繩武ノ子又ハ孫ナルベシ 其家は酒屋にて安土町堺筋

邊ナリシヨウニ覺ユ 其家ニハ履軒方象外翁ニ贈リタル稻荷山十二景圖ガアル筈之 今如何」

遠方之分

京都太田肥後守	京都太田伊豆守	京都并河右馬大元	京都三木越後守
京都革島兵庫	京都大村彦太郎	京都波多野良左衛門	
龍野中井常庵	龍野服坂敏仁	龍野柳生長右衛門	龍野藤江濟
龍野天野清藏	龍野井口源左衛門	播州三木程之助	播州按谷左門
播州内山俊齋	播州瀧川耕耘	尼崎柴田小文次	尼崎田中龜太郎
尼崎田中立節	伊丹大塚七兵衛	伊丹伊塚藤十郎	伊丹伊塚吉右衛門
伊丹丸屋源太郎	紀州關掃部四郎	堺田邊築左衛門	堺中村督太郎
御會根村花崎林平	作州中西眞太郎	淀荒井半藏	伊豫町田所左衛門
伊豫戸塚宮門	讃州岩村豹藏	讃州垂水次郎八	久宝寺稻垣見立
八尾安田春益	八尾田中啓太	各知小笠原孝治	阿波坂東連藏
備中丸川九三			

葬列

行列奉行 門内呼出し 木原直藏 門外見繕 平野屋庄兵衛

先拂 作兵衛 塾生 酒井三平 山路恭之助 佐伯福太郎 大門主計  
 波多野良左衛門 鹽井橋藏 西揆一郎 堀昌言 田中立節

墓標

左海吉介

有田求馬

羽織一刀  
大工太右衛門  
興夫六人

興夫六人

棺

森田三善

輿夫六人  
宰領佐兵衛

草履杖兼帶  
吉平

挾箱 持履

修治

若黨 清兵衛  
草履取履

并河復一

若黨 德次郎

小野原元次郎

草嶋兵庫

越達太郎

草履取履

稻垣犀太郎

小笠原孝次

笹服正元

早野生三

堀用庵

并河右馬大元

傘籠

米壳男

此間少々あけ

古林正見

古林正備

岸田利三郎  
古林秀太郎

惣供  
傘籠

米壳男

平野屋庄五郎

山片平右衛門

池上吉兵衛

加藤喜太郎

物供清水敏之助 本供

木原直藏

藤田九郎兵衛

山片小右衛門

黒田源右衛門

太田肥後守

本供  
代谷口德平

清水彌三郎

長嶋惣右兵衛

本供

本供

## 懷徳堂水哉館先哲遺事卷六

### 並河寒泉遺事

#### ○寒泉ノ父母

寒泉ノ父ハ京都ノ人ニシテ、誠輔ト稱ス、並河氏、諱尚誠、字叔明、初信所ト號シ、後又巨川ト號ス、母ハ中井氏、名刀目、竹山ノ季女ニシテ、安永九年庚子十一月ニ生レタリ、誠輔ガ中井氏ヲ娶リタルハ寛政七年十二月ニシテ、誠輔廿六歳、中井氏十六歳ノ時ナリ、

誠輔ハ寛政七年乙卯八月ニ京都ヨリ大坂ニ移リ、大川町ニ居宅ヲ賃僦シテ（戸主天満屋善兵衛）醫ヲ業トセリ、其樓ヲ寒濤樓ト曰フ、蕉園及ビ碩果ノ記アリ、

中井氏二男一女ヲ生ミシガ、享和三年癸亥六月五日ニ卒シタリ、年廿四、名ヲ易ヘテ貞固ト云フ、

誠輔ノ後配ヲ柴田氏ト云フ、諱續、尼崎侯ノ世臣柴田小文治源政寛柴田家老ノ分家高八石取也ノ第三女清四郎妹ニシテ、

中井氏ノ義女ト爲レリ、並河氏ニ嫁セシハ文化元年甲子三月廿八日ナリ、同八年辛未八月十三日卒、享年廿七、名ヲ易ヘテ貞累ヲ曰フ、

同年同月廿一日誠輔京都西洞院丸太町南ノ僦居ニ卒シタリ、享年四十二、名ヲ易ヘテ誠惠ト曰フ、

#### ○寒泉ノ幼時

寒泉ハ寛政九年丁巳六月朔日亥刻ニ生レタリ、中井氏ノ出ナリ、

竹山歿セシ時、寒泉八歳ニシテ竹山ノ葬列ニモ加レリ、襄事録ニ小一郎トアルモノ是ナリ

寒泉ハ竹山ガ惟一ノ外孫ニシテ、幼時其鐘愛ヲ蒙リシコトヲ聞ケリ、竹山ガ其誕生ヲ祝シテ、破魔弓二把ヲ遣リシコトハ、石籥ノ遺稿ニ見ユ、奠陰集ニモアリタルやうニ記憶ス

妹婿巨川育兒、家君貽破魔弓二把、關兒患痘、乃附以一絕、  
吾生歲晚嘆蹉跎、孤矢將驅窮息多、君家見今妖氛惡、先屬阿戎破痘魔、

○寒泉ノ兄弟

寒泉ニハ同母ノ弟妹各一人アリ、弟坦次郎、享和三年癸亥九月十五日夭、妹於葩<sup>ハシ</sup>子寛政十三年辛酉二月三日夭、異母妹一人鴛<sup>ウヰ</sup>子ト云フ、文化三年丙寅二月九日夭、

○寒泉ノ配

寒泉ノ配、中井氏ハ石窩ノ第四女、名ヲ御田<sup>オシタ</sup>ト曰フ、

○寒泉ノ子女

寒泉ニハ二男七女アリ、長男ヲ啓太郎ト曰フ、天保七年五月十三夭、三歳、二男ヲ秀次郎ト曰フ、慶應四年七月十九日卒ス、年二十、長女名ハ於磚、天保元年七月十六日夭、三歳、二女於霜、天保元年十一月朔雙生、中井修二ニ適ク、慶應四年七月廿五日卒ス、歳三十九、三女於朔<sup>サツ</sup>、天保元年十一月朔雙生、百々三郎ニ嫁ス、四女豊菊、天保八年八月三日生、淡輪參郎ニ嫁ス、五女於絢<sup>アヲ</sup>、天保十三年正月廿八日夭、二歳、六女閨菊、初ノ名ハ阿栗<sup>アグリ</sup>、明治廿一年一月廿六日卒ス、年四十六、名ヲ孝閨ト易フ、七女於清、弘化四年三月十二日夭、二歳、第六女閨菊性至孝、弟秀次郎早世シ、姉妹或ハ嫁シ、或ハ夭シテ、父寒泉ヲ扶護スル者ナキヲ以テ自ら矢ヒテ嫁セズ、父ニ侍シテ孝養ヲ盡シタリ、

○名號

寒泉小字ヲ小一郎ト云フ、後復一ト改ム、其諱朋來、又鳳來ニ作ル、初鵠齋ト號ス、後寒泉ト改ム、寒泉ノ號ハ還曆以前二用井タル者ニシテ、其後ハ華甲ノ意并ニ浪華翁ノ義ヲ兼ねテ華翁ト號ス、和歌ナドニハ華の翁ト書シタリ、懷

德堂廢絶後ノ明治十一年比、女婿淡輪參郎ト、櫻宮ニアリ、是ヨリ樺翁ト號ス、是ハ履軒ノ左九羅帖ニさくらニ樺ノ字ヲ當テタル説アルニヨルナリ、人モ亦樺翁先生ト呼ビテ、復寒泉ノ號ヲ冠セズ、因ニ記ス、懷德堂ニテハ、諸生寒泉ヲ敬稱シテ大先生ヲ曰ヒ、晩年ニ及ビテ老先生ト曰ヘリ、

○寒泉ノ少壯時代

寒泉ハ文化十年癸酉九月廿八日、始メテ懷德堂ニ遊ビテ、碩果ニ從學ス、時二年十七、寒泉ハ碩果ノ養子ト爲リテ、中井姓ヲ冒シシコトアリシガ、(年月不詳)其本意ニアラザルニ因リテ、天保三年壬辰二月ニ復姓シテ、攝州東成郡貝脇村ニ住セリ、又攝州木井小路村ニ居リシコトアリ、其後大坂ニ歸リ、和泉町ニ於テ私塾ヲ開キ、又懷德堂ニアリテ座務ヲ攝シタルコトナドモアレドモ、其歲月ヲ詳ニセズ、其和泉町ニ遷リタルトキ、石窩詩アリ、左ノ如シ、

駕鵠齋并君泉坊新居

韜晦三年羽翼成、寒泉精舍賀修營、記所華胥簡易俗、應用荆室合完情、洛閩正宗閑聖道、陸王邪說誤書生、幽禽出谷遷喬木、喜聽嚶々求友聲、

韜晦三年トアルハ貝脇村ナドニ居タル間ノコトニテ、座務ヲ攝シタルハ和泉町開塾ヨリ後ノコト、思ハル、

○寒泉ノ修學期

寒泉ハ修學期ニ於テハ、日夕矻々トシテ倦ムコトヲ知ラザリキ、當時最易ノ研究ニ力ヲ用井タリシガ、過度ノ勉學ノ爲ニ肺勞ヲ患ヒタリト云フ、又學力ノ上達スルニ及ビテ、碩果ガ之ニ資治通鑑ノ研究ヲ命ジタルコトアリシ内モ聞キ及ベリ、以テ其修養ノ一端ヲ見ルベシ、

○懷德堂教授職

寒泉ハ碩果ノ歿後直ニ懷德堂教授職ヲ承ケテ、廢校ノ時ニ至レリ、

○寒泉ノ學風

寒泉ハ博約ノ堂規ヲ遵守シ、碩果ノ學風ヲ奉承セリ、其經ヲ説クニハ、一ニ朱子ノ傳註ニ從ヒテ、別ニ一家言ヲ立テズ、門生中略朱註ニ通ジタル者ニハ、雕題其他朱説ト抵觸セザル諸家ノ説ヲ讀ムコトヲ許セリ、但シ其祖並河天民ノ四端説、性情心解ノ如キハ、千古不磨ノ言トシテ、其尤得意トスル所ナリシ故、孟子ノ講義ニハ必斯等ノ説ヲ引キテ、天民ガ四端ハ更々日常言行ノ間ニ發スト云フ説ヲ訓示シ、常ニ雙手ヲ交指シテ、其狀ヲ形容シタリ、門下生ノ學科ニハ、經書歴史均シク修ムルコトヲ命ジ、其他ニ制限アラザリシガ、唯諸子、殊ニ韓非子ノ如キヲ讀ムコトヲ喜バザリキ、博約ノ訓ハ實學ヲ窮メ、實行ヲ修ムルニアルヲ以テ、徒ラニ文技ニ驚セテ、德行ニ疎ナル者、世外ニ優游シテ、自高シトスル者ノ如キハ、其取ラザル所ナリ、前者ニ對シテハ、賴山陽ヲ始トシテ、近世輕薄ノ文士、素行修マラサル儒流ノ如キハ、皆一言ノ下ニ訶斥セリ、賴山陽ハ其尤喜バザル所ニシテ、門生ニ日本外史、日本政記等ノ書ヲ讀ムコトヲ禁ジタリ、常ニ言フ、山陽ノ名ヲ得タルハ、其學問才能ノ人ニ卓絶シタルガ爲ニアラズ、畢竟其子三樹三郎ガ慷慨憂國ノ士ナルガ故ノミ、孟子ニ所謂、聲聞過于情者、君子恥之、トハ其實ナクシテ虛名ヲ博スルコト、山陽ノ如キヲ云フナリト、後者ニ至リテハ、予嘗テ待坐セル時、語竹林七賢ノ事ニ及ビシニ、寒泉翁ハ彼ラハ生ヲ貪ル無益ノ輩ナリト罵倒セリ、

寒泉時代ノ懷德堂ニテハ、經書ノ講義ハ朱註一方ノ單純ナル解釋ニ過ギズ、輪講其他書生方ノ研究ニモ、諸家ヲ交ヘ舉ゲテ、議論ヲ闘ハスコトヲ許サレズ、謹慎黙從シテ、教ヲ承クルヲ常トセリ、故ニ游學ノ書生、其教養ニ満足セス、競ヒテ藤澤東咳ノ門ニ集マル形勢ト爲リタリ、

○府城講書ノコト

寒泉モ亦前例ニヨリテ城入ヲ命ゼラレ、城代ノ爲ニ經ヲ講ジ、又兩衛尹ノ講筵ニモ臨ミ、久須美佐渡守ニハ最寵願ヲ



受ケタリ、嘗テ衙尹某ノ前ニ論語ヲ講ゼシニ、衙尹茵ヲ用井タレバ、寒泉之ヲ咎メテ、吾ガ講ズル所ハ是レ吾ガ言ニアラズシテ、聖人ノ大訓ナレバ、宜シク禮ヲ守ラルベシトテ、之ヲ去ラシメタリ、

○寒泉ノ詞章

寒泉ノ文章ハ結構精健、用語圖熟ニシテ、一字苟セザルコト、碩果ノ風格ヲ承ケタリ、然レドモ平生作ル所甚多カラズ、寒泉文ニ於テ蘇東坡ニ矜式ス、嘗テ竹山ガ文ヲ授クル法ヲ述ベテ、唐宋諸大家中其好ム所ニ效フベキヲ教ヘテ曰ク、予ハ大蘇ヲ取レリト、  
詩ハ其嗜ム所ニシテ、時ニ隨ヒテ之ヲ出ス、格律豪宕ニシテ爽儻ナリ、毎年歲晚ト新年トニハ、必七律ヲ賦スルコト、定ム、共ニ起句ニ自己ノ年齢ヲ紀ス、即歲晚ニハ、何十何年今且暮、或ハ何十年華今且暮ヲ以テ起シテ、以下ノ諸句ニハ、内外上下ノ人事ヲ録シテ、周年ノ詩史ト爲シ、新年ニハ、何十何年今且至、又ハ何十年華今且至ヲ起句トシテ、新年ノ風物ヲ咏ジ、并ニ以後一年間ヲ祝スル意ヲ叙スルヲ例トセリ、碩果ガ丙申除夕ノ詩ニ、六十六年年已盡ト云フヲ起句トシタルガアレバ、或ハソレ等ヨリ創意セシ者ナランカ、今寒泉ノ詩一二ヲ録ス、

壬寅暮春、鑿官村上使君官邸講後、令賦城中老松、賜韵城字、席上恭賦

老幹森々拂天聳、儼然左壘翠陰情、元和塵斂升平日、十八公榮浪速城

○  
封建治移爲郡縣、諸侯致國諸臣餞、寄語藩士問業者、平生丹心唯一片、

右二首自草、早野氏屏風張交ノ中ニアリ、

烹金化砲備強禦、一擊依然聽廟鐘、十萬億程聲若徹、西夷掩耳訝迦農、

右ハ何カニ出テタルヲ寫シオキタリ、家ニハ予ニ與ヘラレタル數首ノ外獲ル所ナシ、

○寒泉ノ和歌

寒泉又和歌ヲ好ム、日本人ト生レテ和歌ヲ讀マザルハ恥ナリトテ、常ニ我等ニ作歌ヲ勸メタリ、殊ニ老年ニ及ビテハ、日常口ヲ衝キテ句ヲ成ス、別ニ歌集トテモナケレドモ、想フニ其數詩ヨリモ多カルベシ、今家藏ノ短冊ヨリ其一ニテ寫出ス、

この年の上巳は翁が七十三の喜なればよめる

翁も巳の年なめり

華の翁

このとしの彌生のみ日老るみも七十みつわくまん盃

木村翁より悠紀とのの松の餘材の報とてむら雨てふ甘もの耳 尊詠を添て給ひける返しとて

老松のことのはかよの音たかきむら雨さそふすまのなみかは

庚申のとし七月八日に貞正君の小祥忌に

去年のけふことしの秋に返りきてなほも驚く萩の上風

和歌ニハ華の翁 又平 登茂樹ト書セリ 登茂樹は朋來ナリ

○懷德堂ノ詩文會

寒泉時代ノ懷德堂ニハ、詩文會毎月各一回アリ、何レモ社友門下生ノミニテ、竹山時代ノ如ク世上ノ儒家文人ト詩酒徵逐スルガ如キコトハ絶エテナカリキ、文會ハ常ニ寒泉ノ鑒裁スル所ニシテ、席上茶菓ヲ用井、詩會ハ桐園常に會事ニ幹タルヲ以テ、酒肴ヲ出スヲ例トセリ、例會ノ外ニハ毎年園中ノ海棠 即櫻花、懷德堂ニテハ竹山ノ說二本ツキテ櫻ノ字ヲ用井ズ 滿開ノ時ニハ、詩會ヲ催シ、庠園海棠ヲ以テ題ト爲シ、梨花ノ時ニハ庠園梨花ヲ以テ題ト爲シタリ、懷德堂ノ園庭即

己有園二ハ、海棠 楊貴妃櫻 ト梨トノ大木アリ、海棠ノ盛ニハ、對面ノ商家モ店頭ヲ開キテ、花見ノ宴ヲ催シタリ、予ガ幼時、海棠ハ大風ノ爲ニ折ラレタリシガ、梨ハ廢校後マデモ存シタリ、又夏時月夜ニハ臨時ニ詩會ヲ催スコトモアリタリ、

○歷代山陵ノ踏査

寒泉ハ大和其他近畿ニ散在スル歷代山陵ノ隱晦シテ、往々荒廢榛蕪スルモノアルヲ慨シテ、何年ノ頃ヨリナリシカ、山陵調査ノ事ヲ思ヒ立チ、同志門生等ヲ率井テ、畿内ノ諸陵ヲ踏査シ、悉ク之ヲ圖シテ、其窮探セシ所ヲ附記セリ、圖并ニ附記ハ並河氏ニアリ、

○魯艦入港ニ付應接史官ヲ命ゼラレシコト

嘉永中、魯西亞ノ軍艦ガ天保山沖ニ突入セシ時、寒泉ハ先考桐園ト共ニ應接史官ヲ命ゼラレ、一時懷德堂ノ授業ヲ休ミテ日々出張シ、應接ノ事アル時ハ、軍艦ニ舟ヲ進メ、漢文ヲ以テ應接セシガ、事罷ミテ、官ヨリ白銀七錠ヲ賜ヒテ、其功ヲ賞セラレタリ、是ニ於テ寒泉漢文ヲ以テ其顛末ヲ録シテ、拜恩志喜ト題シタリ、右ノ白銀七錠ノ目錄ハ臺ノマ、ニ存留シ、年毎ニ一回之ヲ出シテ當時ヲ記念シタリ、

○寒泉ノ著書

寒泉ノ著書ニ辨怪一卷アリ、盖寒泉妖怪變化ヲ信セズ、世上怪談ニ迷ハサル、者ノ惑ヲ解カント欲シテ、凡ソ世上ニ傳ハル所ノ妖怪變化幽靈狐憑等ノ事跡ヲ舉ゲテ、一々辨解シテ、復疑念ヲ挿ム餘地ナカラシメタリ、卷尾ニハ奥野小山ト妖怪ニ付キテ論ゼシ諸ヲ載セタリ、著書ノ目ハ左ノ如シ、

辨怪一卷

拜恩志喜一冊

干支稿

右八年々干支ヲ逐ヒテ集録セシ詩文稿ナリ、冊數今詳ナラズ、

文通 卷數不詳

寒泉ノ編次修緝セシ者ハ左ノ如シ、

奠陰集

壘集

箠集

幽人先生反故録

天潢餘滴 天皇ノ宸翰ナドヲ集メタル者

文奎餘光 名家ノ手簡ヲ集メタル者

慷慨集 或ハ憂國志士慷慨集ト題シタルヤウニモ覺ユ確ニハ記憶セズ、維新志士ノ詩歌ヲ集メタル者ナリ

疊字集

居諸録 寒泉ノ日記（漢文）

何年頃ヨリ筆ヲ起コシシカ詳ナラズ、死ニ至ルマテ一日モ怠リシコトナシ、病氣等ニテ記録スルヲ行ザル時ハ、娘閨菊ニ口授シテ筆記セシメタリ、用紙ハ東脩月謝ノ包紙ヲ裏ガヘシニシテ位級ニ爲シ、毎年二冊、正月七月ニ卷ヲ改ム、居諸録トハ、詩邨風ノ日居月諸照臨下土ノ句ニ取リタリ、

○寒泉ガ赤穂義士ニ對スル追念

寒泉ハ平生深ク元祿四十七士ノ忠烈ヲ追慕シ、座右ノ書篋ニハ、義人録ヲ始メ、其他ノ實録ヲ滿載シ、時ニ隨ヒテ愛讀シ、又大石良雄ノ呼子笛、龕燈、手燭、小刀、大高忠雄ノ木刀杯、義士遺物ノ模造品ヲ藏スルコト多ク、良雄ノ君子諭於義ノ一行物、又一力樓ノ天井ニ書シタリト云フ逗留不遇ニ夜者也ノ刻板ヲ藏シ、希望者ニハ其拓本ヲ頒與セリ、講堂ニ出ヅル時ハ、必右ノ大高忠雄ガ木刀、人斬れば己も死なねばなりませんト題シタル者ノ模造品ヲ佩ブルヲ常トセリ、

○寒泉ノ志操

寒泉慷慨義烈ノ氣象アリ、義氣和魂ハ平生口ニ絶タズ、其詠ズル所ノ和歌ニ曰ク、

兼ねても誓ける一筋をふみな違そ大和たましひ

かしら打うちかへすてに泣をやむおさな心も大和魂

幼子の早く仇しる心根は吾日本に生ひ出るたね

吾國の大和魂もろこしの我の一字とかかねてしるへし

幕末勤王攘夷ノ論ノ天下ニ喧傳セラレシ頃ハ、志士活躍ノ報ニ接スル毎ニ、意氣軒昂、感奮措ク能ハザル狀アリ、當時志士ノ詩歌ハ、聞クニ隨ヒテ纂セリ、慷慨集是ナリ、其外人ヲ嫌忌スルコト蛇蝎ノ如ク、斷髮洋服ハ言フニ及バズ、凡百ノ器物食品等、西洋ノ臭味アル者ハ、峻拒シテ容レズ、洋装シテ謁ヲ請フ者ハ面會ヲ謝絶セリ、平生人ト語ル時ハ、大聲ヲ以テ洋夷ヲ罵倒スルヲ一快事ト爲シタリ、詩アリ、以テ其志氣ヲ窺フベシ、

聖道藁蕪茅塞天、如崩厥角萬人顛、後凋誰是峯松栢、霜雪林中獨卓然、

○寒泉ガ時世ニ對スル感想

寒泉嘗テ予ニ語リテ、徳川幕府ノ衰滅ニ歸シタルハ自ら招致セシ所ナリト言ヒシコトアレバ、時世ノ推移セシハ已ムヲ得ザル運命ナリト思ヒ居タルニ相違ナカルベシト雖、明治政府ノ、舊例ヲ破壊シテ、一ニ西洋ニ模倣スルガ如キ方針ヲ取リタルヲ喜バズシテ、百事百物、悉ク其舊思想ト相容レズ、故ニ新政府ノ爲ス所ハ、何事ニ拘ラズ、「ラツチモ無キ事ヲスル」ト云ヒテ、冷眼輕侮スルヲ常トセリ、外見ニハ明治ノ正朔ヲ奉ズルコト丈ガ不思議ニ思ハル、感アリキ、予嘗テ此ノ事ニ言及シタルニ、寒泉答ヘテ、年號バカリハ歲月ノ表識ト爲ルベキ者故、將來ニ於テ錯誤ヲ生ズル恐アレバ、用井ザルヲ得ズ、ト言ヘリ、サレバ政府ニ反抗スル者アルヲ聞クトキハ得意ノ狀アリ、十年戰役ノ時ノ

如キハ、老西郷ノ壯舉ヲ喜ビテ、其捷報ヲ聞クヲ樂ト爲セリ、

○寒泉ノ風貌

寒泉ハ清癯堅實ニシテ、身度普通ナリ、頭部ハ稍小ナル方ニシテ、秀眉彎曲垂下シテ、長壽ノ相ヲ具フ、晩年髮落チテ、後頭部ニ數莖ヲ存スルノミナリシガ、敢テ剪リ去ルコトヲ爲サズ、又放散スルヲ好マズ、女閨菊ヲシテ寸許ノ小髻ヲ結バシメ、志氣舊ニ仍リテ時流ヲ逐ハザルヲ示セリ、寒泉畫像ヲ作ルコトヲ好マズ、無論寫眞ヲ取ル筈モナケレバ、眞影ノ存スルモノナシ、

○寒泉ノ性格

寒泉ノ性格ハ、端嚴ニシテ亦寛裕ナリ、政治上ニモ教育上ニモ、寛嚴宜シキヲ得ザレバ人ヲ御シ難シトハ、其持論トスル所ナレバ、其資質モ亦自ラ然ル所アリキ、

○寒泉ノ講釋アリ

寒泉音吐洪亮ニシテ、口辯明快ナリ、懷德堂ノ講會ニハ、聲一町以外ニ達シタリ、其最得意トスル所ハ逸史ノ講義ナリキ、

○寒泉ノ嗜好

寒泉謠曲ヲ好ミ、亦狂言ヲ愛ス、晩年無聊ノ際ニハ狂言ノ書ヲ繙キ、家人ニモ讀ミ聞カスルコトヲ樂トシタリ、寒泉酒ヲ嗜マズ、尤茶ヲ愛ス、煎茶ハ常ニ茶具ヲ座右ニ備ヘテ、其時ヲ限ラズ、末茶ハ毎日午後一睡ノ後、女閨菊ニ點ゼシムルヲ例トセリ、

○寒泉ノ衛生

寒泉ハ少時肺患ニ罹リタルコトアリシニモ拘ラズ、善ク壽ヲ保チテ八十有三ニ至レリ、是レ平生飲酒セズ、過食セズシテ、攝養極メテ嚴ナリシニ由ルナリ、

○寒泉ノ書法

寒泉ノ書ハ遒勁雄拔、之ヲ竹山ニ得タリ、把筆ハ單鈎ニシテ、筆ハ用節ヲ好ミ、又竹筆ヲ愛用セリ、羊毫ノ如キハ一切之ヲ執ラズ、紙ハ熟帑ヲ用井タリ、熟帑ハ墨汁ヲ吸収セズ、滯留シテ乾クコト遅シ、故ニ大幅ニ向ヒテ筆ヲ下ス時ハ、立チナガラ、或ハ側面ヨリ之ヲ書シタリ、筆勢ノ餘力、往々掠礫ニ端ニ進リテ小點ヲ爲ス、諸生間稱シテ風鈴附ノ體ト曰ヘリ、亦草隸ニ體ヲ善クセリ、楷書ハ顔法ナリ、

○寒泉ノ交友

寒泉ノ時代ニモ、懷德堂ハ尚碩果ノ遺風ヲ承ケテ、閉鎖ノ姿ヲ持續シタル故、其交友スル所モ亦重ニ同社舊交ノ者ナリシガ、其他ニ於テハ、仙臺藩ノ清水中洲、津山藩ノ儒員中西半仙、伏見ノ羽倉可停等ニ三人ノ人ト、尤親交アリキ、中洲ガ刻通語序ハ、屢校ヲ易ヘテ、寒泉ニ嚴密ナル評定ヲ請ヒタリ、

○寒泉門人

寒泉ノ門弟中學才優秀ナル者ヲ擧グレバ山村禹之助藤戸寛齋（今木積一路）共ニ助教ヲ務ム岡本隆吉（後和ト改ム）年梅寛之等ニテモアルベシサレド學問ヲ以テ一家ヲ成シタルホドノ者ハアラズ

○懷德堂遺風ノ擁護

寒泉ガ懷德堂先哲ニ對スル熱誠ハ頗深切ナル者ニテ、吾ガ先考桐園ガ和泉町ノ中井ヨリ來リテ、宗家ヲ繼グコト、ナリシ故、兩者ニ對スル權衡ヲ失ハンコトヲ恐レテ、常ニ教戒スル所アリ、嘗テ予ガ界浦ニ之クヲ饒シタル擬風、茅渚

ノ第四五章ニ左ノ訓辭アリ、

奠陰水哉、學德一源、懷德堂學、花萼同根、爾父水哉、繼宗奠陰、擔當兩賢、爾勿一偏、爲博爲約、鄒魯管鑰、懷德堂規、以爲學的、鑄鎔斡旋、維汝才幹、數學之半、勉哉菟孫、

○

示菟孫

懷德諸堂先哲恩、學規勿忘幾來孫、存心聖訓同而異、敢趁遷新變舊痕、

八十一外祖樺翁

寒泉又予ヲ戒メテ曰ク、竹山履軒二先生ノ事ニ付キテハ、世人往々其長短ヲ舉ゲテ、兎角ノ批評ヲ下セドモ、子孫タル者ハ慎ミテ兩者ヲ臧否スベカラズト、

○懷德堂廢絶當時ノ寒泉

懷德堂ノ廢絶ハ、寒泉ノ憤慨痛惜シテ已ム能ハザル所ニテハアリタレドモ、頽勢ノ支持スベカラザル、亦如何トモスベキナケレバ、明治二年冬十二月、中井一家ト共ニ、校門ヲ閉シテ、城北本庄村ニ遷リシガ、校ヲ出ヅル時、詩歌各一首ヲ門扉ニ貼付シテ去レリ、左ノ如シ、

堂構于今百卅年、皐比狗續尚綿々、豈圖王化崇文世、席捲講帷村舍遷、  
百餘り四十四年のふみの宿けふをかきりと見かへりていつ

後何人カ之ヲ取り去リタリト云フ、



## ○懷德堂閉鎖後ノ寒泉

懷德堂閉鎖ノ際、中井一家ト共ニ本庄村ニ移リシ後ハ、従前ノ門生モ追々來集シタレバ、尚懷德堂ノ額ヲ掲ゲテ、桐園ト共ニ教授ヲ繼續セシガ、固リ衰殘ノ微喘ニシテ、前途回復ノ希望モナケレバ、翌三年三月ヨリ南江戸堀ナル其女婿淡輪參郎ノ控家ニ移ルコト、ナリ、淡輪氏保護ノ下ニアリテ、從游ノ子弟ニ教授セリ、之ヲ燕渠學舎ト稱ス、六年三月廿五日ヨリ中ノ島常安橋北詰ナル舊柳河藩邸ノ淡輪家ニ引キ取ラレテ同居シ、七年十一月、淡輪氏ト偕ニ櫻宮ニ居ヲトシ、帷ヲ下シテ教授セシガ、十一年一月廿一日、復江戸堀ノ舊居ニ還リテ、世ヲ終フルニ至レリ、寒泉歿シテ後、女閨菊ハ尚淡輪氏ト同居シ、岡本和ノ紹介ニテ造幣局ノ女學校ニ職ヲ奉ゼシコトモアリシガ、卒シテ後、並河隼次郎ノ女ヲ相續者ト爲シタレドモ、尚幼ナリシ故、一タビ家ヲ閉ヂテ、遺物ヲ宗家ニ保管スルコト、ナリタリ、

## ○寒濤樓

懷德堂ニ於テハ、教授職、常ニ樓上ニ居住スルヲ例トシタレバ、寒泉翁燕居ノ室モ亦樓上ニアリ、元懷德堂ノ樓ハ之ヲ廓然樓ト稱シ、萬年書廓然ニ大字ノ扁額モアリシガ、寒泉時代ニハ其稱ヲ用井ズシテ、其父巨川ノ寒濤樓ノ名稱ヲ繼ギ、南軒ニ文衡山集字ノ寒濤二字ノ刻額ヲ掲ゲタリ、廢校後ハ、其居ル所ヲ寒濤廬ト稱ヘタリ、

## ○寒泉ノ墓石

寒泉ノ墓石ハ、題シテ樺翁並河先生之墓ト曰フ、羽倉可亭ノ書ナリ、二人在世ノ時、嘗テ相約シテ曰ク、後ニ存スル者ハ先ニ死セシ者ノ墓ニ題スベシト、寒泉先ダチテ歿セリ、故ニ可亭約ノ如ク之ヲ書セリ、

## ○寒泉ノ男蟻街

蟻街小字ヲ阿<sup>ア</sup>二郎ト曰ヒ、冠シテ秀次郎ト改ム、諱ハ尚一、字ハ黙甫、蟻街ト號セシハ、尼ヶ崎町ニ生レシヲ以テナリ、蟻街ハ寒泉ノ第二子ナリ、寒泉ニ男七女アリ、長男育セズ、故ニ之ヲ鍾愛セシコト、竹山ノ蕉園ニ於ケルガ如シ、蟻街明敏ニシテ學ヲ好ミ、幼ヨリ善ク文ヲ屬ス、已ニ長ジテ學寮ニ在リ、在塾ノ諸生ト案ヲ列子テ書ヲ讀ム、終日端

坐シテ欵側スルコトナク、專念學ニ耽リテ、嘗テ笑語スルヲ聞カズ、慶應四年七月十九日病ミテ卒ス、年甫メテ二十、名ヲ易ヘテ孝穎ト曰ク、文詩ノ遺稿篋ニ滿チテ、未収集セズ、吾ガ家其長篇一幅ヲ藏ス、此レ其絶筆ナルベシ、書七亦父寒泉ノ風格ヲ備フ、蟹街ハ日々講堂ニ躋リテ、助教ヲ務メタリ、

咏虞美人艸、追賽曾子固韻

紅抹流霞白綴雪、溥露會來淚和血、虞兮虞兮奈若何、朝開妖豔暮賁滅、托春霸種後花王、請看強楚一朝亡、鐘愛雖不如前盛、嬌態終不改舊粧、其奈細腰易摧倒、野逕常追夏候老、英雄心事欲掩難、英魂尚茲依芳艸、九腸化爲幾多枝、新翠嫩如嚙蛾眉、狂風驚訝楚歌起、應懷當年騅蹶時、舊粧雖新墳稍古、魂飛鳥江原上土、鴻門劍舞堪遺憶、花影婆娑月前舞、

蟹街□□

懷德堂水哉館先哲遺事卷七

桐園遺事

○名號

桐園小字ヲ紓太郎ト曰フ、碩果ガ袖園ニ代リテ作リタル臍帶記アリ、左ノ如シ、

中井紓太郎臍帶記

文政癸未九月望、袖園主人始生男子、越六日、既翦髮、家人請名、主人欣然撫其首曰、先子嘗言、胡瓜之始成、人貴之、以充珍羞、其價甚貴、漸長漸賤、及老且熟、呼爲赤臍、唾而不顧、鱈魚之子曰紓、夏秋之交、隨長味甘美、莫不貴焉、至季冬、老而益美、呼曰寒鱈、其賞尤深矣、世之以才子神童稱、所謂小而了々、大未必奇者、是胡瓜少時之賞

耳、非鯨之老而益美、不足貴也、遂名之曰鯨太郎、鯨乎鯨乎、我冀女爲寒鯨矣、  
 已ニ冠シテ修二（又修治ニ作ル）ト稱ス、諱及泉、字公混、居ヲ本庄村ニ移スニ及ビ、北郭野人ト號ス、晩年ハ又汲  
 所ト號ス、

○桐園ノ宗家相續

桐園ハ履軒ノ孫ニシテ袖園ノ子ナリ、母ハ岸田氏、名ハ栢ツグ、他ニ男子ナケレバ和泉町中井ノ後ヲ承クベカリシナレド  
 モ、今橋ノ中井ニハ碩果一男天折シテ繼嗣ナク、一時並河寒泉ヲ養子ト定メタレドモ、幾クモナクシテ舊姓ニ復シタ  
 レバ、天保三年正月桐園十歳ノ時ヲ泉坊ヨリ貰ヒ受ケテ繼嗣ト爲シ、袖園ノ歿後ニハ和泉町中井ヲ以テ宗家ニ合祀ス  
 ルコト、ナレリ、

鯨太郎宗家督證文二通

右懷徳堂記録拾遺ニ載ス

○桐園ノ管校職

天保十一年三月二十四日、碩果死去ノ後、桐園十八歳ニシテ學校預リト爲リテ、明治二年廢校ノ時ニ至レリ、

○桐園ノ風貌

桐園ハ身度長大ナラズト雖、骨節强健、筋肉堅實ニシテ、履軒ノ體格ヲ具フ、家ニ寫眞アリ、平生ト相似ザル所アレ  
 ドモ、亦其風貌ヲ髣髴スルニ足ルナリ、

○桐園ノ性格

桐園資性温厚ニシテ圭角ナク、善ク人ト交ル、唯門下生及ビ子女ニ對シテハ、嚴格ニシテ假借スルコトナシ、我ガ幼

時、常二父ノ前ニ讀書ヲ授ケラルルコトヲ畏レ、好ミテ外祖寒泉ニ就キタリ、寒泉ハ兒孫ニ對シテ温容アリキ、

○懷德堂ノ授業

懷德堂授業ノ狀ハ、午前二ハ、寒泉講堂ノ北偏、西夾ノ前ニ座ヲ定メテ、講義ヲ爲シ、或ハ質問ヲ聽キ、桐園ハ南偏中央ノ柱下ニ坐シテ、素讀ヲ授ク、寒泉ノ前ニ當リタル北偏ノ中央ニ助教ノ座アリ、午後二ハ寒泉西夾ニ在リテ、桐園ハ講堂ノ南房ナル鞘ノ間ノ西偏ニ移リテ、各質問ヲ聽クヲ例トセリ、

○桐園ノ書齋

桐園ノ書齋ハ講堂ノ北方、中齋一室ヲ隔テタル處ニアリ、稱シテ文質ト曰フ、想フニ萬年ガ文質ニ大字ノ掛軸アリタレバ、竹山ノ頃ニハ此ノ質ノ楣上ニ扁セシコトニテモアリテ、斯ク稱フルニヤ、或ハ文室カ、今詳ニ知ルヲ得ズ、桐園ノ時ニハ、南ニ蕉園ガ稽古ノ額、北ニ竹山ガ母不敬ノ額ヲ掲ゲタリ、

○桐園ノ愛讀書

桐園家學ヲ寒泉ニ承ケタリ、自ラ經說ヲ立ツル者ナシ、平生左傳ヲ讀ムニ尤林註ヲ愛讀セリ、

○桐園ノ詞章

桐園ハ懷德堂ノ末路多事ノ時ニ管校職ヲ承ケタリ、故ニ平生多クハ俗務ニ鞅掌シテ、詩文ヲ樂シム閑ヲ得ズ、其篇什極メテ少シ、今乃存スル者僅カニ數篇アルノミ、其一二

哭文厚清水君

翁耶如父亦如師、庠事幹旋芳意滋、冥境勿憂無好友、群賢香案與君期、

送伯峰清水君之仙臺

匹馬嘶風征袖纒、岐蘓棧道指東藩、不如歸去牽衣恨、吳海離憂托蜀魂、

餘寒月

一片水輝寒色明、春風二月夜三更、半窓料峭還休厭、模取梅花疎影清、

○桐園ノ書

桐園字ヲ作ルヲ好ム、校務蝟集ノ間ニ在リテモ、曾テ習字ヲ廢セズ、智永四體千字文、草書韻會、草書澗海ヲ臨セシコトアルヲ知レリ、行書ハ履軒ヨリ得タリ、

○桐園射ヲ好ム

桐園平生射術ヲ好ミ、舊幕吏宮寺某氏ニ學ビテ練習倦ムコトナシ、講堂ノ椽側ニ卷藁ヲ設ケテ、毎日晚餐後ニ射ヲ習ヒ、休日ナドニハ堂背ノ狹長ナル間地ニ塚ヲ設ケテ發射スルコト、爲セリ、桐園藏書中ニ、日置假名目錄、武經射學正宗等アリタリ、

○懷德堂ノ書庫

碩果ノ時代ニハ、盛ニ和漢ノ圖籍ヲ収集シタレドモ、未書庫ヲ設クルニ及バザリシガ、桐園ニ至リテ舊土藏ノ隣地ニ書庫一基ヲ建設セリ、

○懷德堂掉尾ノ事業

桐園懷德堂ノ規模ヲ恢弘シ、先業ヲ隆興セント欲シテ、汎ク同志ヲ謀リ、其屋敷地ヲ廣メテ東心齋橋筋ニ至リ、竹山ノ寛政再建ノ時ニハ、聖廟ノ建設ヲモ圖畫シテ成ラザリシガ、此ヲモ建造シテ、先志ヲ繼ガント欲シ、圖面已ニ成リ、協議モ隨分進行シタル由ニ聞キ及ビタルニ、幾クモナクシテ海内擾亂、國政推移スルニ及ビタレバ、遂ニ畫餅ニ歸ス

ルコト、ナリタリ、當時將軍家茂在府ノ便宜ヲ以テ、出願ノ手續ニ及ビタル者ナルベシト思ヘド、或ハ亦同志中他ニ  
 建畫スル所アリシ者カ、將何ノ動機アリテ此ノ議ヲ發スルニ至リカ、記録存セズシテ詳ニスルヲ得ズ、尤右繪圖 或  
 ハ記録モアリシナルベシ、ハ桐園歿後、懷德堂舊藏ノ十干書笥中ノ丙函ニ在リシガ、予ノ不在中、右ノ内六個ヲ騙取セラレ  
 シコトアリシニ因リ、今家ニ存セズ、

○嘉永中ノ事變

嘉永七年九月十八日、魯西亞ノ軍艦ノ天保山沖ニ突入シテ阪府騷擾シ、警備頗嚴ナリシ時、桐園教授寒泉ト官命ヲ奉  
 ジテ、文筆應接ノ職ニ當リシガ、事罷ミテ白銀五枚ヲ賜ハリタリ、寒泉ノ拜恩志喜ニ詳ナリ、

○書院外ノ公務

文久中將軍家茂在府ノ時、命ヲ奉ジテ阪城ノ儒員ト爲リタリ、

○逸史ノ上梓

逸史ハ從來寫本ヲ以テ行ハレ、門下來游ノ士、皆一々手寫シタレドモ、要求者益多クシテ、不便少カラザルヲ以テ、  
 桐園ハ寒泉ト謀リテ上梓スルコト、ナリ、雕刻印行ノ諸件ハ專ラ書林加賀屋善藏、河内屋吉兵衛ニ擔當セシメタリ、  
 板下ハ明朝風ヲ善クスル者ヲ擇ビ、稿本ノ校讎ハ寒泉其勞ニ任ジタリシガ、幾次カ校ヲ易ヘシメテ、用意頗周到ナリ  
 シカドモ、魯魚ノ誤續出シテ、其困難一通リナラザリシ由、寒泉ノ談話ニ聞キ居タリ、逸史ノ扉ハ初書家三平ニ屬シ  
 テ書セシメタレドモ、懷德堂風ナラ子バ、卓俗ニシテ意ニ充タザル所アリシ故、刻已ニ成リタルニ拘ラズ、之ヲ廢シ  
 テ竹山原本ノ自筆ヨリ雙鈎ヲ取りテ改刻スルコト、ナリタリ、三平ノ刻字ハ尚家ニ存セリ、  
 逸史ノ出版ノ頃坊間出版ノ印刷物ニ寒泉翁ヲ評シテ「逸史が板になるさうぢゃお手柄く」ナドアルヲ一見シタルコ  
 トアリ、

○書林ヨリ納メタル一札

一 御藏板逸史彫刻御企之砌 私共兩人乍不及愚配仕候ニ付 此度板賃擦兩人へ引請被仰付千萬難有仕合 依之逸史壹部ニ付板賃銀拾五匁ニ御定摺立部數之儀者精々出精仕平均間ニ弍拾部宛摺立候 板賃銀上納之儀ハ節季毎々相納可申候 然上者發行廣相成候ニ付而者書林仲間表作御通取ニ付御支配致候 規模ヲ以板賃様之儀ハ兩人限ニ願上候所御承知被成下候段難有奉存候爲後日一札依而如件

但し此度仲間入用并に株式譯立入用共逸史廿部之板賃を以取扱仕候事

安政五戊午八月 加賀屋善藏○

河内屋吉兵衛○

中井様

○逸史獻上ノ事

逸史寫本ハ竹山在世中將軍家ニ獻上セシガ、上梓印行ニ付キテハ文久三年五月九日西奉行所ヨリ修ニヲ召シテ當時在城ノ將軍家ヨリノ内意ヲ傳へ、出板ノ逸史壹部獻上致スベキ旨申渡サレタレバ、並河復一中井修二兩名ヲ以テ獻上手續ニ及ビタルニ、其御褒美トシテ白銀七枚ヲ下賜セラレタリ、追而獻ジ殘ノ逸史ヲ城代、町奉行、玉造京橋兩御定番等へモ進呈シタルニ、夫々挨拶アリテ、菓子料五百疋ツ、位ヲ贈ラレタリ、

事畢リテ後、同志中ニ通知シタル書狀、

尚以獻上之名前ハ復一修治連名ニ而可指出と被仰渡候段、別而難有候

向暑之節御座候處 各様愈御佳勝被來御座珍重奉賀候 然者去ル九日七ツ時 從西御奉行所修治急召ニ而當時御在城も給有候 從公方様藏板逸史壹部獻上可仕様とも御付候趣被仰渡不存寄難有仕合 殊ニ此度ハ獻上物一切御所と被仰出候處 猶更不一方難有奉存候 右逸史之義ハ寛政末年寫本獻上仕置 猶又此度再ひ獻上仕候 杯先代ハ不及申 永々當學校之

規模と一同感銘仕候 此段御吹聴申上度如此御座候 以上

五月十一日

中井修治

並河復一

古林正倫様

淡輪三郎様

平瀬市郎兵衛様

笹服正元様

高池三郎兵衛様

うつ本舊掛方壹丁目北隅天満屋

水野善九郎様

淡路町淀屋橋筋東へ入北隅泉屋

井坂禮太郎様

忍屋處

渡邊丹後守様

鳴好節様

友古町追分少し北へ入東側  
中村辰八郎様

御同心

市村住之助様

乍御面倒御順達頼入候

○脇坂家借書事件

龍野侯脇坂淡路守心ヲ文學ニ潛メ、懷德堂諸先哲ヲ景仰セラル、コト淺カラズ、藩ノ侍醫タル中井常菴ヨリ書院ニ藏



スル所ノ竹山履軒ノ遺書ノ事ヲ聞キ、常菴ヲ介シテ借覽ヲ求メタレバ、篋陰集、詩律兆、四茅議、七經雕題、小學雕題等ヲ出シテ覽ニ供セシニ、弘化二年三月廿九日其謝禮トシテ更紗壹反、鹽雉子壹羽ヲ賜ハリ、留守居平部專左衛門ヲ以テ傳達セラレタレバ、四月朔日文惠文清兩家君ニ獻奠シテ其靈ニ奉告シタリ、其文左ノ如シ、但シ並河寒泉ノ代作ナリ、

維弘化二年四月朔 不肖孫及泉薰盥百拜、謹奠

龍野侯藤公所賜花布一段疏視一羽、告 皇祖考文惠文清兩夫子之靈、及泉仄聞、

龍野見侯自潛邸日、篤向學、尤歸嚮心于 兩夫子、以囊者吾同祖常菴氏 忝侍醫之命也、屢在

公左右、示譚常騰口於 兩夫子、延及其著書、乃託常菴氏、傳乞假辟命、始焉而篋陰集、中焉而詩律兆、終焉而茅議、茅議之命至日、唯錄郵刑均田二篇耳、及泉弱冠、未更事、庠中之事、事無大小、一咨決於並教授、以行、乃謀之、則曰四茅議之未遍布於世、

公安知之、宜整篇次以奉致焉、乃從之、他日常菴氏有書、云、公頃命賤臣某曰、孤每乞中家伯叔遺書、送致未嘗曠日、無恹奮之意、我太嘉焉、欲報與以答其意、汝其傳之乎、其喜慎交至、以爲優命之謀及賤臣、不任屏營之至、然思而不言、非忠也、乃曰、今日之賜、傳自賤臣、則私賜耳、傳自外廷、則公賜矣、恩榮之隱見、果如何哉、敢布腹心、乃賜納受、不日應有坂邸處守傳命、薰沐以俟、以昨廿九日、果傳命賜之也、及泉不勝感銘、即日如邸拜賜、嗚呼、及泉乳臭承乏管校、校中所藏、兩夫子遺著、累々成丘、日夕重護、不啻頻年、雖有秋陽展晒之事也、猶不免蠹害鼠傷、幸 忝此霽命、屢開厨戶少忘蠹害、夫滿紙之言、雖出於 兩夫子之學之富贍、猶此草茅之危言耳、今也一垂 公侯之覽、則安知不異日政迹乎、兩夫子、其將舉眉於九原矣、何榮如之、況今日之厚賜乎、況常菴氏之念祖以竭力乎、抑優賜之照弊屋、兩夫子學力之所致、固不俟言、常菴氏之力爲之媒也與、及泉豈敢當之哉、及泉豈敢當之哉、敢告尚饗、

弘化甲辰四月之吉

不肖孫中井及泉百拜謹告

弘化元年十二月、脇坂淡路守京都所司代ト爲ルベキ命ヲ蒙ラレタレバ、翌二年四月廿一日龍野發駕、廿三日大坂二着

シ、網嶋鮒宇ニ休憩セラル、コトトナリタルニ付、其際修ニ御禮ニ出デ、朱子墨本ヲ献上シタルニ、其挨拶トシテ金貳百疋ヲ賜ハリタリ、

○龍野藩御館入ノ事

龍野脇坂家ハ舊主君ノ事ナレバ、髻菴以來中井家ノ相續人ハ、代々御館入仰付ケラレ、年始暑寒ニハ御機嫌伺トシテ參邸スルヲ例トシタレバ、桐園相續ノ後モ同様ニ願ヒ出デタルニ、許可ヲ得タレバ、君侯三月九日（年不詳）京着ニ付、十五日御歎旁出頭、御上屋敷ニ於テ御目見ヲ遂ゲタリ、

○懷德堂永續助成金

安政六年同志中ヨリ懷德堂永續助成ノ爲、五ヶ年間無利息ニテ金子ヲ用立テラレタルコトアリ、其一札如左、

覺

一 銀四拾五貫目也

内 三拾貫目 宗十郎より

拾五貫目 市郎兵衛より

右者爲懷德堂御永續御助成 當末年より來る亥年迄 五ヶ年之間 無利足ニ而御用立申処實正也 然る上者 右の銀直ニ此方へ慥相預リ 月五朱之利足 年限中積置 滿年之上 元銀御返済可被下御約定也 尤利積銀之儀者 其節御相談次第ニ取年に致候 爲後日預リ議定證文 仍而如件

安政六己未年正月 平瀬市郎兵衛○

並河復一殿

中井修治殿

覺

一 銀貳拾貫目也

右之爲懷德堂御永續御助成 當未年より來ル亥年迄 五ヶ年之間 無利足ニ而御用立申所實正也 然る上者 右の銀

直ニ當方江榷相預 年五朱之利足ニ相立 年限滿年之上 元銀御返濟可被下御約定也 右願議定證文 依而如件

安政六己未年四月 白山彦五郎○

並河復一殿

中井修治殿

覺

一 銀二拾貫目

右之爲懷德堂永續御助成時節柄格別之御配慮ヲ以 當未年より來ル亥年迄 五ヶ年之間 無利足ニ而借用仕 右之銀

左様其元殿へ御預り之上 年五朱之利足 年限中毎十一月中御渡し被來下候 御約定所次第御坐候 滿年之上 元銀

之義理ハ左様其元殿へ御引取可成下候 右借用規定證文 仍而如件

安政六己未年四月 並河復一○

中井修二○

白山彦五郎殿

○山階宮晃親王御臨校之事

此ノ項ハ別紙懷舊ノ記ニ詳ナリ故ニ畧ス、

○懷德堂末路ノ窮迫

懷德堂ノ財政ハ、碩果ガ儉勤蓄積ノ後ヲ承ケ、同志中ノ助力モ少カラザリシ故、弘化嘉永ノ頃マデハ、サシテ窮迫ト

云フニモアラザレバ、文庫ノ建立、逸史ノ出版等ノ事モデキタレドモ、安政ニ至リテハ、財政漸ク不如意ニナリユキ  
タレバ、前條ノ如ク助成金ノ約定モ成立セシガ、文久以後ニ至リテハ、世間漸ク多事、物價益騰リ、校運日々ニ傾キ  
テ、用度給セズ、廣屋ヲ扣ヘテ中並ニ家多人數ノ衣食ヲ辨ズルハ容易ノ事ニアラズ、困窮ノ状態、日ニ益逼迫スルニ  
及ビテ、他ニ財源ヲ求ムル途モナケレバ、已ムヲ得ズ庫ニ戸前ヲ啓キ、藏書、藏軸、家具、什器ヲ鬻ギテ、窮阨ヲ支  
持シタリシガ、廢校當時ニ及ビテハ、逸史、詩律兆、通語、非物、非微、瑣語、質議篇等ノ板木ヲ始トシテ、思ヒ切ッ  
テ遺藏品ヲ賣却シ、以テ僅ニ窮迫ノ家計ヲ支ヘタリ、板木賣渡ノ書類、

永代賣渡申板木之事

一 逸史全十三冊 半株

詩律兆 非物非微 瑣語 質疑篇 各半株

右板木株拙家藏板ニ取持來候處 此度代金ヲ以約定七拾五兩ニ相極 其元江永代賣渡し 金子慥ニ受取申候處實正也

然ル上者 右板行ニ付 外方より聊故障申者毛頭無之 爲後一札 仍而如件

明治二年巳十一月 中井修二

加賀屋善藏殿

右同願

二通ニ認渡 中井修二

河内屋吉兵衛殿

覺

一 拙家先代著述通語全三冊 兼而藏板致度趣ニ而 副本所望有之 任其意則譲リ渡候所 相違無之候 就夫爲謝義  
金拾兩贈リ被下致受納候爲證 仍而如件

明治二年巳十一月 中井修二郎

天満屋善九郎殿  
河内屋吉兵衛殿

覺

一 拙家先代著述社倉私議全兼而藏板被致度趣ニ而副本所望有之任其意則譲リ渡候所 相違無之候 就夫爲謝義金壹兩贈リ被下致受納候爲證依而如件

明治二年巳十一月 中井修二郎

河内屋吉兵衛殿

碩果一代ニ蓄積シタル圖書什器モ、一朝ニシテ散佚スルニ至レリ、桐園書院ノ經營ニ力ヲ致シ、先業維持ノ爲ニ勞セシコト如何バカリナルヲ知ラズ、豈好ミテ家傳ノ書器ヲ鬻ガンヤ、此ノ間ノ苦衷局ニ當ル者ニアラズシテハ測度スベカラズ、並河教授ハ專ラ學藝ノ事ヲ任ジテ理財ノ途ニ通ゼズ、懷德堂ノ財政窮迫シテ救フベカラザルニ至リテモ、一ニ桐園ノ料理ニ任セテ更ニ關知セザル者ノ如シクナリシ故、桐園ノ書器ヲ鬻グヲ聞キテハ、先業保護ノ責任ヲ盡サザル者トシテ喜バズ、書籍中竹山ノ題簽アル者ナドハ書林ヨリ買ヒ戻シテ並河家ノ藏書ト爲シタル者モアリ、此等ノ書ニハ左ノ詩ヲ題ス、

及泉盡粥書、況存祖手迹、翁兮馴書肆、償供寒濤籍

九々翁題

寒泉ノ手ニ買ヒ戻サレタルモノハ、幸ニ世上ニ散逸スルヲ免レタレバ、其先哲ノ遺業ヲ擁護スルノ厚キハ我等ノ感刻ニ勝ヘザルトコロナレドモ、桐園ノ鬻書ノ苦衷モ亦眞ニ骨ヲ削ル思アリシナリ、但兩者ノ意志疎通セズシテ、寒泉ヲシテ不快ノ念ヲ抱カシメシハ憾念已ム能ハズ、

右ノ如ク桐園ガ書器ヲ鬻ギシコトハ寒泉ニハ善ク納レラザリシガ、此ノ間ノ事情ニ通ズル者ハ已ムヲ得ザル事トシテ同情ヲ寄セタリ、但シ當時桐園ガ若廣ク同志親戚等ト謀リ、運用宜シキヲ得シナラバ、假使書器ヲ竭盡ストモ、書院ノ維持ハ如何ニカ立チシナランニ、ト慨嘆スル者モアリタリ、

家藏ノ書器ハ多ク散逸シタレドモ、懷德堂ヲ引キ拂ヒテ本庄村ニ遷ル時、尚移轉ニ廿八日ヲ費シ、本庄村ノ土藏ニ入レキラス者ハ一二ノ親戚ニ預ケタリシガ、其後盜難ニカ、リタル者モアリ、賣却シタル者モアリテ、現存セル者極メテ少シ、唯貴重品トシテ、先哲手書ノ遺著類ヲ存留セルノミナリ、

### ○懷德堂ノ遺跡

懷德堂ノ遺跡ハ、明治二年ノ冬油掛町ノ質屋天満屋善九郎ニ金參百兩ヲ以テ譲リ渡スコト、ナリ、其後多年間元形ノ儘ニテ空屋トナリ居タルガ、逸見氏ノ手ニ渡ルニ及ビテ、門牆ヲ壞チテ、長屋ヲ建造シ、講堂其他ハ元形ノ儘ニ區劃ヲ施シテ借家ト爲シタリ、其後ノ消息ハ詳ニ知ルヲ得ザリシガ、何年頃ニカ全部ヲ取り壞チテ、今ノ煉瓦造ノ高屋ヲ見ルニ至レリ、懷德堂ヲ引キ拂ヒテ本庄村ニ移轉セシハ、明治二年十二月廿五日ト覺ユ、

### ○懷德堂廢滅後ノ桐園

桐園ハ明治二年十二月懷德堂閉鎖ノ後、六年二月マデ本庄學舎ニ於テ家塾ヲ繼續セシガ、同年三月九日、大坂府下第三大区三番校即江南小學校ノ教師ト爲リ、八年六月二十九日ニ準五等訓導ヲ拜命シ、同九年九月十四日一級訓導補ト爲リ、九年十月二十五日五等訓導ニ進メラレタリ、是ヨリ先本庄村ヨリ老松町ニ移リ、後又江戸堀南通ニ移リテ、學校勤務ノ餘暇ニ好德學院ト稱スル私塾ヲ開キ居リシガ、後學校ヲ辭シ、専私塾ニ教授シテ、十四年終焉ノ時ニ至レリ、上述ノ如ク桐園ノ半生涯ニハ、文庫ノ建立、逸史上梓、學校改築計畫等、多々有望ノ事件アリシガ、其ヨリ後ハ懷德堂ヲ頹勢ノ間ニ維持シテ、遂ニ廢校ノ否運ニ遭遇シ、爾後ノ餘生ヲ僅ニ小學訓導ニ甘ンジテ、家計窮迫ノ間ニ歿スルニ至レリ、故ニ其死去襄事ノ際、河内ノ親戚稻垣謙藏（菊堂）ガ桐園ヲ追懷シテ「誠ニ御苦勞ナル生涯デアッタ」ト語りシガ、斯ノ一語眞ニ能ク桐園ノ生涯ヲ言ヒ盡セリ、桐園絶筆ノ詩、

庚申歲晚

送窮窮叵去、天命慨其嘆、歲旦今將改、無除此患難、

辛巳新正

茅屋臘塵積、令春未覺春、只從時俗禮、口祝歲舉新、

右ノ二首ハ、余及ビ交游諸氏ニ頒タント欲シテ、幾通カ書シ畢リシガ、幾モナクシテ病ヲ發シ、一月廿九日ヲ以テ歿セリ、其襄事録具ハラザレバ、之ヲ畧ス、

○懷德堂助教

寒泉時代ニ懷德堂ノ助教ヲ勤メタルハ、寒泉ノ男蟹街、稲垣菊堂、藤戸寛齋（今木積一路）山村卯之助ノ四人ナリキ、蟹街ノ事ハ寒泉遺事ニ載ス、

稲垣菊堂、山村卯之助亦已ニ卒ス、

藤戸寛齋河内ニ現存ス、

逡巡碑ハ來書ノ如ク雙鈎墳墨ニテ此ヲハイイシズリト云フ、名物六帖ニ出ヅ、其中ニハ出處モ舉ゲタレドモ、座右ニ是ノ書ナク、且記憶ニ存セズ、シカシ雙鈎墳墨ト云ヒテモ字中ニ墳墨スルニハアラズシテ、字ヲ白ノマ、殘シテ周圍ニ墳墨シ之ヲ普通ノ墨本ノ如ク見スルナリ、逡巡碑ト名ヅケタルハ墨帖ノ如ク石面又ハ板面ニ刻シタル者ナラバ、サホド深ク注意セズトモ、自カラ凹處ニ墨ノツク恐ナケレドモ、雙鈎墳墨ハ平面ノコト故、字畫ノ曲線ノキハマデ墨ヲ塗リユキタラバ、其以上ニハ進マレズシテ、筆鋒ヲアトシザリセシメザレバカナハズ、周圍皆コノヤウニシテツクル

故ニ、カク稱フルナルベシ、併シ是ハ全ク愚按ノミナレバ、當否ハ保シガタシ、又逡巡竹碑トハ、蘭洲自筆ノ竹ヲ履軒ガ雙鈎墳墨ニシタルモノニテ、竹畫ノ逡巡碑ナリ、之ヲ掛軸ニシテ、履軒自ラカク題籤ヲ付シタリ、因ニ記ス、蘭洲ハ善ク竹ヲ畫ケリ、他ノ圖ヲ作ラズ、履軒ノ逡巡碑ニシタル、蘭洲自筆ノ竹ハ懷德堂屏風ノ張交ノ中ニアリタリ、袖園手記ノ中ニ逡巡碑法ヲ記セリ、左ノ如シ

逡巡碑

鍊屑好醋調寫白紙上將墨塗紙背候 乾拂去鍊屑 以黃占楷光即似碑本  
 又 一説ニ鍊醬ニテ書スル也 藝ヲ入暫クオドモラシフチノ清ミタル所ニテ書スル也 堅キ紙ハ惡シ ボツコリトシタル紙ガヨシ  
 以膠礬寫字紙上候乾却用柿油磨墨塗

右ハ何ノ書ヨリカ寫シオキタル者ナルベシ、コレハ幼時寒泉翁ノ話ニモ聞キ自分モ試ミタルコトノアリシ法ニテ、雙鈎墳墨ニハアラズ、履軒ノ法ハ今傳ハラ子ドモ、恐ラクハ此ノ法ニハアラザルベシ、コノ法背後ヨリ墨ヲ塗ルトアレドモ、履軒ノ逡巡碑ハ表面ニヌリタリ、且刷毛ノアトモ見ユレバ、筆先ニテ墳墨シタリトモ思ハレズ、因リテ察スルニ、雙鈎ノ中ニ鍊屑好醋或ハ蠟ナドヲ施シ置キ、之ヲ板面ニ貼付シテ、普通ノ如ク墨ヲ塗リタルニハアラズヤト考フ、履軒遺事拾遺

○左九羅帖畫觸エカク

履軒ハ動植物ニ付キテモ一見識ヲ具フ、其著ニ左九羅帖及畫觸二本アリ、世人ガ動植物ノ本義ヲ辨ゼズシテ、名稱ヲ混亂セシメタルヲ慨シテ、古ヲ考ヘ今ニ徴シテ、適當ノ名ヲ定メタリ、之ヲ圖ニ顯シテ、名稱ヲ題シタル者ヲ左九羅帖ト曰フ、畫觸ハ其釋名ノ書ナリ、左九羅帖ト題シタルハ、卷首ニ「サクラ」ヲ出シタル故ナリ、「サクラ」ニ付キテハ、竹山ニ櫻字ノ説アリ、石窩ニ櫻字辨アリ、共ニ櫻ノ字ヲ取ラズシテ、海棠ノ稱ヲ正シトナス、然ルニ獨履軒ハ



海棠説ニ從ハズシテ、「カバザクラ」「カニバザクラ」ハ世中ノ「サクラ」ノ母ナリトテ、樺ノ字ヲ當テタリ、司馬相如ノ賦ニ華楓柀櫨トアルハ「サクラ」ノ事ナリト曰ヒ、又六朝ノ江南ノ道宮瓊華觀等ヲ舉ゲテ證ト爲セリ、其他「ウグヒス」ニ青鳥、「カウライウグヒス」ニ黃鳥ノ字ヲ用井、「フキ」「アフヒ」「サキクサ」ニハ葵、「ヤマブキ」ニハ款冬ノ字ヲ用井、「ユフ」ニハ木綿ノ字ヲ當ツルヲ正シカラズトシテ、穀ノ字ヲ用井タル類ナリ、又卷中ニ富士山扶桑木ニ關スル説ヲ掲ゲ、富士ヲ蓬萊山、又ハ不二山、博山ト稱シ、よもぎの山、よもぎがみね、ひろ山、ひろね、神山ナド、我ヨリ古ヲ爲シテ斯ク稱フルモヨカラント云ヘリ、扶桑木ニモ得意ノ説アリ、信濃國その原ノふせ屋ニテ見タリト云フ籒木モ、扶桑木ナリト云ヘリ、扶桑木ノ説ハ亦弊帚續編ノ扶桑匣記ニ見ユ、

○弊帚ノ編次

履軒弊帚ハ舊稿六卷アリ、斯ノ中ヨリ節約シ、又増補シテ、履軒弊帚一卷、弊帚續編一卷、弊帚季編一卷ト爲セリ、之ヲ弊帚ノ正本ト爲ス、舊稿中ニハ、正本ニ採録セラレザル者亦多クアリ、是ノ故ニ世上ニ行ハルル寫本ニハ、舊稿ニテ傳ハレルモアルベク、他ニ異本モナキニアラザルベシ、明遠館叢書中ニ収メタル弊帚ハ、新舊イヅレニモ同ジカラズ、サレバ均シク履軒弊帚ト題シタル中ニモ、編次マチ／＼ナレバ、弊帚ヲ不朽ニ傳フルニハ、先ヅ正本ニ就キテ次第ヲ定メザルベカラズ、

○四茅議

履軒ノ著書中ニ浚河茅議 弊帚續編 均田茅議 恤刑茅議 攘斥茅議アリ、之ヲ四茅議ト稱ス、均田攘斥ノ二茅議ハ散亡シテ存セズ、浚河茅議ハ淀川治水策ナリ、今ハ新淀川モ開鑿セラレ、毛問ノ閘門モ設ケラレタレバ、其必要ハナカルベシト雖、直接大阪ニ關係ノアルコトナレバ、履軒傳中ニ記載アリタキ者ナリ、

○履軒言行中ノ拾遺

履軒ノ孝子順孫ヲ敬重愛撫セシコト、亦甕菴竹山ノ如シ、其遺品ニハ鈴鹿ノ孝子萬吉ガ手折ノ菊花 懷德堂先哲反故帖ニ貼

附セリ、革島ノ孝子義兵衛ノ屋椽ニテ造リタル手拭掛ナドアリ、コレハ竹山ノ孝女初手織木綿ノ手拭ト共ニ一雙ノ珍ト爲スベシ、

履軒ガ釋大典ト關係アル逸話ノアリタルヤウニ記憶ス、或ハ先哲叢語中ニナキカ、大典ノ北禪詩草ニテモ見タナラバ、何カ取ルベキコトアラント思ハルレドモ、座右ニナケレバ知りガタシ、

#### 袖園遺事拾遺

袖園ノ門人ニ伊藤升菴アリ、今舊籠中ニ於テ其壙誌ヲ發見セリ、此ハ石窩ノ遺稿中ニマジリタレドモ、恐ラクハ石窩ノ作ニアラザルベシ、左ノ如シ、

#### 道靖伊藤君壙誌

君諱信之、字升菴、伊藤氏、小字六藏、號金澤、以字稱、考春達君、妣市原氏、世家大阪、業醫、受學于袖園反求二先生、善詞章、旁綜衆藝、特以篆刻者、受法于中川蝸堂、有出藍之稱、又私淑前川虛舟、頗極精妙、爲人滑稽多智、好諧謔、汎愛容衆、與人交、清濁無所失、娶族人之女、生三男二女、皆夭、以寬政八年丙辰三月廿一日生、以天保二年辛卯四月朔卒、享年三十有六、及卒、其妻有身、三閱月生男、曰萬吉、乃立爲嗣、私諡曰道靖、葬府城南天王寺口繩阪珊瑚寺先塋之次、



# 「懷徳堂史跡マップ」について

二〇〇九年三月、インターネット上に「懷徳堂史跡マップ」が公開された。「懷徳堂史跡マップ」とは、懷徳堂に関連する史跡を紹介するコンテンツである。本稿では、その作成経緯と具体的な内容について報告する。

## 一、「懷徳堂史跡マップ」の作成経緯

「懷徳堂史跡マップ」は、懷徳堂記念会創立百周年事業の一環として、湯浅邦弘教授（大阪大学大学院文学研究科）の指示のもと、二〇〇八年の夏より制作を開始した。これまで懷徳堂に関連する史跡について個々に書かれたものはあっても、それらをまとめて地図と共に紹介したものはなかった。そこで、イン



草野友子

ターネット上に懷徳堂の史跡を示す地図を公開することになったのである。

「懷徳堂史跡マップ」は、年度ごとに段階的に更新する予定であるが、まずは作業に着手した二〇〇八年度を第一期として、その詳細を報告していきたい。

URL: <http://www.letosaka-u.ac.jp/kaiokudo/historicmap/index.html>

「懷徳堂史跡マップ」作成の際、基礎資料としたのは『懷徳堂事典』(湯浅邦弘編著、大阪大学出版会、二〇〇一年)の第八章「懷徳堂関係施設」である。これを基に、さらに調査を進め、第一期では三十箇所を関係史跡として提示した。史跡についてはすべて実地調査を行った。実地調査と写真撮影は、大阪大学の学生が行った。

#### 第一期・調査メンバー

(括弧内は、二〇〇八年度当時の所属)

草野友子 (大阪大学大学院生、中国哲学研究室)

金城未来 (同)

中村 翼 (同、日本史学研究室)

南浦孝之 (大阪大学文学部学生、中国哲学研究室)

懷徳堂は建物自体が現存せず、記念碑が残るのみである。そこで、第一期では大阪府内に数多く残る懷徳堂ゆかりの人物の墓碑を中心に調査を行った。また、他の私塾の跡地や、懷徳堂に関する資料を所蔵する図書館や博物館などの関係施設も史跡として取り上げることとなった。

#### ■史跡一覧(第一期)

(大阪・大坂)

・記念碑 懷徳堂旧趾碑、重建懷徳堂跡

・墓碑 神光寺(三宅石庵・春楼の墓)、誓願寺(中井一族墓所)、九品寺(五井持軒の墓)、実相寺(五井蘭洲の墓)、浄春寺(麻田剛立の墓)、善導寺(山片蟠桃の墓)、隆専寺(早野仰斎・橘隧・思斎の墓)、万福寺(三村崑山の墓)、梅松院(越智高洲・片山北海の墓)、西照寺(富永芳春・仲基の墓)

・私塾 含翠堂跡、洗心洞跡、泊園書院跡、適塾

・施設 大阪大学附属図書館、大阪大学懷徳堂記念会事務局、大阪大学懷徳堂センター、大阪大学総合学術博物館・待兼山修学館、大阪大学中之島センター、大阪府立中之島図書館、池田市立歴史民俗資料館

市立歴史民俗資料館

〔関西〕

- ・兵庫県 たつの市立龍野歴史文化資料館、照円寺、投石
- ・京都府 伊藤仁斎宅（古義堂） 跡並びに書庫、冷声院
- ・奈良県 古梅園

〔全国〕

- ・東京都 湯島聖堂 昌平饗・昌平坂学問所

## 二、「懷徳堂史跡マップ」(第一期)の構成

「懷徳堂史跡マップ」は、懷徳堂の主な史跡を Google Map と連動させ、インターネット上に表示するというシステムである。このシステムの作成は、凸版印刷株式会社の協力を得た。

構成は、メイン画面である「地図」、関係史跡をまとめた「史跡一覧」、モデルコースを表示した「おすすめルート」の大きく三つに分けられる。

### (1)「地図」

「大阪」「関西」「全国」に大別して表示され、それぞれの史跡について写真付きで解説する。

「大阪」「関西」「全国」別の地図は、それぞれ地図左上のバーをドラッグすることにより、拡大・

縮小ができる。さらに、Google Map の特性を活かし、「地図」「航空写真」「地図＋写真」の三種を閲覧することができる。





地図上のマークをクリックすると、下部に詳細な解説と関連写真が表示される。また、地図上の吹き出しに簡易説明が表示される。



### 懐徳堂旧陸碑(かいとくどうきゅうしひ)

旧懐徳堂の校舎跡に建てられた石碑。大正七年(1918)、重建懐徳堂の竣工を記念して、旧懐徳堂跡(現在の大阪市中央区今橋3丁目)に建てられた。書村天因の撰文、中井末免麻呂(つぐまろ)の揮毫(きご)による。昭和三十七年(1962)、日本生命本店ビルの新館に併い、同ビルの上層階に移された。碑文の向かって右側に、次のような由来が記されている。

この地は徳川時代の学校として名高い懐徳堂の跡である。享保十一年の開学から明治二年の閉校まで百四十十年の間、大阪文教の中心であった。大正の初年に先達の偉業を顕彰して記念会が設立されたので、当社も協賛してこの碑を建てた。撰文は記念会の創設者書村天因(あまのふみ)先生、揮毫は懐徳堂第二代の学生中井末免麻呂先生の中井先生である。碑文は次の通り(原文は漢文)。

懐徳堂は—に大阪学園所とす。享保十一年、塾長中井先生、同志五人と前に請いで出に創設せざるもなり。石庵、鶴軒、春林、竹山、鹿軒、積果、寒泉、和園の諸先生相繼いで字を譲じ百四十余年を距たりしが、明治二年堂廢せられ、創設(きご)の遺(あ)とを後世に遺し四十余年なり。大正五年主人(あまのふみ)謹(いは)かり復興(ふく)欄(らん)の上(た)は(と)りに重刻し、志を遂げ(と)る(あ)まのふみ)の(あ)まのふみ)復興(ふく)とす。是(こ)に於て(あ)まのふみ)を旧地(ふる)に建て(た)る(あ)まのふみ)して(た)る(あ)まのふみ)所有(しゅ)する(あ)まのふみ)なり。大正(たいし)西(せい)村(むら)時(とき)常(じょう)浪(なみの)中(なか)井(い)先生(せい)書(か)日本(にっぽん)生命(せいめい)株式会社(こうがいしや)

所在地: 大阪市中央区今橋3丁目  
アクセス: 市営地下鉄「淀屋橋」駅B番出口より徒歩5分



The screenshot shows the 'Historic spots map 史跡マップ' website. The main content area is titled '史跡一覧' (List of Historical Sites) and is filtered to show '大坂・大阪' (Osaka). The list includes sites such as 懐徳堂旧跡 (Historic Site of Haidokudo), 重徳懐徳堂跡 (Historic Site of Shunokudo Haidokudo), 浄光寺・三宅石庵・春桂の墓 (Joukyou-ji, Miyake Ishian, and Harakiku's Tomb), 聖徳寺・中井一族墓所 (Seitoku-ji and Nakai Family Graveyard), 九品寺・五井掛針の墓 (Kushin-ji and Iwai Kageharu's Tomb), 聖徳寺・五井蘭洲の墓 (Seitoku-ji and Iwai Ranshu's Tomb), 浄光寺・山片蟠桃の墓 (Joukyou-ji and Yamakata Hantou's Tomb), 隆興寺・早野信宗・蟠桃・忠清の墓 (Ryokou-ji, Hanano Nobumasa, Hantou, and Chikage's Tomb), 万福寺・三村崑山の墓 (Manbutsu-ji and Sanmura Kunyama's Tomb), 梅松院・越智高洲・片山北海の墓 (Umatsuyama-ji, Echigo Takashima, and Katayama Hokoku's Tomb), 西照寺・富永芳春・仲茂の墓 (Seisho-ji, Tomonaga Yoshimasa, and Nakamasa's Tomb), 正徳院・龍閑月の墓 (Shintoku-in and Ryunkangetsu's Tomb), 念學堂跡 (Nenagaku-za), 洗心閣跡 (Senzin-kan), 泊瀬書院跡 (Shimozura Shoin), 心学明誠会跡 (Shinko Meicho Kai), 通徳 (Toudoku), 大阪大学附属図書館 (Osaka University Affiliated Library), 大阪大学懐徳堂記念会事務局 (Osaka University Haidokudo Memorial Association Secretariat), 大阪大学懐徳堂センター (Osaka University Haidokudo Center), 大阪大学総合学術博物館・待兼山修学館 (Osaka University Comprehensive Academic Museum and Makimiyama Study Hall), 大阪大学中之島センター (Osaka University Nakajima Center), 大阪府立中之島図書館 (Osaka Prefecture Nakajima Library), 大阪市立中央図書館 (Osaka City Central Library), 大阪市立歴史民俗資料館 (Osaka City Museum of History and Folklore), 大阪ハリストス正教会 (Osaka Holy Spirit Orthodox Church), 清原寺・豊野三平旧邸 (Kiyohara-ji and Toyonobu Sanpei's Former Residence), 小戸薬園・中井木菟麻呂の墓 (Kodou Yakuen and Nakai Usuramaru's Tomb), 龍野城 (Ryuno-jo), たつの市立龍野歴史文化資料館 (Tatsuno City Museum of History and Culture), 円光寺 (Enkou-ji), 興門寺 (Koumon-ji), 興福寺 (Koufuku-ji), 歌楽館 (Kagaku-kan), 安土藩 陣幕跡・開講寺 (Aizu Domain Campsite and Kaikou-ji), 杉坂峠 (Sugibatake), 投石 (Tsuetsuki), 伊藤仁斎 (古斎堂) 跡並びに墓所 (Ito Nisai (Kosai-do) Site and Graveyard), 沓声院 (Kawabiki-in), 長宗寺・魏山閣の墓 (Choson-ji and Wei-shan-kan's Tomb), 高山彦九郎・豊原経彦の墓 (Takayama Hichiro and Toyoharunobu's Tomb), 古徳園 (Kotoku-en), 瀬島聖堂 高平賢・高平坂守旧所 (Seyama Seido, Takayama Takayoshi and Takayama Sakamori's Former Residence), ニコライ堂 (東京復活大聖堂) (Nikolai-do (Tokyo Resurrection Great Church)), 稲荷子母碑 (Inari no Ura no Ishi).

(2) 「史跡一覧」

関連史跡を一覧にまとめ、それぞれの所在地とアクセス方法を紹介している。左側が目次となっており、項目をクリックすると、右側に該当箇所の情報が表示される。

(画像は第二期(二〇〇九年度)更新版のもの)



おすすめルート

### 懐徳堂史跡「墓碑めぐり」

大阪市内には、懐徳堂に関連する人物の墓碑が数多くあります。  
大阪を散策しながら、懐徳堂ゆかりの人物を訪ねてみてはいかがでしょうか。

左側にモデルコース、右側にそれに対応する地図を表示しています。モデルコースの登録の名称をクリックすると、別のウィンドウで解説が表示されます。

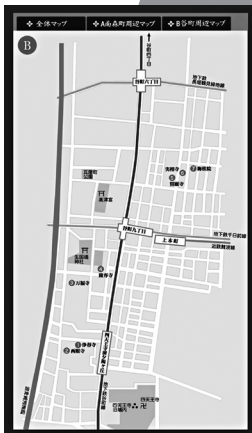
- 出発地：阪急・梅田駅 徒歩7分
- 東梅田駅 徒歩7分
- 地下鉄谷町線・B駅 徒歩4分
- 西天王寺前夕陽ヶ丘駅 徒歩4分
- 浄寿寺・麻田蘭立の墓 大阪市天王寺区夕陽丘町 徒歩3分
- 西照寺・富永芳春・仲基の墓 大阪市天王寺区下寺町 徒歩5分
- 万福寺・三村嘉山の墓 大阪市天王寺区下寺町 徒歩4分
- 隆寿寺・早野仰高・橘屋・忠富の墓 大阪市天王寺区生玉町 徒歩15分
- 隆福寺・中井一族墓所 大阪市北区生玉町高木丁目 徒歩10分
- 美相寺・五井嘉洲の墓 天王寺区上本町5丁目 徒歩3分
- 梅松院 越智富洲 片山北洲の墓 大阪市天王寺区南森町 徒歩15分
- 谷町六丁目駅 徒歩6分
- 南森町駅 徒歩6分
- 善導寺・山片輝焼の墓 大阪市北区与力町 徒歩2分
- 九段寺・五井隆軒の墓 大阪市北区南1丁目 徒歩20分
- 東梅田駅 徒歩7分
- 別業地：阪急・梅田駅

【見どころ】  
 谷町線の駅名である繁盛川口は、中井隆興・竹山・川軒・東園・橘屋・柳園、並河亮泉など、懐徳堂関係者の墓、498基が埋蔵されています。  
 懐徳堂記念堂が南森町に立地している「懐徳堂」は、この繁盛川口で付われています。  
 また、南森町は、井筒雄助の墓があることで有名です。

(3)「おすすめルート」  
 懐徳堂の史跡を効率よくめぐるためのモデルコースを提示している。第一期では、懐徳堂史跡「墓碑めぐり」をおすすめルートとして提示した。大阪市内には懐徳堂にゆかりのある人物の墓碑が数多くあり、その場所が密

集しているためである。

密集地である南森町周辺をA、谷町周辺をBとし、それぞれ詳細な地図が表示されるようになってい



### 三、第二期（二〇〇九年度）の作成

第一期（二〇〇八年度）作成の際に残った課題は、①さらに史跡の調査を進めて点数を増やす、②「史跡一覧」からメイン画面（「地図」）にリンクできるようにする、③おすすめルートを増やす、の三点である。①については、大阪府内であっても諸般の都合で調査に行けなかった史跡が多数あった。特に重建懷徳堂に関する史跡は、第一期ではほとんど入れられなかった。また、大阪にある史跡を最優先としたため、関西・全国の史跡が非常に少なくなってしまった。②は、システム上の問題でできなかったことである。③については、おすすめルートが一つしか提示できなかったためである。

それを受けて、二〇〇九年夏より第二期作業が始まった。調査メンバーは、矢野隆男教授（四天王寺大学人文社会学部）と草野友子（日本学術振興会特別研究員）の二名である。

第二期では、関係史跡十六箇所を新たに追加した。懷徳堂と深い関わりのある土地や、懷徳堂と交流を持った人物に関する史跡なども加えられている。

#### ■史跡一覧（第二期追加分）

（大坂・大阪）

- ・墓碑 正通院（部関月の墓）
- ・私塾 心学明誠舎跡
- ・施設 大阪市立中央図書館（木村兼葭堂邸跡）、大阪ハリストス正教会、涓泉亭（萱野三平旧邸）

（関西）

- ・兵庫県 小戸霊園（中井木菟麻呂の墓）、龍野城、円光寺、興福寺、敬業館、安志藩陣屋跡・開善寺、杉坂峠
- ・京都府 長楽寺（頼山陽の墓）、高山彦九郎・皇居望拝之像

（全国）

- ・東京都 ニコライ堂（東京復活大聖堂）
- ・岡山県 稲垣子華碑

また、新たなおすすめルートとして、「中井履軒『昔の旅』〜孝子稲垣子華を訪ねる道〜」（調査・作成・矢野野教授）を提示している。これは、中井履軒が実体験にもとづいて著した紀行体の物語『昔の旅』に描かれた場所や、懷徳堂にゆかりのある土地をたどるといふものである。

さらに、システム面で問題となっていた「史跡一覧」と「地図」とのリンクが実現されるに至った。

調査や作業には時間と労力がかかるが、内容を逐次更新できるといふHPの利点を生かし、継続した更新を行っていけば、充実したマップとなっていくであろう。

ただし、インターネット上に公開するのみで止まってはならない。「懷徳堂史跡マップ」の情報に基づいて実際に史跡を散策する場合、現段階ではその情報を逐一印刷するか、閲覧者自身でメモを取るといった方法しかない。したがって、今後はこの「懷徳堂史跡マップ」のデータを元に作成した、「紙」媒体でのマップの作成が必要となろう。

「懷徳堂史跡マップ」の「地図」をクリックすると、大阪府内の多くの史跡ポイントが出現する。これは、大阪府内に数多く史跡があることを視覚的に示していると言える。「懷徳堂史跡マップ」は、懷徳堂の足跡を辿るための手段として、ここに誕生したのである。

書評『ニコライ堂の女性たち』（中村健之介・中村悦子著、教文館、二〇〇三年）

三 谷 拓 也

本書は、明治から大正にかけて、創立期の日本正教会で活動した七人の女性信徒たちの伝記である。

本書の「まえがき」にもあるように、ロシア正教会を母体とする日本正教会は、日露戦争、ロシア革命、東西対立などの時代の荒波の中、困難な歩みを続けざるを得なかった訳だが、そのような中であって教会を支え続けたのは、多くの女性信徒たちだった。しかし、その大半の女性たちの名前も人生も、共に忘却の淵に沈んでいる。本書では、特に正教会の創立期に顕著な働きを成した七人の女性信徒たちについて、丹念な調査の積み重ねによって光を当て、彼女たちの存在を、日本のキリスト教受容史、女性史の中へ再位置づけしようと試みている。信仰そのものには客観的な距離を保ちながらも、それぞれの女性たちの「ことを聞きたい、それを、できることなら過去からいまへ解き放ちたい」と願う著者たちの

共感に満ちた姿勢が、本書を優れた伝記としている。

なお、巻末には人名索引、陰陽露曆対照表、年譜が付されている。また、本文の各所において貴重な写真、家系図などが多く掲載されている。注も詳細である。

本書が懷徳堂と関係するのは、第七章が、懷徳堂最後の学校預人を務めた中井桐園の子である木菟磨（一八五五～一九四三）と、その異母妹に当たる終子（一八七七～一九五五）の伝記に充てられているためである。特に終子は、教育の分野においても、また懷徳堂の遺物および記録保存においても大きな働きを成した人であったが、これまで多くを語られることがなかった。

本稿では、主に本書の第七章（執筆は中村悦子氏）によりながら、木菟磨・終子兄妹の正教会内における活動に焦点を当てつつ、本書の記載について訂正および補足を心がけ、合わせて木菟磨がニコライ（俗名イヴァン・

ドミートリエヴィチ・カサートキン、一八三六〜一九一  
二)と共訳した正教聖典の特徴について私見を述べてみ  
たい。

## 生い立ち

木菟磨と終子の生い立ちについては、本書でも詳述さ  
れているので、ごく簡単に記しておきたい。二人の父に  
当たる中井桐園(一八二三〜一八八一)は、履軒の孫に  
当たるが、竹山の子である碩果の養子となり、中井宗家  
を継いだ人である。桐園の最初の妻である霜しもは、第六代  
学主並河寒泉(一七九七〜一八七九)の長女である。寒  
泉も、その妻歌うたと共に竹山の孫であったから、つまり木  
菟磨は、父方では履軒の曾孫であり、また竹山の義理の  
曾孫でもあり、母方では竹山の玄孫でもある。桐園と霜  
の間には、續つづ(夭折)、木菟磨、蘭らん(一八五六〜一九四二)  
の三人の子がいた。蘭は最後に至るまで専ら中井家の家  
政に当たった。

明治元年(一八六八)、霜が亡くなったため、翌二年  
一月、桐園は医師小笠原孝治の次女春はるを後妻に迎えた。  
桐園と春の間には、二郎(夭折)、二三(夭折)、終子の  
三子さんごが生まれた。春もまた竹山の曾孫であったから、木

菟磨と終子は異母兄妹であると同時に再従兄妹という関  
係になる。二人の年齢には二二歳もの開きがあるが、中  
井家の血を最も濃く受け継ぐ者として、共に深い繋がり  
を感じていたことは想像に難くない。

懷徳堂が閉校したのは、明治二年(一八七〇)一二月  
二五日であり、この時、木菟磨は一四歳だった。その前  
年の明治元年七月一九日に助教であった叔父並河蟹街たんがいが  
二〇歳の若さで亡くなっており、その一週間後の七月二  
五日には母霜が三九歳で亡くなっている。「少年木菟磨  
にとつて明治という新しい時代は、激しい時代による不  
安の上に、最も身近な者の死と自家の滅亡という悲運が  
重なってはじまったのだった。」(本書四四五頁)

この時、木菟磨の心に抱かれた深い悲哀が、やがて懷  
徳堂復興の熱望となり、後年の正教信仰と並んで、木菟  
磨の内面に「激しい精神的緊張」を強いたとの本書の指  
摘は、恐らく正しいであろう。木菟磨自身は「己巳殘愁  
録」に当時の感慨を綴っている。

懷徳堂の閉校後、並河、中井両家は北本庄村に移転し、  
家塾を開いた。しかし、寒泉は明治三年(一八七〇)三  
月から、四女豊とよの嫁ぎ先である淡輪たのわ家に移った。西洋嫌  
いで、明治になっても鬻うりを結っていたという寒泉は、木  
菟磨の正教への入信に対して憤りつつ、明治一二年(一

八七九)二月八日、八三歳で亡くなった。

木菟磨は祖父寒泉と同居を共にしていた。木菟磨が父桐園ではなく寒泉と同居していたのは、幼時より寒泉から漢学の手ほどきを受けて馴染んでいたこともあっただろうし、木菟磨自身が寒泉の人柄を強く慕っていたことも一因であろう。木菟磨の理想家肌で、精神的な物事に没頭しやすい性格を考えると、穏やかであった父桐園よりも、むしろ悲憤慷慨を事とし、赤穂浪士を慕って木刀を身辺から離さなかつたという寒泉との気質の類似が感じられる。

一方の桐園は、明治六年(一八七三)まで家塾を続けていたが、同年三月に招聘を受けて江南小学校の教員となり、教員辞職後は南江戸堀に家塾「好徳学院」を開き、同一四年(一八八一)一月、五九歳で亡くなった。終身は、その間の明治一〇年(一八七七)三月二四日(戸籍上は一三日)、北区梅ヶ枝町に生まれている。

木菟磨はその後、大阪府師範学校(大阪教育大学の前身)に入学し、第一期生として卒業後、小学校の教師を務めた。このことには、父桐園の影響もあったろうし、往時の懷徳堂が初等教育の場としての役割も担っていたことを考えれば、新時代の儒者にとって小学校教員はまさに己の才を生かし得る職業の一つだったのである。

なお、本書には「天王寺の師範学校」を卒業したとあるが、大阪府師範学校が天王寺に移るのは明治三四年(一九〇一)である。明治七年(一八七四)五月、現在の中央区南御堂に「教員伝習所」が設立され、翌年八月に「大阪府師範学校」と改称、明治一〇年(一八七七)二月まで同所にあつたので、木菟磨は恐らくここに通つたのではないだろうか。通学期間は一年間であつたというから、およそ二十歳前後で小学校に奉職し、明治十一年(一八七八)三月に洗礼を受けるまで、三年間ほど教員として勤務したことになる。

### 正教への入信と『回天新報』の発行

大阪で正教の伝教が始まったのは、明治七年(一八七四)、笹川定吉(元仙台藩士)によるという。この時には何の成果も得られなかつたというが、明治一〇年(一八七七)に橘公威が、同郷の肥前大村藩士であつた長與貫一に教えを伝え、それから大阪に正教が広がつたとされる<sup>④</sup>。

これは推測なのだが、この長與貫一という人は、同じ大村の藩医の子で、適塾に学び、医薬制度の確立に尽力した長與専齋(一八三八〜一九〇二)と同族で、やはり

医家の一族だったのではないだろうか。<sup>⑤</sup>

明治十一年（一八七八）三月三日（大阪正教会所蔵「メトリカ（洗礼簿）」には三月二日とある）、木菟磨を含めた三五名（三三名、三六名ともいう）が大阪で初めて正教の洗礼を受けたが、これらの信徒は、自らの集まりを「聖パンテレイモン会」と名付け、今橋通淀屋橋東にあった増井亀次郎の洋式薬局「精々舎」を仮教会とした。聖パンテレイモンは医師であったと伝えられ、医薬業の守護聖人であるから、この会の命名は、当初の正教信徒に医薬業者が多かったことを自ずと証しているのではないか。

木菟磨が入信したきっかけは、懷徳堂内に同居していた医家の古林家の出である、古林見蔵の勧めによるという。つまり、長與貫一が医家の一族であったとすれば、当初、医薬業者を中心に正教の信仰が広がったのであり、そこから古林見蔵を通じて懷徳堂の人々へも伝えられたのではないだろうか。本書では、土佐の自由民権運動の関係者から木菟磨に正教の信仰が伝えられたのではないかと推測しているが、むしろ医薬業者を通じての可能性が高いのではないだろうか。

また、この時に同じく洗礼を受けた萱野一平は、赤穂浪士萱野三平の子孫に当たる人だが、萱野家はやはり懷

徳堂の門下でもあった。<sup>⑥</sup>（子孫の和子は、後に終子の養子となって中井家を継ぐことになる。）

さて、先述した今橋の仮教会が、明治十二年（一八七九）に道修町五丁目（樋口宅に移り、明治十五年（一八八二）には天満橋南詰石町一丁目にあった旅館三橋楼跡の地所に壮麗な聖堂（戦災で焼失）が建立されたことを思えば、いわゆる船場一帯の、特に資産家や医薬業者、知識層などの間において、小さな形であれ正教徒のコミュニティがあったのではないかと推測されるのである。<sup>⑦</sup>

こうして正教に入信した木菟磨は、同時に小学校の教員も辞職したのだが、当初、教会内で信仰生活に専念するつもりはなかったようである。

洗礼を受けた同年の明治十一年（一八七八）八月、自由民権運動の土佐立志社による「愛国社再興大会」が大阪で開かれ、それに影響を受けたのか、同年九月二十七日、木菟磨によって『回天新報』と名付けられた政論雑誌が発行されている。内容に宗教的なものはなく、純粹な政治誌である。北崎豊二氏の論文では、『回天新報』に掲載された木菟磨の政治論は未熟でありながらも、経術による社会改革を重視した懷徳堂の学風を受け継いでいることが指摘されている。

翌一二年（一八七九）五月一三日、木菟磨は安土町の自宅で「天楽書院」（「天楽」は曾祖父履軒の号）と名付けられた私塾を開いている。この命名からも、木菟磨の家塾復興の願いが若年時から変わらぬものであったことが知られる。

しかし、同年七月には正教の公会で副伝教者に指名されたことにより、信仰生活に専念することを決心したのである。『回天新報』の編集は人に譲り、私塾も閉め、伝教担当地へ移住することになった。当初は大阪で伝教を開始しようだが、『ニコライ日記』一八八二年六月八日および一二日によれば、明治一三年（一八八〇）、教会の命により和歌山へ、同年一〇月には加古川へ移住した。

### 播磨地方での布教と東京への移住

加古川に居を移した木菟磨は、加古川（じけ寺家）、三木、小野、社など、東播磨各地で熱心に伝教を続けた。明治一五年（一八八二）六月八日、加古川へ巡教にやって来たニコライは木菟磨に対し、すぐ東京に来て自分の手伝いをするよう促したという。この日の『ニコライ日記』は残されており、木菟磨の名前が初めて現れる日でもある。

パウエル中井は毎月寺家町と小野町と横山とに分けて滞在している。しかし、これらの地のどこにも、いまだでは一人の新しい聴教者もない。かれは每晚八時ごろに信徒向けに講義を行っている。集まるのは四、五人。いまはマトフェイ（「マタイ」）に因る聖福音の講釈をしている。「中略」中井は近い将来に、ここで成功を収めるだろうとは見ていない。「中略」加古川滞在中はイオシフ木村の家に厄介になった。かれのところには伝教者（木菟磨）も世話になっており、祈祷のために集まる部屋もある。伝教者は在宅ではなかった。かれは見当違いの方向にわたしを迎えに行ったのだ。

残念ながらこの日の日記に、木菟磨の東京行きに関する記述は見られない。しかし、実際に中井家は翌月に上京しているので、ニコライの招聘は事実だったと考えざるを得ない。

では、なぜニコライが特に木菟磨の名前と教養を知った上で、自らの聖典翻訳の伴侶として選んだのか、という疑問が浮かぶ。本書ではその遠因を、嘉永七年（一八五四）九月、国交締結交渉のため来日したエフィーミイ・ヴァシーリエヴィチ・プチャーチン（一八〇三〜一八八



三)の率いる軍艦ディアナ号が、前触れもなく大阪湾に出現した事件に求めている。

この時、懷徳堂の並河寒泉と中井桐園が幕府から接待掛を命じられ、海上の小船でロシア方通訳官と漢文で応対した。この事件については、寒泉によって『拝恩志喜』と題された漢文にまとめられており、懷徳堂では幕府から拝領した白銀の目録を台に載せたまま保管し、毎年それを出して記念していたという。恐らく木菟磨もこの逸話について、祖父や父から問わず語りに幾度も聞いていたことだろう。<sup>三三</sup>

一方、この時に中国語通訳としてロシア艦隊に同行していたヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチ(一八一四〜一八七五)は、後に初代駐日領事として函館に赴任し、その領事館付き司祭として来日したのがニコライである。ニコライは、恐らくゴシケーヴィチから過去の興味深い逸話を色々と聞いていただろうし、後述するように中井竹山の『逸史』も読んでいたため、懷徳堂についても著名な儒学の家として聞き知っており、そのため木菟磨を自らの翻訳事業の伴侶として選んだのかも知れない。

また、明治一二年(一八七九)三月、ニコライが聖堂建立に向けた資金調達のためロシアへ一時帰国した際、

プチャーチンに家族同様に親しく迎えられ、その後も熱心な支援を受けているから、プチャーチン本人からも様々な逸話を聞かされたことだろう。

続いて本書では、いよいよ一家が東京に発つ直前になって、木菟磨が家族を説得して正教に入信させたところが、これは思い違いではないだろうか。

大阪正教会所蔵「メトリカ」によれば、明治一五年(一八八二)四月一六日の項に、中井春と中井秋の洗礼の記録がある。住所は「大阪府下北桃谷町三十七番地」とある。ここにある「中井秋」とは、聖名がワルワラ、年齢が六年とあるから、終子に違いない。つまり、終子の本名は「秋」であり、終子の名は後の改名ではないのだろうか。更に言えば、この改名後の「終」の文字には、自らが中井家の血統の最後となる自覚と覚悟が、強く込められているのではないだろうか。この終子の名前の問題について触れた文献は、本書も含めて管見には入らなかったもので、ここで一言記しておきたい。

さて、『ニコライ日記』一八八二年(明治一五)六月一三日には次のようにある。先に引用した加古川を発つてから五日後である

八時にイアコフ神父とともに執事やしかるべき他の

者たちの訪問に出かけたが、けつきよく、訪問できたのはアヴラム長与(わたしが洗礼を施した者で、どうやらないへん裕福に暮らしているらしい)と、伝教者パウエル中井の母(これは四、五歳になる娘と住んでいる。家族はこれだけ。亭主は昨年亡くなったのである)と、執事が一人だけ。しかし、このうちあとの二人は不在。中井の母は教会に行っており、  
〔後略〕

この記録からも、ニコライから上京の要請があった時点で、春が既に洗礼を受けていたことが知られる。「四、五歳になる娘」とは終子、「昨年亡くなった亭主」とは桐園に違いない。また、ニコライが中井家を「しかるべき者たち」として考え、わざわざ自ら訪問しているのは、注目すべきことであろう。

一家の上京に際しては、終子の母方の小笠原家から強く反対されたというが、木菟麿の熱意と一家の信仰心が勝ったのであろう。明治一五年(一八八二)八月一日発行の『教會報知』第四〇号には、「敝社員中井」による、ミトロファン楊吉を送る五言詩「追賡王維送秘書晁監韻送密德羅芳神父還清」が掲載されているため、既にこの時期には、木菟麿が東京本会で活動を始めていたことが

知られる。

木菟麿の正式な身分は「愛々社(正教会の出版部)社員兼ニコライ主教の翻訳協力者」であった。月給は明治二九年(一八九六)の時点で二五円とある。明治三三年の小学校教員の初任給(諸手当なし)が一〇円から一三円、正教会の伝教者の月給は一五円、司祭は三五円であったというから、中井家のおおよその暮らしぶりは想像がつく。女性三人を養いながらの家計は、決して豊かではなかっただろう。

### ニコライと木菟麿による 正教聖典の翻訳

正教は元来土着化する傾向の強いキリスト教であり、今日の各国正教会においても、それぞれが現地語による聖典を持ち、現地語で奉神礼を行うのが原則である。これは、東ローマ帝国が周辺諸民族に伝教する際、聖典をギリシャ語からそれぞれの現地語に翻訳して以来の伝統で、ラテン語を「神の言葉」として不変のものとしていたカトリックとは、著しく対照的である。

また、カトリックやプロテスタント諸派とは異なり、正教会が自ら宣教団を派遣して積極的に伝教を行うこと

は稀で、移民による自然的伝播か、あるいは聖職者個人の篤志による場合が多い。日本に初めて正教を広めたニコライも、当初はあくまで個人の発意に基づいていた。文久元年（一八六一）六月六日、ニコライが来日した当時はキリシタン禁制であり、立場はあくまでも函館領事館付きの司祭でしかなかった。しかしニコライの目標は、当初から日本人の自治による正教会を日本の地に立ち上げることであった。

ニコライは、アラスカ（当時はロシア領）でアリュウト語により原住民に伝教したインノケンチイ（一七九七〜一八七九、後にモスクワ府主教となる）から、正教の日本への土着化を図るため、日本語を学ぶよう強く勧められた。ニコライはその後の伝教に備えて、八年間に渡り多くの教師につきながら、四書五経を初めとする漢籍や仏典、歴史書などを参考として、漢文と日本語、および日本の歴史や文化、諸宗教の学習を続けた。

D・M・ボズニエーフの指摘によると、ニコライは日本の歴史を学ぶに当たり、『大日本史』、巖垣松苗『国史略』、頼山陽『日本外史』、中井竹山『逸史』などを参考にしたという。<sup>二五</sup>すなわち、ニコライは来日間もない時点で、既に中井家と懷徳堂の存在について知っていたのである。同時に『古事記』と『日本書紀』の原典も学ん

ているが、『古事記』をニコライに教えたのは、若き日の新島襄（一八四三〜一八九〇）である。

ニコライの漢文読解力は抜群で、他の外国人より遙かに抜きん出ていたと言うが、後に木菟麿と共に漢文訓読体によって聖典翻訳を行ったのは、こうしたニコライの素養による所も大きいだろう。

正教の日本への土着化を図るには、聖典の日本語訳が不可欠である。明治元年（一八六八）一〇月、インノケンチイ宛の書簡<sup>二六</sup>によれば、当時、ニコライは新約聖書の大半と、聖史略、教の鑑、教理問答、小祈祷書などを漢文から、啓蒙礼儀と帰正式を教会スラヴ語から翻訳している。一部は石版印刷によって刊行されたものもあったが、大部分は恐らく試訳の段階に止まるものだったろう。

実際に当時の正教徒に用いられていたのは、清国正教会によって同治二年（一八六三）に刊行された教理書『東教宗鑑』、および同治三年（一八六四）刊行の新約聖書『新遺詔聖經』、あるいは上海美華書館により同年刊行のプロテスタント旧新約聖書などの、漢文テキストであった。初期の正教信徒は、士族や医師など儒教的教養を身に付けた者がほとんどであったから、こうした漢文聖典を読みこなすことができたようだが、当然白文であるため、読解には困難を伴った。

祈禱書や教理書の刊行が続く一方で、聖書本文の翻訳において、正教会は大きく出遅れていた。<sup>(二七)</sup> 明治二年（一八七九）に完成したプロテスタント訳による新約聖書が、その後の日本文化に大きな影響を与えたことは周知の通りである。しかし、外国人でもあるニコライにとって、独力で膨大な聖典を和訳することは不可能であつたらうし、それにはどうしても有能な助手が必要だつた。こうして正教会の聖典翻訳が焦眉の問題にならうとしていた時、木菟麿に白羽の矢が当たつたのだつた。

明治二年（一八八九）、ニコライと木菟麿により、前述の上海美華書館版プロテスタント新約聖書に訓点とロシア語読みを付けた『訓点新約聖書』が発行され、実際に教会の奉神礼においても使用された。なぜプロテスタントの漢文聖書を用いたのか不明であるが、それが日本語として表現が熟したものではなく、訳語の正当性も保証できないことは間もなく明らかになつたのだらう。結局、明治二年（一八九五）九月二日より、二人は自らの手で一から新約聖書の翻訳を始めることになつた。同日の『ニコライ日記』には次のようにある。

夕方六時からわたしとパウエル中井は自分たちの仕事（新約聖書の翻訳だ。マトフェイ〔マタイ〕に

よる聖福音）の翻訳を始めた。最初の一六節を翻訳した。つまり名前を書き写したのだ。わたしたちは長い間「福音経」と新約聖書の題を考えていた。また「息子」を「子」と訳すか「裔」と訳すかなど話し合つた。

翌九月三日には次のようにある。

パウエル中井といつしよに、朝は七時半から一二時まで、夜は六時から九時まで聖書の翻訳をした。これは毎日規則的に続けられるので、今後このことについて言う必要もない。

一方、木菟麿の『黄裳齋日記』同年九月二日には次のようにある。

往来 ○午前八時升堂受業初ノ祈禱ニ豫ル ○終リテ后主教ニ如ク翻譯ハ今夜六時ヨリ初ムベシトノ「ナリシヲ以テ直チニ歸ル〔中略〕 ○午后六時露館に如ク

業務 本日ヨリ初メテ新約經翻譯ノ業ニ就ク

木菟麿の回想録「大主教ニコライと私」(『正教時報』昭和一七年九月号)によれば、上京してすぐの明治一五年(一八八二)九月より、毎日変わらぬ翻訳作業が始められたと書かれているが、思い違いであろう。二人の日記からも分かるように、正しくは、明治二八年(一八九五)より、ニコライ死去の年に当たる明治四五年(一九一〇)に至る、約一五年間である。

明治二九年(一八九六)一二月八日、新約聖書の翻訳は一年四か月足らずで一旦完了した。その日の『ニコライ日記』にはこうある。

テキストをしつかり理解し、わかりやすく表現するために、ありとあらゆる方法を使った。われわれの前には、三種のギリシヤ語版、二種のラテン語版、教会スラヴ語版、ロシア語版、英語版、フランス語版、ドイツ語版、三種の漢訳版、日本語版、ロシア語と英語の注釈書、そしてありとあらゆる注釈書を揃えてあり、毎日毎日、ほとんど毎時間これらを掘り返して調べたものだ。簡単に言うと、細心の注意をつくして翻訳したのだが、それでもたいして良い出来栄えではないのだ。

翻訳の完了後も、二人は推敲に長い時間をかけた。まず、ロシア語の聖書辞典から言葉を抜き出し、それに対応する日本語訳を定め、用語を統一した。また、聖典は奉神礼の中で詠まれ歌われるものでもあるから、二人で朗読しながら確認も行っている。

『ニコライ日記』には、翻訳に伴う多くの逸話が記されている。例えば、司祭の佐藤秀六(元漢学者)が、「読マザリシカという用法は間違いで、シの後はやが正しい」と言った所、木菟麿は「カが正しい」と主張し、二人で論争を始めている。(一九〇〇年四月六日)

木菟麿はまた、結合接続詞「ト」は最後の名詞の後にも置くのか置かないのか、あるいは「居レリ」という用例は正しいのかどうか、という問題について、新井白石や「自らの先祖で学者としても有名な中井一族の著作」、あるいは旧幕時代の用例などを渉猟し、更には、大槻文彦、林甕臣、落合直文といった著名な国語学者を實際に訪問した上で質問している。結局、落合の説により、「ト」は最後の名詞の後にも置く、「居レリ」は誤用、という結論に落ちついている。(同年一月九日、一〇日)

こうした二人の苦勞が実り、明治三四年(一九〇一)、新約聖書の翻訳は、『我主イエススハリストスの新約』と題して発行された。

ここで、ニコライと木菟磨の訳による新約聖書の文体の特徴を伺うため、その翻訳の元となったギリシヤ語原文、および参考とされたロシア語訳と漢訳、更に他の和訳の代表としてプロテスタント訳を併記して、考察してみたい。<sup>19</sup> 引用箇所は、マトフェイ（マタイ）に因る聖福音、第五章、第三および八節である。

ギリシヤ語原文

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι, ὅτι αὐτῶν ἔστιν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν. … μακάριοι οἱ καθαροὶ τῆ καρδίας, ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὄψονται.

ロシア語訳（宗務院訳、一八六七）

Блаженны нищие духом, ибо их есть Царство Небесное. … Блаженны чистые сердцем, ибо они Бога узрят.

漢訳（『新遺詔聖經』、グーレイイ・カルポーフ訳、一八六四）

神貧者爲福、因天國係伊等所有。…心淨者爲福、因伊等將得見天主。

ニコライおよび木菟磨訳（一九〇一）

神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

…心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

プロテスタント訳（一八七九年、一九一七年改訳）

幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。…幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。

まず冒頭の句について見れば、ギリシヤ語原文とロシア語訳は、いずれも倒置構文による強調表現を取っている。この倒置構文を生かそうとしているのが、プロテスタント訳の「幸福なるかな、心の貧しき者」だが、結果として原文にはない句点を挿入している。逆に漢訳とニコライ・木菟磨訳は、句読点も原文に忠実にしており、結果として倒置構文の模倣は放棄している。

また、漢訳とニコライ・木菟磨訳は、希 πνευμα (高位の霊的実在) に当たる言葉を「神」、希 καρδια 露 (低位の精神的活動) に当たる言葉を「心」とし、訳語を対応させているが、一方のプロテスタント訳では、この箇所について両者とも「心」としており、訳し分けはしていない。

更にニコライ・木菟磨訳では、いわゆる「神」について、「天主」「上帝」といった漢語は用いず、「神」という和語を採用している。そのため、「神」と「神」とい

うように、振り仮名によって意味の弁別を行っており、苦心の跡が偲ばれる。

人称については、ギリシヤ語原文もロシア語訳も明らかに複数であり、漢訳は「伊等」、ニコライ・木菟磨訳は「彼等」と、その点も忠実に訳されている。しかし、プロテスタント訳では「その人」とあり、曖昧な訳となっている。

一般にプロテスタント訳は、文法的に忠実な訳であろうとするよりも、むしろ日本語の表現における分かりやすさ、歯切れの良さなどを求め、その文体が読者に対して力強く訴えかける力を得ることに努めているように見える。

一方のニコライ・木菟磨訳は、むしろ訳語の精確さを追求している。例えば「…なればなり」「…すればなり」という語句は、日本語としてややくだい表現に思われるが、これは、希ゴ<sup>3</sup> 露<sup>3</sup> *mo* (なぜなら〜だからだ) という接続詞の意味を、精確に反映させようとする意図に基づいているのである。

他にも、ニコライ・木菟磨訳が難解に思われる理由として、例えば「神」「福」などの漢訳聖書に影響を受けた用語や、その独特な漢文訓読体が挙げられる。こうした点については、当時から批判もあった。『ニコライ日記』

一九一〇年(明治四三)三月二日には、『祭日経』の翻訳に関して、次のように記されている。

わたしと中井はこの翻訳が気に入っている。どうして気に入らないことがあるう！ 自画自賛といったところか。しかし、全部が全部、皆に理解できるものとは言えない。多くの箇所は、漢字がわかる者なら、それを見て理解するだろうが、耳で聴くと、学問のある者さえ、どの箇所でも意味がすぐわかるというわけにはゆくまい。学問のない者には理解できないことが多いだろう。教会スラヴ語のテキストが、多くの点で、ロシアの平民たちには理解できないのと同じように。だがどうすればよいのだろうか。どうして、だれにでもわかる和語を採用できるだろうか。どうしても漢語を取り入れざるをえない。しかし、そのかわり、われわれの訳の場合、目で読む場合にはすべてが明瞭だ。言わんとするところは水晶のように透明で、すべて説明し解釈することができる。

意外に思われるかも知れないが、ロシア語による聖書が初めて出版されたのは、ようやく一八六七年になって

からである。現在でもロシア正教の奉神礼では教会スラヴ語が用いられており、聖職者であるニコライにとって、聖典の文体が荘重古雅な古典語によらねばならないのは、自明のことであった。

ニコライは、H・M・ポズニエーフに対して、次のように語ったという。

わたしは、福音書や奉神礼用諸書の翻訳が大衆の教育程度まで降りてゆくべきではなく、逆に、信者たちが福音書や聖体礼儀用諸書のテキストを理解できるところまで昇ってゆくべきだと考えているのです。福音書に卑俗な言葉を用いるのは認め難いことです。

つまり、ニコライと木菟磨は、ギリシャ語やスラヴ語の原典に忠実な翻訳を追求しつつ、一方では、その成果をいかにして荘重古雅な漢文訓読体によって綴っていくのかという困難な課題に対して、長年に渡って取り組み続けたのである。

そして、このような長期に渡る二人の訳業を支えていたのが、実は日本語に対する信頼と愛情であった。『ニコライ日記』一八九七年（明治三〇）五月一日日には次

のようにある。

わたしと中井にとって、日本語は聖書を翻訳するのに十分な言語である。「中略」日本語は、この偉大にして発達した国民が万象を、そして万象について、表現する手段として過不足ない。

ニコライと木菟磨が翻訳した聖典の数々は、完成から百年以上を経た今も、日本中の正教会で読まれ、唱えられ、歌われ続けているのである。

### 終子の活動と「楓幃女塾」の開設

中井家が上京した際、終子はまだ五歳に過ぎなかった。上京して間もなくの明治一五年（一八八二）九月より、終子は自宅に近い東京女子師範学校附属幼稚園に入園した。その後、同小学校に進学したが、成績優秀のため飛び級をしてから体調を崩したため、ニコライの勧めもあり、明治一九年（一八八六）九月より正教会附属の東京女子神学校に編入学した。

終子は明治二六年（一八九三）七月に一六歳で東京女子神学校を卒業し、そのまま教師になることを勧められ



た。しかし、自ら未熟であるとして辞退し、自宅で二年間修養を積んだ後、同二八年（一八九五）九月より母校の漢文および東洋史の教師となった。

他のキリスト教、特にプロテスタント諸派においては、先進の欧米文化や英語習得を魅力として入信する者が多かった。それに比べて正教では、先述したようにニコライ自身が日本の古典文化や漢学に対して深い知識と愛情を持っていたため、附属の神学校では依然として伝統的教養の充実が図られていた。そのような環境の中、儒家の末裔である木菟麿と終子は、正教会内で深い尊敬を受けていたのである。

終子は教職以外にも、様々な活動を展開している。例えば、それまで沈滞気味であった女性組織「正教婦人矜恤会」の事務局を自宅に移し、煩瑣な事務を自ら引き受けて、各地に援助金を送るなどしている。日露戦争時には「恤兵通信隊」の組織を図り、明治三九年（一九〇六）には、新しく設立された「基督正教婦人会」の主任幹事にも選ばれている。

また、明治二五年（一八九二）より明治四〇年（一九〇七）にかけて、木菟麿が責任者となって女性文芸誌『裏錦』が発行された。終子もまた『裏錦』に和歌や漢文随筆などを投稿している。大半は教育論や道德論である

が、「夢謁履軒先生記」（一〇五号）、「蕉園中井先生略傳」（二二〇号）などは、懷徳堂との関係からも興味深い内容である。また、履軒の『老婆心』が八二号に翻刻掲載され、あるいは表紙裏に懷徳堂先賢遺稿の抜粋が毎号掲載されていた時期もあり、二人が東京の正教会内にあっても、『裏錦』によって懷徳堂の顕彰を忘れなかったことは、注意すべきであろう。

終子はまた、同僚で佐々木信綱門下であった酒井澄子（本書第四章参照）と共に歌会「夕秀舎」を自宅で主催し、会員の作品を『裏錦』に掲載した。こうした終子や澄子の薫陶もあり、当時の女子神学校の卒業者は、みな作歌が一人前にできるようになったという。

こうした中で特に注目されるのは、自宅における「楓樟女塾」の開設であろう。『裏錦』一一〇号（明治三四年一二月）に掲載された開設広告は、本書にも引用されているが、重要であると思われるので重ねて以下に載せる。

わが家五世儒を業とし弦誦渝らざること一百四十余年なりしが明治二年懷徳堂院帷を撤してより以来講學の業廢すること久し家兄黃裳先業の紹がざるを悲み懷徳堂院を大阪に水哉館并に水哉館女学を京都に重建せむと欲し明治二十六年其意見書を發して四

方の贅褻を求めたりといへども時否にして事業成立せず且其奉ずる所の翻經の聖業も亦廢すべからざる者あるを省みて遂に其志を減するに至りしが不肖黃離この間に生長して時正に女學の興隆するに會ひ自ら其淺劣なるを忘れ私に家兄の志を繼ぎて女子教育の爲に力を効さむと欲し茲に家兄が監督の下に一女塾を開き小より大に及ぼして建學の日を見むことを期す其育養の道は概重建水哉館意見に載する所に從ひて家兄の初志を實行するにあり有志淑女の來學を俟つ

ここで触れられている木菟麿の『重建懷徳堂意見』『重建水哉館意見』によれば、木菟麿は懷徳堂を男子教育の場に、水哉館を女子教育の場にする計画を立てていた。<sup>101</sup>『裏錦』一一一号に掲載された木菟麿の漢文「送洛汭五子」を読むと、明治三五年（一九〇二）二月、漢学の弟子であった高橋五子<sup>いね</sup>（本書第六章参照）が舍監となつて開設された京都女子神学校について、あたかも水哉館の再興であるかのように喜んでいる。また『重建水哉館意見』には、女流文学を盛んにして女性の精神を高める計画が書かれているが、『裏錦』の発行には、こうした木菟麿の意向が強く働いていたと考えられる。

このように、「楓幃女塾」の開設については、終子もまた兄木菟麿と共に家塾復興の希望を持ち、中井家嫡流としての強い自覚を抱いていたことが知られるのである。なお、「楓幃女塾」の「楓」の由来についてであるが、終子の随筆「妓女蘿」（『裏錦』一一七号）によれば、実際に中井家の借家の庭には楓が生えていたようである。これは、木菟麿が聖典翻訳の記念に植えたもののように、最後は石町の大阪正教会に移し替えられたが、戦災で焼けてしまったという。

明治二八年（一八九五）二月一日に書かれた終子の随筆『ちるもみちはの記』<sup>102</sup>の「はしかき」には次のようにある。

紅波隨風兮逐浪、豈丹心兮願作、噫噫草芥兮與とは、わが曾祖なる履軒の君が楓を詠じたまひたるからうたの詞にて、これを熟紙にかきすてたまひたるが吾が家に残れるを、このごろ兄の君ふるきほんごのうちよりとりいでて、楓はながめづるものなるを、曾祖の君が御筆の殊更にこれのみ残りたらんは、なに珍きゆかりやあらんとてたまひつ。おしいたぎでうくる心のまたかく嬉しきままに、いかでこに因みて、かく大和の言の葉つづらばやとおもひぬれ

ど、才たらぬ身のかびいづべくもあらねば、いまはただ忘れぬためとて、こを吾が楓幃の記號には用ひぬ。

履軒の漢詩集『履軒古風』<sup>(三四)</sup>巻四には、確かに「楓賦」と題された古体詩が載せられている。その冒頭は次のように始まる。

何衆木之參差兮 何ぞ衆木の參差として  
 見蒼蒼之無私 蒼蒼の無私たるを見んや  
 物随性而不撓兮 物は性に随ひて撓まず  
 各呈妍而獻媚 各妍を呈して媚を獻ず

ただ外見が美しいのみならず、撓むことなく凛として立つ楓の姿に、終子は自らの理想を託していたのであるうか。

この「楓幃女塾」には、主に正教徒の子女が通ったようだが、注目すべきは、終子が多くの清国留学生をも生徒として受け入れ、あるいは交流していたことであろう。深い漢学の素養と、キリスト教に基づく平等愛の思想を兼ね備えていた終子を慕って、三〇名以上の留学生が集まった。その中には、後に民国政府の要人となった曹汝

霖、鈕永建や、革命家の程家樺、詩人の蔣智由など、多くの優れた人々の名前が見られる。

終子の「楓幃女塾」は、懷徳堂との関係のみならず、女性教育史や、日中文化交流史の面からも注目すべき存在であろう。

## 懷徳堂の復興

木菟磨と終子が、懷徳堂の遺品保存に心を砕き、結果としてそれらが散逸を免れて今日まで引き継がれてきたことは、既にこれまでの研究でも明らかにされている。<sup>(三五)</sup>一家が上京した際、木菟磨は遺品の大半を東京へ運び、一部は縁戚の淡輪家に預けた。東京では、ニコライの許しを得てそれらを主教館の一室に保管し、一部の貴重資料は慎重を期して帝国博物館に寄託した。

木菟磨が正教信仰と並んで生涯追い求め続けたのは、先祖の営んだ懷徳堂および水哉館の復興であった。明治二十六年（一八九三）の復興計画については先述したが、木菟磨は「己巳殘愁録」に当時の状況を述べている。

その後は明治廿六年に重建懷徳堂意見五十條を作りて、書院創立の百七十年、寛政再造の一百年で

ある明治廿八年を期して、再興を企てた事があつたが、然るべき後援者もなく、方法も極めて拙劣であつたばかりでなく、或一のさはりとなつた事もあつた。それは、余は孔教を尊崇すると共に基督正教を信奉して、教育上に特殊の意見を立て、基督正教を經となし、孔教を緯とするでなければ、完備なる教育は成立たない、今の世に當りて、孔教己を死守して、他を顧みないものは、孔道の本旨を得た者でない、といふ意見を持つてゐたので、所謂認識不足の人々には、之を容るゝほどの器量を具へてゐなかつたので、遂に實行不可能の事となつてしまつた。

明治二十六年当時の『重建懷徳堂意見』には、次のようにある。

余之所以欲施乎懷徳書院之倫理道德法、有二焉。曰、聖教道德法、曰、儒教。聖教以爲本、儒教以爲支。聖教謂何。曰、救世主耶穌基督所宣之道也。是人之所以不敢取焉、而余之所取也。

木菟磨にとつての「懷徳堂」「水哉館」とは、単に過去に存在した家塾の模倣ではなく、ましてや後の重建懷

徳堂のように、広く大阪市民に漢学や東洋学を学ぶ機会を提供する學術機関でもなかつた。それは、儒教とキリスト教が融合した、人格練磨のための信仰と道徳教育の場として構想されていたのである。後に木菟磨と重建懷徳堂の人々との間に越え難い溝ができたのは、重建懷徳堂を中井家の家塾の後継とするか否かの問題と共に、木菟磨の教育に対する理想論も関係していたのである。

明治四一年（一九〇八）、木菟磨は知遇のあつた重野安禪（一八二七～一九一〇）の紹介で、重野の弟子であつた西村時彦（号は天囚、一八六五～一九二四）に懷徳堂先賢公祭の助力を請うた。これがきっかけとなり、遂に同四四年（一九一〇）には記念祭典が開かれ、大正二年（一九一三）には財団法人懷徳堂記念会が設立された。この記念祭典について、『ニコライ日記』一九一一年一〇月五日には次のようにある。

大阪ではきょう、大阪市の由緒ある学者の家系である中井家を記念して、盛大な集会や演説などが行われた。中井家の学者たちは、わたしと共同で翻訳をしているパウエル中井の先祖である。かれは数日前に大阪へ発ち、記念館に収めるため、先祖の遺品をすべて持つていった。わたしは、われわれ二人が

作った聖書と奉神礼用諸書の翻訳も、すべて記念館に持っていったらどうかと、かれに勧めた。これは、かれの先祖らの学問的業績を継いだ立派な成果と言つてよいものだろう。しかし、中井は前もって記念会の主催者から許可を得ずに、そうしたものを持ってゆくのは、気がとがめると言っていた。どうやら許可は下りなかったようで、かれはこちらから持つてゆく本を求めてこなかった。それでも、わたしは、翻訳局記者のペトル石川〔喜三郎〕にそれらの本を持たせて、大阪へ行かせると申し出た。ほかの演説者らによる中井の先祖らへの賛辞がすべて終わったあとに、石川に中井について結びの演説をしてもらうためである。つまり中井は、現存している中井家の子孫でありながら、別の方面で、すなわち異教ではなくキリスト教の場で仕事をしているために、敬われていないのにちがいないからだ。

この短文には、正教会と重建懷徳堂の間にあって引き裂かれている木菟磨の立場が、良く表されている。また、ニコライが木菟磨の翻訳を「先祖らの学問的業績を継いだ立派な成果」と記しているのは、興味ある指摘ではないだろうか。『回天新報』であれ、聖典翻訳であれ、『裏

錦』であれ、それらは全て木菟磨という特異な個性を通して現れた、懷徳堂の精神的遺産の一部なのかも知れないのである。

## 終わりに

紙幅の関係で詳しくは触れられなかったが、明治四五年（一九一三）二月一六日のニコライの死後、木菟磨は翻訳の続行を拒否され、編集業務からも外され、神学校の一教師とされた。終子も衰退する母校に対し断腸の思いで見切りをつけ、一家は帰阪することとなった。木菟磨と終子は共に梅花高等女学校に就職したが、退職後も年金はほとんどなかった。退職後、終子は南刀根山の借家で遂に「水哉館」と名付けた私塾を開いたが、もはや漢学や歌学の教授で生計が成り立つ時代ではなく、それは間もなく閉じられることとなった。

老身の終子が、一家を支えるために職を求めてさまよう箇所は、強く読者の心を打つ。「しかし、不思議なのだが、日記を読んでいると、その旧友や教え子たちの間をさ迷い歩いている老いた中井終子の姿が、確かな生きた存在として感動を与え、われわれに呼びかけてくるのを感じる。」（本書五〇六頁）

これまで断片的にしか語られてこなかった木菟麿と終子の姿が、こうした精緻な調査を踏まえた本書の記述によつて、初めて血の通つた全体像として描かれ得たと言つても過言ではない。そして、本書が単なる事実の羅列に終わらず、二人の誠実な人生を生き生きと描き出し得ているのは、取りも直さず、二人の上に注がれる著者の鋭くもまた温かな眼差しによるものではないだろうか。

懷徳堂の研究からすれば、あるいは木菟麿や終子の人生や活動については、Postscriptに過ぎないのかも知れない。しかし、中井家の末裔である二人の人生には、懷徳堂史のみならず、キリスト教受容史、女性史、教育史、日中・日露文化交流史など、多様な側面から解き明かされるべき問題も多い。木菟麿と終子の残した数多くの日記や記録類は、今もなお読み解かれるべき日を待ち続けているのではないのだろうか。

注

○本稿の各所で引用されている『ニコライ日記』は、全て『宣教師ニコライの全日記』（全九冊、中村健之介監修、教文館、二〇〇七年）からの引用による。日付はグレゴリウス暦による。なお、検索は年月日により容易にできるので、引用箇所の巻数および頁数はいちいち記載しなかった。

(一) 井上了「中井竹山の子女について」『奠陰集』を中心に——『懷徳堂センター報』二〇〇九年 一一五頁。

(二) 『懷徳』一〇号、一九三二年。

(三) 中井終子「ニコライ大主教と中井家との関係（一）」『正教時報』昭和二六年七月十日。

なお、木菟麿の学歴について、大阪教育大学附属図書館に問い合わせた所、当時の資料は全て廃棄されたとのことで、事実確認はできなかった。

(四) 大阪における正教会の伝教過程については、牛丸康夫『大正教会百年史譚』（大阪ハリストス正教会、一九七八年）二一七頁に詳しい。

また、『ニコライ日記』一八八二年六月二二日には、「正教の言葉が最初に伝えられたのは、一八七七年、パウエル新妻

がこの地が伝教に適しているかどうかを見に、パウエル橋を伴って大阪を訪問した時にさかのぼる。新妻が自分の任務で東京に帰ったあと、橋がここに残り、とりわけいまのアヴラム長与に伝教した。」とある。

(五) 牛丸康夫『大阪正教会百年史譚』および本書『ニコライ堂の女性たち』には、長與貫一の名について「長興」と記しているが、誤記である。

大阪正教会所蔵「メトリカ（洗礼簿）」には、最初にアヴラム長與貫一の名が記されている。誕生は文政六年（一八二二）、旧宗法華とある。『ニコライ日記』一八八二年（明治一五）六月一三日には、このアヴラム長与は裕福な暮らしをしているとあるが、残念ながら職業は記されていない。

また、「メトリカ」の同日付には、ダビート長與真造の名が記されている。安政五年（一八五八）生まれ、旧宗法華、肥前國大村平民とあるから、貫一の息子が親族であろう。『ニコライ日記』一八八二年六月一二日には、ダヴィド長與が当時二五歳で、東京の佐々木医院で医学を勉強中とある。

梅溪昇『緒方洪庵と適塾』（大阪大学出版会、一九九六年）一四二―一四三頁によれば、長崎県の適塾入門者には、長與專齋と共に、長與誠一の名が見えるという。誠一も大村藩代々の医官で、專齋の祖父俊達の養子であった。專齋より先に適塾に入門したというから、專齋より年上であったと考えられ

る。また、貫一も專齋より一五歳年上である。貫一と誠一は、同年代で、名前に同じ「一」を共有している所からも、兄弟であるか、少なくとも同族である可能性が高いのではないかと、余談だが、澤邊琢磨（坂本龍馬の従兄）や浦野太藏と共に、日本で最初に正教の洗礼を受けた酒井篤禮とくれいは、同じく適塾の出身であり、その娘の澄子は、後に東京女子神学校の教員として終子の同僚となった。

(六) 『大阪府業百年史』（大阪府業判師会、一九九三年）二二頁の一八七三年（明治六）年表に、「大阪業社有志、オランダ人ドワルスを招いて今橋に化学研究機関精々舎を設立（洋式薬局と呼ばれたが薬品鑑定を行い、製薬法等の薬学教育も実施）」とある。

(七) 中井終子「安政以降の大阪學校」（『懷徳』九号、一九三二年）によれば、懷徳堂の一行が秋の首狩りで箕面に赴いた際は、萱野家で逗留することが習わしであったという。

(八) 木村武夫「浪華畫學校の顛末」（魚住惣五郎編『大阪文化史研究』、星野書店、一九四三年、三七五―四〇一頁）によれば、明治一七年頃、同じ道修町五丁目二七番地に、樋口三郎兵衛（一八六三―一九三三）が「浪華畫學校」を開設している。樋口家は道修町の旧家で、三郎兵衛は他家から養子に入った人だが、明治一三年頃には魁新聞社や樋口銀行の開設にも関わるほどの資産家であった。なお、この樋口三郎兵衛は、明治六

年から明治一二年まで小学校の教員を務めており、时期的には木菟麿の教員時代とはほぼ重なる。ただし、この「浪華畫學校の顛末」には、三郎兵衛の宗旨や信仰には触れられておらず、この「樋口宅」が三郎兵衛のものであったかどうかは未だ確言できない。

(九) 『ニコライ日記』一八八二年六月二日には、当時の大阪における正教徒の実態が詳細に記されており、興味深い。日記によれば、当時の大阪教会の信徒は七一名(二七戸)だった。「わが教派の信徒はほとんどが西区と北区。(南区にはよい家はないので、伝教には適さない。〔下略〕)とあり、このような記述からも、当時、正教に入信した人々の社会階層が推測され得る。

(一〇) 北崎豊二「若き日の中井木菟麻呂―『回天新報』とのかかわりを中心に―」(『大阪経大論集』第四二巻六号、一九九一年)  
 (一一) 北崎氏の同論文によれば、『回天新報』について、明治一二年(一八七九)六月一五日発行の第一六号までは内容が確認できるが、次の第一七号から最終の第二三号までは内容が不明となっており、これは七月の副伝教者就任と時期が全く一致している。

また、同論文に引用されている福良虎雄編『大阪の新聞』によれば、『回天新報』は後に土佐の奇人高崎芳宣といふ人が執筆をしてゐたが、翌十二年九月僅に一箇年間で廃刊を

した。」とあるが、これは副伝教者就任に伴い、木菟麿が一七号以降の編集を高崎芳宣に譲ったという意味に取れば、全て辻褄が合う。

北崎氏は同論文において、木菟麿が『回天新報』の廃刊後に正教に入信したと前後逆に誤解されているが、後に執筆された同氏による論文「中井木菟麿の水哉館再興計画―昭和初年の場合―」(『懷徳』六八号、二〇〇年)では順序が訂正されている。

(一二) デイアナ号の事件、および『拝恩志喜』については、湯浅邦弘「ロシア軍艦デイアナ号と懷徳堂」(湯浅邦弘編『懷徳堂研究』、汲古書院、二〇〇七、三二五―三四四頁)に詳しい。

(一三) 『ニコライ日記』一八九六年五月二日による。木菟麿は、孝行のために月給二五円を全て義母春に手渡し、本人は春から二円しか受け取っていなかったとある。

(一四) 中村健之介「宣教師ニコライと明治日本」(岩波新書四五八、岩波書店、一九九六年)一〇四頁。

(一五) H・M・ボズニエーフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』(もんじゅ選書二五、講談社、一九八六年)七頁。

(一六) 中村健之介「宣教師ニコライと明治日本」四三―四四頁。

(一七) 正教会の聖典翻訳については、牛丸康夫『日本正教史』四五―四九、九一―九四頁、および海老澤有道『日本の聖書―聖書和訳の歴史』(講談社学術文庫、講談社、一九八九年)



三六四～三七五頁を参照。

(二八) 『黄裳齋日記』(大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵、E282)

(二九) 聖書各文の引用元書誌は以下の通りである。

・ギリシャ語原文

川端由喜夫編訳『日本語対訳ギリシア語新約聖書 一 マ

タイによる福音書』(教文館、一九九一年)

・ロシア語訳

Библия. Книги священного писания ветхого и нового завета.

Канонические. В русском переводе с параллельными местами

и словарем. Российское Библийское общество. 2000.

なお、このロシア語訳聖書については、K・И・ロガチョー

フ、中村健之介訳・解説「一八七六年ロシア語聖書」(『窓』

三五号、一九八三年)に詳しい。

・漢訳『新遺詔聖經』

「信望愛信仰與聖經資料中心」ホームページ上のサイト「珍

本聖經數位典藏查詢系統」(<http://cboilinet/new/obd.htm>)

に掲載されている原本画像を参照。

・ニコライおよび木菟磨訳

日本正教会翻訳『我主イエスハリストスの新約』(正教本

会版、一九八五年)

・プロテスタント訳

『舊新約聖書』(日本聖書協会、一九九二年)

(二〇) И・М・ボズニエーフ著、中村健之介訳『明治日本と

ニコライ大主教』六二頁。

(二一) 『裏錦』は、『国立国会図書館所蔵近代日本婦人雑誌集成』

(日本図書センター、一九九二年)の一部としてマイクロフイ

ルム化されている。

(二二) 中井木菟磨『重建懷徳堂意見』(『重建水哉館意見』(大阪大

学附属図書館懷徳堂文庫所蔵、E15およびE19)

なお、木菟磨の懷徳堂および水哉館復興計画については、

北崎豊二「中井木菟磨の水哉館再興計画―昭和初年の場合―」

(『懷徳』六八号、二〇〇年)に詳しい。

(二三) 中井終子『ちるもみちはの記』(大阪大学附属図書館懷徳

堂文庫所蔵、E150・中井終子関係三・三八七)

(二四) 中井履軒『履軒古風』(大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵、

E138)

なお、『履軒古風』に載せられている「楓賦」の詩句は、終

子が『ちるもみちはの記』で引用したものはやや異なる。

抵巇磯而揚紅波。随風兮逐浪。豈丹心兮攸願作。噫嘻草芥

兮與同流。聊任運兮乘化。

終子が見たのは「ほんご(反故)」とあるので、履軒の草稿

だったのであろうか。

(二二五) 中井家の遺品が大阪大学に収蔵された経緯については、竹腰礼子「大阪大学懐徳堂文庫のなりたちと蒐集の経緯」(『懐徳』七〇号、二〇〇二年)、および同「懐徳堂文庫を守った人——中井木菟麻呂翁の功績」(『大阪あーかいぶず』二号、一九八七年)に詳しい。

なお、本稿の執筆に際し、「メトリカ」など貴重資料の閲覧を快くお許しいただいた、ダヴィド水口俊明神父様を初め、大阪ハリストス正教会の皆様方には、この場をお借りして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



『懷徳堂研究』第2号 投稿規定

懷徳堂研究センターでは、『懷徳堂研究』第2号の原稿を下記の通り募集しています。

募集する原稿

- ・ 懷徳堂およびその周辺領域の研究に関する論考。
  - ・ 懷徳堂研究センターの活動に関わる論考。
- 締切
- ・ 二〇一〇年一〇月末日（必着）。
- 枚数
- ・ 四百字詰め原稿用紙に換算して五〇枚以内。
  - ・ ただし目録・翻刻などで大部なものは枚数の超過を認めることがある。

形式

- ・ 打ち出し原稿およびテキストファイル。
- ・ 懷徳堂研究センターへ郵送または直接提出のこと。

採否

- ・ 懷徳堂研究センターによる審査を経て採否を決定し、執筆者へ通知する。

校正

- ・ 著者校正は再校まで。
- ・ 念校は懷徳堂研究センターにて行う。

刊行形態

- ・ 二〇一一年二月刊行予定。
  - ・ 関係機関や研究者に配布する。
  - ・ 刊行物と同内容の電子ファイル(PDF)を本誌刊行一年後から懷徳堂研究センターHPにて公開する。
- 抜刷
- ・ 執筆者には本冊二部および抜刷三〇部を贈呈する。
  - ・ 追加の抜刷を希望の場合は、初校返送時に連絡し、その実費を執筆者が負担する。
- ご不明な点は懷徳堂研究センターまで御照会ください。

懷徳堂研究センター(旧懷徳堂センター) 彙報  
(二〇〇九年一月～二月)

二月二八日 『懷徳堂センター報』二〇〇九を發行。

五月 一日 懷徳堂センターを懷徳堂研究センターへ

改組。職員等は以下の通り。

- ・ センター長 湯浅邦弘(本研究科教授)
- ・ 運営委員長 荒木 浩(同)
- ・ 運営委員 飯倉洋一(同)・湯浅邦弘
- ・ 研究員 池田光子(本研究科助教)
- ・ 職員 井上 了

## 編集後記

平成十一年（一九九九）、大阪大学文学部は、附属施設として「懷徳堂センター」を開設した。文学部内に散在する貴重資料を集約し展示しようというのが主な目的であった。

しかし、展示のための適切なスペースが部内に得られなかったことから、このセンターは事実上、懷徳堂のデジタルコンテンツを展示解説し、懷徳堂研究の拠点として活動するという性格を色濃くしていくことになる。また、大阪大学の創立七十周年記念事業（二〇〇一年）で制作された懷徳堂学舎のCGや貴重資料のデータベースが注目を集め、学内外からの取材を受ける機会が多くなった。また、大阪大学附属図書館からも、資料の調査・出納に関して協力を要請されることしばしばであった。そうした取材や調査に対応してきたのが、このセンターである。

こうしたセンターの実態を踏まえ、平成二十一年（二〇〇九）五月、「懷徳堂センター」が改組され、新たに「懷徳堂研究センター」が発足した。

その目的を、センター規定はこう明記する。「懷徳堂

研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懷徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。

その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懷徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懷徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニュースレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懷徳堂研究の総合サイト「WEB懷徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懷徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懷徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懷徳堂関係資料の調査等の協力

このうち、(2)の『懷徳堂研究』は、旧来のセンターが刊行してきた『懷徳堂センター報』を継承しつつ、装いを新たに創刊することになったものである。『懷徳堂センター報』は、センターの活動報告と論考で構成されており、論考はいずれも学術的に高い価値を持つもので

あったが、「センター報」という名称が、広報誌や内部雑誌ではないのかという印象をも与えてきた。そこで、『懷徳堂研究』は「研究」を全面に押しだし、全国で唯一、懷徳堂の研究を専門に取り扱う学術雑誌として創刊されたのである。

幸い、創刊号は多くの研究者のご支持により、貴重な論考を揃えることができた。第2号以降も、各位のご教導のもとにその使命を果たしていきたい。

（懷徳堂研究センター長 文学研究科教授 湯浅邦弘）

## 執筆者紹介

湯浅邦弘（ゆあさ・くにひろ）

大阪大学大学院文学研究科教授・

懷徳堂研究センター長

田世民（でん・せいみん）

淡江大学（台湾）日本語文学系助理教授

湯城吉信（ゆうき・よしのぶ）

大阪府立工業高等学校准教授

草野友子（くさの・ともこ）

日本学術振興会特別研究員PD

三谷拓也（みたに・たくや）

大阪大学附属図書館職員

## 懷徳堂研究

第1号 平成22年2月28日

編集・発行

国立大学法人大阪大学

大学院文学研究科・文学部 懷徳堂研究センター

〒五六〇―八五三二

大阪府豊中市待兼山町1―5

印刷・製本

株式会社ケーエスアイ

〒五五七―〇〇六三

大阪府大阪市西成区南津守7―15―16



懷徳堂  
研究センター